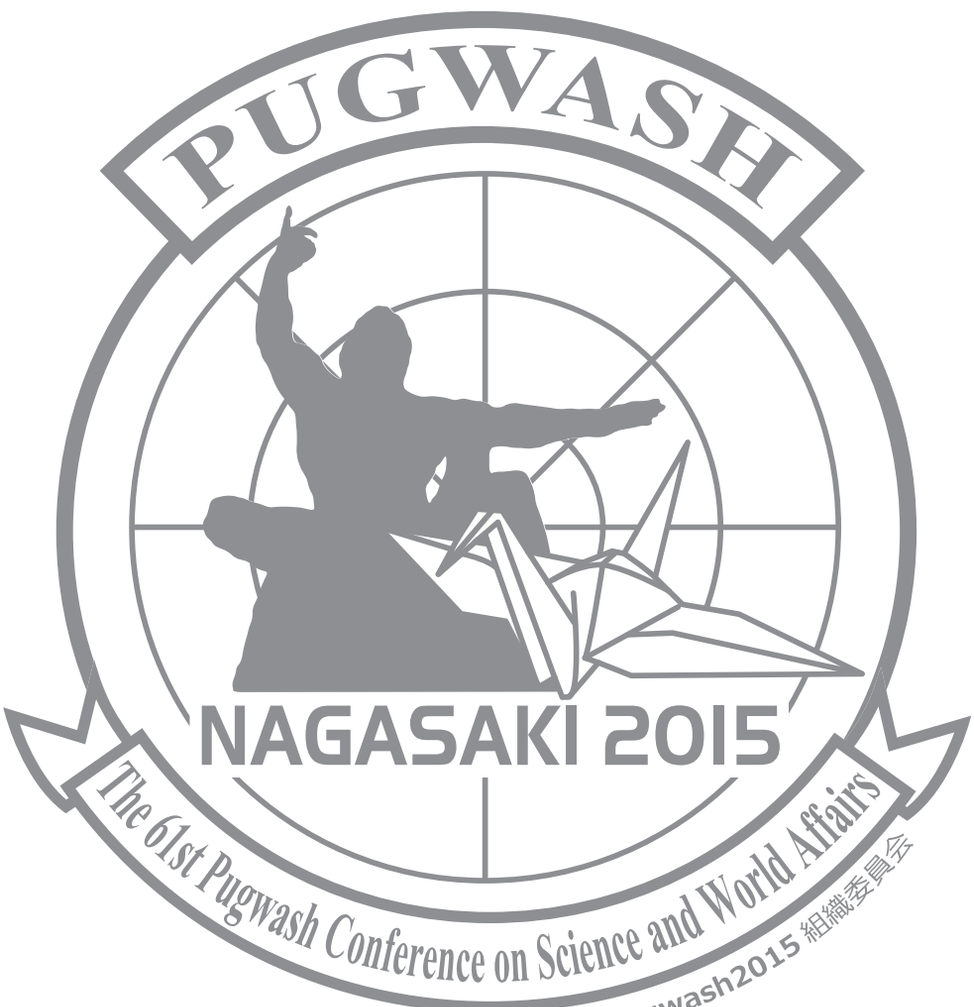
第６１回パグウォッシュ会議世界大会

報 告 書



©2016 Pugwash2015 組織委員会

２０１５年１１月１日ー５日
（２０１６年３月発行）

The 61st Pugwash Conference on Science and World Affairs

Nagasaki's Voice: Remember Your Humanity

1-5 November 2015, Nagasaki, Japan

第 61 回パグウォッシュ会議集合写真、平和公園、平和公園平和祈念像前

はじめに

2015 年 11 月 1 日～5 日、被爆 70 年の節目の年に、被爆地長崎にて初めてのパグウォッシュ会議世界大会を開催することができた。広島では過去 2 回、1995 年、2005 年に開催されており、10 年ごとに被爆地で開催することが、パグウォッシュ会議にとって原点回帰とでもいえる重要な意義を持つことが、今回の長崎開催で再確認できた。これは、また核廃絶を希求する被爆地の市民や被爆者の方々にとっても、非常に有意義な機会となったことは間違いない。

初日は、平和祈念像前での記念撮影に始まり、ノーベル平和賞メダル（複製）と賞状寄託式典、そして被爆者山脇佳朗氏の講話、被爆遺構、長崎原爆資料館の訪問と、被爆地ならではの行事が続いた。公開セッションの会場も爆心地からわずか 500m という長崎大学医学部記念講堂であった。この初日の体験が、「長崎を最後の被爆地に」という「長崎宣言」につながった。これこそ「被爆地で学び、感じ、発信する」という、私たちが期待していた最大の成果といえる。

また、メイン会場となったホテル「やすらぎ伊王島」も、第 1 回のパグウォッシュ会議が開催された Thinker's Lodge の雰囲気を想起させる、素晴らしい会場であった。気候にも恵まれ、朝から夜まで語り合うという、パグウォッシュ会議本来の「対話の場」を提供できたことも、長崎での開催が意義深いものになった一つの要因だと考えている。

でも主役は、やはり参加者であり、参加者による「対立を超えた対話」と「科学者の社会的責任」を理念とする真摯な討論が行われたことも大きな成果であった。そして、何よりもそれを支えた長崎大学、長崎市・県の皆様や、多くの企業・団体・個人の皆様から頂いた寄附・助成金や支援がなければ、このような貴重な大会は開催することができなかった。改めて、この場をお借りして支援していただいた皆様に厚くお礼申し上げたい。

最後に、この会議の報告書は、パグウォッシュ 2015 の終点ではあるが、パグウォッシュ会議にとっては、再び出発の原点ともなるべき貴重な記録である。会議の概要と雰囲気を伝えると同時に、核兵器と戦争の廃絶に向けて、新たな一歩を踏み出すための礎とするつもりで、実行委員全員でまとめたものである。文書以外にも、ウェブサイトには膨大な文書と映像記録を掲載している。これも同時にぜひ見ていただき、核兵器と戦争の廃絶にむけて、少しでもお役に立てれば幸いである。

2016 年 3 月

パグウォッシュ 2015 組織委員会 委員長

鈴木達治郎

目次

はじめに 1

会議の概要 5

大会プログラム 8

大会風景 12

パグウォッシュ会議評議会「長崎宣言」 20

パグウォッシュ会議評議会「声明」 22

メッセージ・歓迎挨拶 26

潘基文 国連事務総長メッセージ 26
安倍晋三 内閣総理大臣メッセージ 27
岸田文雄 外務大臣メッセージ 28
中村法道 長崎県知事 歓迎挨拶 30
田上富久 長崎市長 歓迎挨拶 32
片峰茂 長崎大学学長 歓迎挨拶 33

各セッションまとめ 35

11 月 1 日　ノーベル平和賞寄託式典、遺構訪問、被爆者講話 35
11 月 1 日　全体セッション 36
11 月 2 日　全体セッション 38
11 月 3 日　全体セッション 38
11 月 4 日　全体セッション 41
11 月 5 日　全体セッション 41
その他 43

国際学生・ヤングパグウォッシュ会議 45

長崎県民平和講演会（佐世保） 49

講演者情報 50

組織委員会、実行委員会、募金委員会、諮問評議会の構成と記録 55

その他関連行事 60

報道リスト 62

参加者リスト 106

付録 113

Nagasaki Declaration of the Pugwash Council 115

Statement of the Pugwash Council 117

2015 International Student/Young Pugwash Vision Statement: The Nagasaki Call for Action 122

河野洋平（日本パグウォッシュ会議諮問評議会委員）晩餐会スピーチ全文 123

吉川弘之（日本パグウォッシュ会議諮問評議会議長）晩餐会スピーチ全文 126

ラッセル・アインシュタイン宣言 132

広報資料 135

会議の概要

会議の名称

第 61 回パグウォッシュ会議世界大会

メインテーマ

被爆 70 年―核なき世界、戦争の廃絶、人間性の回復をめざして

ワーキング・グループ（WG）テーマ

核兵器の非人道的影響

核兵器廃絶への具体的道筋

地域別 WG：ヨーロッパ、中東・アフリカ、南アジア、東アジア

原子力の平和利用、エネルギー資源、国際協力

先端技術のもたらす挑戦と科学者の社会的責任

主催

パグウォッシュ 2015 組織委員会、世界パグウォッシュ会議

協力

核兵器廃絶長崎連絡協議会、長崎県、長崎市、国立大学法人長崎大学、

長崎大学核兵器廃絶研究センター、独立行政法人国際観光振興機構

後援

外務省、文部科学省、日本物理学会、日本平和学会、日本軍縮学会

開催期間

2015 年 11 月 1 日（日）－5 日（木）

10 月 30 日（金）、31 日（土）　国際学生・ヤングパグウォッシュ会議開催

11 月 1 日（日）午後、11 月 3 日（火）午後は一般公開

11 月 6 日（金）長崎県民平和講演会（佐世保）一般公開

開催場所

長崎大学坂本キャンパス医学部記念講堂（長崎県長崎市坂本 1 丁目 12-4）

長崎県　やすらぎ伊王島（長崎県長崎市伊王島 1 丁目 3277-7）

参加者、参加国

195 名（31 名の国際学生・ヤングパグウォッシュ参加者を含む）

38 カ国（21 カ国からの国際学生・ヤングパグウォッシュを含む）

使用言語

英語　公開セッションには日・英同時通訳をつける。

ワーキング・グループ情報

長崎大会では、8 つのワーキング・グループ（以下、WG と表記）が設けられた。会議参加者はいずれかの WG に参加し、それぞれ 9 時間、各 WG のテーマについて討議した。全体会の

一部は公開され、一般市民も参加できたが、WG の討議はすべて非公開とされ、会議参加者は、会議で得た情報を自由に利用できるが、その情報の発言者や所属・身分などは、本人の同意がない限り明らかにしないという、いわゆるチャタムハウスルールの下で行われた。この形式は、パグウォッシュ会議発足当初からの伝統であり、その目的は、参加者が立場の違いを超えて個人として自由に発言できるようにすることにある。

長崎大会終了後、発言者を特定しない形で討議内容を紹介する報告書が WG ごとに作成され、パグウォッシュ会議のウェブサイトで公開された。その中で、現実の諸問題に関する分析や、具体的な提言・提案が示されているが、それは各 WG の共同議長の責任でまとめられたものであり、WG 参加者の総意という性格のものではなく、パグウォッシュ会議としての統一見解でもない。

以下に各 WG の詳細情報を掲載する。

ワーキング・グループ#　（表記例）
①テーマ
②共同議長
③討議の主なトピック

ワーキング・グループ 1
①核兵器の非人道的影響
②Venance Journe、Masao Tomonaga
③核兵器の使用が人体に与える影響、世界中の被曝者の経験、核兵器とその意図的・偶発的使用の生態学的・社会経済的影響、核兵器関連災害への対応の不可能性

ワーキング・グループ 2
①核兵器廃絶への具体的道筋
②Peter Jenkins、Mitsuru Kurosawa
③2015 年再検討会議後の NPT 体制、多国間、二国間、一方的軍縮の見通し（条約、禁止、時間枠）、ミサイル防衛、非核兵器地帯、核軍縮・不拡散を目的とした他の措置

ワーキング・グループ 3
①地域別 WG：ヨーロッパ
②Goetz Neuneck、Serguei Batsanov
③戦術核兵器、核ドクトリン／核共有、ミサイル防衛、ウクライナ・クリミア危機が軍縮の可能性に与える影響、地域的な安全保障と軍縮、信頼醸成措置、地域対話の場

ワーキング・グループ 4
①地域別 WG：中東・アフリカ
②Arnold Luethold、Yoshiko Kurita
③シリア危機の分析、パレスチナ問題、国際法の役割、地域対話のあり方、中東大量破壊兵器地帯化学兵器問題、地域的な武器売買、信頼醸成措置

ワーキング・グループ 5
①地域別 WG：南アジア
②Moeed Yusaf、Happymon Jacob
③核ドクトリン、危機の安定化、信頼醸成措置、ラホール宣言の再検討、地域対話の場

ワーキング・グループ 6
①地域別 WG：東アジア
②Mark Suh、Leon Sigal
③地域的非核兵器地帯、信頼醸成措置、危機の安定化、地域対話の場

ワーキング・グループ 7
①原子力の平和利用、エネルギー資源、国際協力
②Victor Gilinsky、M.V. Ramana
③民生核エネルギーに関連した諸問題の福島原発事故後の評価、民生核エネルギーのリスク低減の方策と災害を回避する道程、核廃棄物の処分・核セキュリティ・核安全・核不拡散、プルトニウムの管理と処分、エネルギー資源（石油、ガス）と国際協力

ワーキング・グループ 8
①先端技術のもたらす挑戦と科学者の社会的責任
②Karen Hallberg、Masako Ikegami
③新たな先端的軍事技術及び両用民生技術のリスク、情報技術、ナノテクノロジー、自律型ロボットと無人機、21 世紀における科学者の責任

大会プログラム

2015 年 11 月 1 日（日）	
6:30	朝食
7:45	バス出発（伊王島）
8:45 – 9:00	献花及び集合写真（平和祈念像前）
9:15 – 10:30	ノーベル平和賞メダル寄託式、被爆体験講話（長崎原爆資料館） ジャヤンタ・ダナパラ（パグウォッシュ会議会長、スリランカ）、 パオロ・コッタ=ラムジーノ（パグウォッシュ会議事務総長 、イタリア）、 サイデ・ロトフィアン（パグウォッシュ評議会議長、イラン）、 田上富久（長崎市長）、毎熊政直（長崎市議会議長）、松井一實（広島市長 代理）、 山脇佳朗 （被爆者）
10:30 – 12:00	長崎原爆資料館、長崎原爆死没者平和祈念館
10:30 – 12:00	パグウォッシュ会議代表団による城山小学校特別訪問
12:00	長崎大学坂本キャンパスへバスと徒歩で移動
12:30 – 13:30	昼食（長崎大学坂本キャンパス）
13:30 – 14:45	公開セッション（日英同時通訳）（長崎大学医学部記念講堂） 開会セッション、祝辞紹介（国連事務総長、日本政府首相） パオロ・コッタ=ラムジーノ（パグウォッシュ会議事務総長、 イタリア） ジャヤンタ・ダナパラ（パグウォッシュ会議会長、 スリランカ） 鈴木達治郎（長崎大学核兵器廃絶研究センター長、パグウォッシュ会議評議員） 歓迎挨拶 中村法道（長崎県知事）、田上富久（長崎市長）、片峰茂（長崎大学長） 特別講演 岸田文雄（外務大臣）（黄川田仁志　外務大臣政務官代読）
14:45 – 15:00	休憩
	第 4 回サイモンズ・シンポジウム（SIMONS SYMPOSIUM） ラッセル・アインシュタイン宣言と人間性の回復： 核兵器のない世界をめざして
15:00 – 15:15	開会にあたって 議長: スティーヴ・ミラー（パグウォッシュ会議執行委員会議長、 アメリカ） ジェニファー・アレン・サイモンズ（サイモンズ財団総裁、カナダ）
15:15 – 16:00	全体セッション:　核兵器の非人道的影響 議長: ブルース・ブレア（アメリカ）

	朝長 万左男（日本赤十字社長崎原爆病院名誉院長） リン・シュレーダー（赤十字国際委員会（ICRC）駐日代表） 質疑応答
16:00 – 16:15	休憩
16:15 – 17:30	全体セッション: 核兵器廃絶への道筋―核軍縮の見通し 議長: サイデ・ロトフィアン（パグウォッシュ評議会議長、イラン） アニタ・フリード（アメリカ国務省軍縮局首席国務次官補代理、アメリカ） ミハイル・ウリヤーノフ（ロシア外務省軍縮・軍備管理局長、ロシア） 質疑応答
17:30 – 18:45	全体セッション: 「非核兵器、非大量破兵器地帯」をめざして 議長: ジャヤンタ・ダナパラ（パグウォッシュ会議会長 、スリランカ） キム・ウォンス（国連軍縮担当事務次長、韓国） 梅林宏道（長崎大学核兵器廃絶研究センター客員教授） ヤルガルサイハニー・エンクサイハン（NGO「ブルーバナー」代表、モンゴル） 質疑応答
18:45 – 18:55	特別挨拶: 旧セミパラチンスク核実験場に関する展示 アキルベク・カマルディノフ（カザフスタン駐日大使、カザフスタン）
19:00	ディナー（伊王島）
2015 年 11 月 2 日（月）	
07:30- 09:00	朝食 （伊王島）
09:00-10:30	全体セッション: 南アジアの核リスク （伊王島） 議長: パオロ・コッタ=ラムジーノ（パグウォッシュ会議事務総長、イタリア） ハーリド・キドワイ（国家指揮最高部顧問、パキスタン）
10:30-11:00	全体セッション: 事務総長報告、過激主義、対話と軍縮に向けたパグウォッシュの課題 （伊王島） パオロ・コッタ=ラムジーノ（パグウォッシュ会議事務総長 、イタリア）
11:15 – 11:45	コーヒーブレイク
11:45 – 13:15	ワーキング・グループに分かれての討議 （伊王島）
13:15 – 14:30	昼食
14:30 – 16:00	ワーキング・グループに分かれての討議 （伊王島）
16:00 – 16:30	コーヒーブレイク
16:30 – 18:00	ワーキング・グループに分かれての討議 （伊王島）
19:00-	夕食

2015 年 11 月 3 日（火）祝日	
07:30 – 09:00	朝食　（伊王島）
09:15-10:15	基調講演:　CTBT への道 議長: セルゲイ・バタサノフ（パグウォッシュ会議評議員、ロシア） メッセージ：ラッシーナ・ゼルボ（CTBTO 事務局長、ブルキナファソ） レザー・ズィアラン（CTBTO、 パグウォッシュ会議評議員、イラン） セルジオ・デ・キロス・デュアルテ（CTBTO、パグウォッシュ会議評議員、ブラジル） ジャヤンタ・ダナパラ（パグウォッシュ会議会長 、スリランカ）
10:15-11:45	全体セッション: 平和と共存の北東アジアをめざして　（伊王島） 議長: レオン・V・シーガル（米国社会科学研究評議会、アメリカ） 遠藤誠治（成蹊大学教授） マーク・スー（パグウォッシュ会議評議員、韓国） 趙 通（カーネギー 清華グローバル政策センター、中国） コメント: アレクサンダー・ニキティン（パグウォッシュ会議評議員、ロシア）
12:00-13:00	昼食　（伊王島）
14:00-15:30	公開セッション（日英同時通訳）（長崎大学医学部記念講堂） 全体セッション: 原子力の平和利用のリスク 議長:　鈴木 達治郎（パグウォッシュ会議評議員） 黒川 清（元国会原子力事故調査委員会委員長、元日本学術会議会長） フランク・フォン・ヒッペル（プリンストン大学教授、アメリカ） コメント: ラマムルティ・ラジャラマン（ジャワハルラール・ネルー大学教授、インド） コメント: シャロン・スクアッソーニ（戦略国際問題研究センター、アメリカ）
16:00-17:00	ドロシー・ホジキン・レクチャー 議長: フランチェスコ・カロジェロ（パグウォッシュ会議評議員、イタリア） 下村 脩（ノーベル化学賞受賞者） コメント：　益川 敏英（ノーベル物理学賞受賞者）
17:30-18:30	能楽鑑賞「長崎の聖母」　（長崎大学医学部記念講堂）
19:00	グラバー邸にて夕食会 晩餐会スピーチ: 河野洋平（元衆議院議長、元外務大臣）
2015 年 11 月 4 日（水）　（伊王島）	
07:30 – 09:00	朝食　（伊王島）
09:00-12:00	ワーキング・グループに分かれての討議　（伊王島）

12:00	昼食
13:00 – 14:30	ワーキング・グループに分かれての討議　（伊王島）
14:45 – 15:15	全体セッション: 会長スピーチ　（伊王島） ジャヤンタ・ダナパラ（パグウォッシュ会議会長、スリランカ）
15:15 – 15:30	コーヒーブレイク
15:30 – 16:45	全体セッション: イラク、シリア、 イスラミックステート　（伊王島） 議長: アニーサ・ハッスーナ（パグウォッシュ会議評議員、エジプト） H.E. フサイン・アル・シャフリスターニー（イラク高等教育相、イラク）（サラ・H・アルファトラウィ（高等教育省事務局長、イラク）代読）
16:45 – 18:00	全体セッション: イラン核開発をめぐる議論と交渉の 12 年―経緯と教え 議長: パオロ・コッタ=ラムジーノ（パグウォッシュ会議事務総長、イタリア） アリー・アクバル・サーレヒー（イラン原子力機構長、イラン）
19:00	夕食　（伊王島） 晩餐会スピーチ；吉川弘之（元日本学術会議会長、日本パグウォッシュ会議諮問評議会議長）
2015 年 11 月 5 日（木）　　（伊王島）	
7:30 – 9:30	朝食
9:30 – 10:45	全体セッション: ラッセル･アインシュタイン宣言からの60年及びこれから（伊王島） 議長: サンドラ・I・ブッチャー（パグウォッシュ会議事務局長、アメリカ） 小沼 通二（日本パグウォッシュ会議、日本） アンナ・ペチェリ（国際学生・ヤングパグウォッシュ会議議長、ハンガリー） カリム・カドリー（国際学生・ヤングパグウォッシュ会議前議長、エジプト）
10:45 –12:00	全体セッション: 次なる一歩（伊王島） 議長:スティーヴ・ミラー（パグウォッシュ会議執行委員会議長、アメリカ） 各ワーキング・グループの成果の紹介と議論
12:00 – 12:30	閉会 – 長崎宣言
12:30–14:00	長崎宣言/記者会見　（伊王島） ジャヤンタ・ダナパラ（パグウォッシュ会議会長、スリランカ） パオロ・コッタ=ラムジーノ（パグウォッシュ会議事務総長、イタリア） スティーヴ・ミラー（パグウォッシュ会議執行委員会議長、アメリカ） サイデ・ロトフィアン（パグウォッシュ評議会議長、イラン） 鈴木 達治郎（パグウォッシュ会議評議員）（逐語訳）

大会風景

受付け準備、やすらぎ伊王島

平和公園、平和公園平和祈念像前

献花、平和公園、平和公園平和祈念像前

集合写真撮影、平和公園、平和公園平和祈念像前

ノーベル平和賞メダル（複製）と賞状の寄託式典、長崎原爆資料館ホール

城山小学校訪問

ノーベル平和賞メダル（複製）、長崎原爆資料館

ドロシー・ホジキン・レクチャー、下村 脩氏

国際学生・ヤングパグウォッシュ会議、やすらぎ伊王島

地域の戦争体験や被爆体験を受け継ぐ日本の若者との交流

能楽鑑賞「長崎の聖母」、長崎大学医学部記念講堂

晩餐会にて、グラバー邸

全体セッション会場、長崎大学医学部記念講堂

全体セッション会場、やすらぎ伊王島

長崎平和推進協会写真資料調査部会による長崎原爆写真展（於　伊王島）
被爆者でもある深堀好敏部会長が説明

伊王島の会場間を移動する参加者

閉会式、やすらぎ伊王島

伊王島

パグウォッシュ会議評議会「長崎宣言」

「長崎を最後の被爆地に」―。原爆が広島と長崎を壊滅してから 70 年の歳月が流れました。それでも私たちは今なお、何千発もの核兵器がもたらす切迫した危険に直面しています。被爆者の平均年齢は 80 歳を超えました。今日に至っても被爆者は、自身の人生に想像できないような打撃を与えた核攻撃の影響に苦しんでいます。パグウォッシュ評議会は核兵器の廃絶を希求する被爆者の声に耳を澄ます。そして世界の政治指導者に対し、被爆者の叫びを受け止めるよう強く訴えます。

核兵器の脅威は今も増大しています。核軍縮は行き詰まっています。紛争が多発しています。核兵器転用可能な核物質の量が世界各地で増大しています。核兵器が法的に禁止され、廃絶されるまで、そして核兵器転用可能な核物質が安全な形で処分される日が来るまで、意図的ないしは偶発的な核兵器使用のリスクは常に存在し続けます。

すべての核兵器保有国は、核兵器システムの近代化計画を中止しなくてはなりません。核兵器保有国の近代化計画に割り当てられた数十億ドルもの財源は、核リスクの最小化、核の偶発的発射やサイバー攻撃の防止、軍縮の促進にこそ使われるべきです。そして最も重要なのは、核兵器保有国が核兵器の削減にとどまらず、核兵器の廃絶を確約しなくてはならないということです。包括的核実験禁止条約（CTBT）の迅速な発効も不可欠です。拡大核抑止（「核の傘」）に依存する非核保有国もまた、核軍縮を支持し、例えば非核兵器地帯への参加や創設によって、自身の安全保障政策を変革しなくてはなりません。

核兵器不拡散条約（ＮＰＴ）の再検討（レビュー）プロセスやジュネーブ軍縮会議（CD）といった、軍縮・不拡散をめぐる既存の国際的な協議枠組みは大切ですが、その限界も明らかです。国々と市民社会、国際組織が連携して核兵器の法的禁止を目指す全世界的なイニシアチブが、核の脅威除去のために重要な役割を果たしうるでしょう。

2011 年に発生した東京電力福島第 1 原発事故は、原子力安全の重要性、また原子力技術に付随するリスクを封じ込めることの重要性を、私たちに思い起こさせました。現代科学技術が多くの分野で急速に進展しています。そのことが究極的には人間性にまで影響を与えるという点に十分な注意を払わなければ、新たな危険が鎌首をもたげるかもしれません。恐らく今日、科学者の社会的責任はかつてないほど重大なものになっています。

「対立を超えた対話」。これはパグウォッシュ運動の基本理念です。核兵器使用の引き金を引くかもしれない地域的緊張は外交的な措置によって解消されるべきです。すべての当事者はあらゆるコストを払って軍事衝突を回避しなくてはなりません。戦争が実際になくならなければ、現代また次世代の大量破壊兵器によって、人類はその生存が脅かされ続けることになります。私たちは、ラッセル・アインシュタイン宣言の本質に立ち返りたいと思います。核兵器を廃絶し、究極的に戦争そのものをこの地球上からなくさなくてはなり

ません。

強固な道徳心と倫理観がなければ、人類は生き延びることはできません。広島、長崎の被爆者、世界中で行われた核実験で被ばくしたヒバクシャの経験を次の世代へと伝承していくことは、決定的に重要です。核兵器およびその他の大量破壊兵器が存在する限り、壊滅的な結末は避けられません。ラッセル・アインシュタイン宣言を思い起こし、長崎市民と被爆者の声を分かち合いながら、きのこ雲の下で起こった惨劇が深く刻み込まれたこの地から、パグウォッシュ評議会は今一度、人類の一員として、人類に向かって訴えます。「あなたがたの人間性を心にとどめ、その他のことを忘れよ」と。

（訳：パグウォッシュ 2015 組織委員会）

パグウォッシュ会議評議会「声明」

原爆投下により長崎の街が壊滅して 70 年を経た今なお、被爆者の方々は核廃絶を強く求め続けています。この街から発せられる希望のメッセージに鼓舞され、人々が世界中で一刻も早く核兵器のないより平和な世界を作り上げようと努力しています。60 年前、パグウォッシュ運動創設者たちはラッセル・アインシュタイン宣言を発表しました。20 年前の 1995 年、「核兵器が国際政治で果たす役割を減じ、長期的に核兵器を廃絶するために尽力した」という理由で、パグウォッシュ会議とその創設者の一人であるジョセフ・ロートブラット博士にノーベル平和賞が授与されました。

これらの節目の年を迎えたことから、第 61 回パグウォッシュ長崎大会においてパグウォッシュ会議は、長崎と広島の市民、特に被爆者の方々に対し、平和と核廃絶を切望する彼らの呼びかけを国際社会が聞き届けた証として、そして暗い時代にあっても「対立を超えた対話」がより平和で危険の少ない世界の構築に役立つことを示すため、ノーベル平和賞の賞状とメダルのレプリカを贈りました。

さらに、これらの重要な節目の年を記念して、パグウォッシュ評議会は長崎宣言を発表しました。それは、こう結んでいます。

核兵器およびその他の大量破壊兵器が存在する限り、壊滅的な結末は避けられません。ラッセル・アインシュタイン宣言を思い起こし、長崎市民と被爆者の声を分かち合いながら、きのこ雲の下で起こった惨劇が深く刻み込まれたこの地から、パグウォッシュ評議会は今一度、人類の一員として、人類に向かって訴えます。「あなたがたの人間性を心にとどめ、その他のことを忘れよ」

パグウォッシュ評議会は、核兵器の使用がもたらす人道的影響に対する意識を高めることが核軍縮を推進する鍵の一つであると、改めて断言します。121 か国が人道宣言を支持または承認しています。この宣言は、「核兵器を禁止して廃絶するため、法の隙間を埋めるのに有効な措置を実行するよう」世界の指導者たちに呼びかけ、「核爆発のリスクを低減させる暫定的措置を講じるよう、すべての核保有国に」求めています。しかし、その人道的訴えだけではうまくいきません。真に検証可能な軍縮における徹底した努力によって裏付けられなければなりません。パグウォッシュ評議会は、核兵器の人道的影響に関する第 4 回政府間会議をできるだけ早期に開催することを含めて、これらの問題に関心を持ち続けるよう各国政府に強く求めました。

同様に、実効性がある核軍縮措置について多国間で交渉し、採択するまで、大量破壊兵器の拡散を防いだり、核不拡散条約（NPT）や化学兵器条約、 生物兵器条約を普遍化したり、核兵器の重要性を大きく低減したりするための方策が講じられなければなりません。最も重要なことは、NPT 第 6 条で求められている通り、核保有国が核軍縮の実現に向けて大きく前

進することです。現在の進展具合では、この重要な条約に対する非核保有国の信頼が損なわれかねません。アメリカとロシアには両国の圧倒的な軍備を思い切って削減するという特別な責務が課せられています。パグウォッシュ会議は、あらゆる可能な方法で包括的核実験禁止条約（CTBT）の発効を促進することにしっかりと関わっています。CTBT は世界の核不拡散体制を維持し、究極的に核兵器を廃絶するために不可欠な手段です。核兵器製造に使用可能な物質の管理と処分は、もう一つの重要な問題です。とりわけ民生用を含むプルトニウムの貯蔵は可及的速やかに停止されるべきであり、貯蔵されている物質は削減されねばなりません。

核兵器が現存する地域での紛争や緊張に焦点を当てねばなりません。いくつかの注目すべき例外を除けば、世界は話し合いによる抑制を欠いており、望ましいことと達成できることとの間の溝が広がっている。相互不信という広く浸透した問題は、信頼醸成措置の実行を通じて克服されねばなりません。紛争当事国間の建設的な対話、とりわけ交流とコミュニケーションが、これからも非常に重要です。溝が存在する地域において、大量破壊兵器、軍事技術、軍民共用技術を規制するための管理体制や合意が強化、拡大、創出されねばなりません。そこには、違反に関する規定の強化も含まれます。紛争と欠乏によって生み出された大勢の難民は、安全保障に多大な影響を及ぼします。しかるべき責任と人道主義に基づいて迅速かつ適切な取り組みがなされなければ、社会の分断と劣化が拡散したり、悪化するでしょう。

さまざまな地域に重大な危機が存在します。ロシアと NATO 間の、さらにはより広い欧州=大西洋コミュニティーの間での新たな前向きの対話は、現在の膠着状態を克服し、核および通常兵器管理に向けての信頼しうるステップをめぐる話し合いを続け、持続可能な安全保障の枠組み構築のための新たな方法を見出すために不可欠です。過激主義の台頭は、とりわけ中東において、さらに新たな危機を引き起こしています。国際社会はシリア危機に緊急の注意を払う必要があります。パグウォッシュ評議会は、シリア内戦において現在行われている化学兵器の使用をそれがいかなる形態のものであっても、2013 年以来国連および化学兵器禁止機構によって繰り返し確認されているように、糾弾し、いかなる形態の化学戦争も直ちに停止されることを要求します。パレスチナでも到底看過できない状況が続いており、真の解決をもたらすことができるのは「二国家構想」に基く真剣な交渉だけです。最も喫緊の課題は、ガザにおける緊急の人道的危機に対する構造的で持続可能な解決を見い出すことです。ガザは封鎖を解かれねばならず、国際社会は何の障害もなくガザに関与し、再建を支援することを認められねばなりません。北東アジアで台頭しつつあるナショナリズムに対抗し、この地域の安全を高める基盤を築くために、和解と信頼醸成措置をとることも必要です。南アジアでは、インドとパキスタンはカシミールやテロリズムを含む両国間のすべての重要課題について、意味のある対話を即刻再開し、継続していかなければなりません。アフガニスタンにおける平和な未来を確保するためには、全当事者による対話を持つことが基本であり、かつ緊急に必要とされています。カタール政府の支援で 2015 年 5 月 2-3 日に開催されたパグウォッシュの会合は、アフガニスタンの諸勢力

間の対話は可能であり、また、同地における紛争を終わらせ平和をもたらすために必要とされていることを示しました。

諸地域での核による緊張を低減する手順は下記の通りであると提言致します。

- ポジティブな側面として、パグウォッシュ評議会は 2015 年 7 月 14 日に合意したイランの原子力計画に関する総括的行動計画（JCPOA）を心より歓迎します。この合意は核不拡散条約をより強固にし、中東地域における安全と安定に大きく貢献するものです。イランと主要 6 か国によるこの歴史的合意は、高度な技術課題も含んだ相互協力がこの地域の安定性向上に繋がることを立証しています。パグウォッシュ会議は長年に亘りこの合意の促進と拡大のために強力に行動してきました。重要なのは、JCPOA に示されるように全ての参加国による合意事項の全面的実施が制裁を排除して潤滑に進められることです。この合意の実施段階およびその先の段階における更なる活動促進はパグウォッシュ会議の日程の優先課題と考えています。
- ネガティブな側面として、「中東非大量破壊兵器地帯」会議開催の日程を決めることができなかったことが、負の余韻を残しつづけています。この課題を国際的アジェンダから外してはなりません。それはこの地域に影響を与えるのみならず、NPT 再検討プロセスに関連する、より広範な諸課題に関しても疑いを投げかけることになるからです。
- 米ロ間の核軍縮、軍備管理、核不拡散の手順は弾道ミサイル防衛、核兵器近代化、および現存の合意とセキュリティ機構の再合意、復旧または延長など多くの分野で更なる行動が必要です。緊急の問題として、米国が欧州内に配備している核兵器は撤去すべきであり、他国の領土には核兵器を配備しないという規範を確立すべきであり、（ロシアにおけるいわゆる戦術核兵器を含む）核兵器の保有量の遅れている公表は直ちに実施しなければなりません。双方の宣伝的言動、特に欧州における新たな核兵器による脅迫や配備は、新たな戦闘部隊の配備や大規模軍事演習とともに、終わらせなければなりません。パグウォッシュ評議会は、中距離核戦力全廃（INF）条約をめぐって今なお続く論争への懸念と示すとともに、米国とロシアに対し、海上発射巡航ミサイルまで条約範囲を拡大する可能性を含め、条約強化のための誠実な対話を行うことを呼びかけます。
- インドとパキスタンは今なお、いつ何時危機に突入してもおかしくない関係にあります。両国は紛争解決へ向けた積極的な努力を進め、「（紛争の初期段階における）核兵器の早期使用」に依存した戦略を捨て去るべきです。危機の引き金を引くような事態に直面した際、即座に意思疎通と協調が行える恒久的なメカニズムを構想することが、両国にとって喫緊の課題です。両国はまた彼らが保有する核兵器が信頼する核・国家指令本部の厳密な管理下にあることを保証しければなりません。同時に、両国を国際核不拡散体制の流れの中に入れる努力が必要です。
- 日本、中国、朝鮮半島における信頼感の醸成と危機管理が必要です。軍事的な「抑止力」

の発想に訴えようとする傾向が強まっていますが、軍拡競争を引き起こすことになり、やめるべきです。歴史認識や、日本におけるプルトニウム蓄積、中国核兵器の政策的意図、中国の核物質の透明性などの核分野における諸問題も、考慮すべき課題です。

・ DPRK（北朝鮮）の核実験および／またはミサイル実験の停止と米韓合同軍事演習の停止が実現すれば、米朝間を含めて、より広範囲の正常化の努力に道を開く可能性があります。朝鮮半島における非核化に向けての次の段階として、2005 年に合意された 6 か国共同声明に基づく事項の総括的実施が必要です。北東アジア非核兵器地帯交渉はこの地域の紛争解決と朝鮮半島の非核化の処方薬と法的枠組み構築の役割を果たします。ただし、北朝鮮の参加がそれに実質的意味を与える前提となります。

・ 民生用原子力エネルギーとエネルギー資源に関する、国際的な協力とより深い対話が必要です。福島の事故はまだ終わっていません。10 万人以上の人々がいまだに帰宅することができず、その中には将来も帰宅できない人々がいます。日本政府には事故の可能性や長期的健康影響、人道上の影響に関するもっと誠実な評価を国民に示す必要があります。いままで、原子力エネルギーの有益性については過大評価し、コストについては過小評価しすぎてきました。予想される事故に対する莫大な費用を見る限り、パグウォッシュ評議会は新規原子力開発の開始や、現存計画の拡大については警告を発したいと思います。各国はまず代替エネルギーを、気候変動問題にも対処しつつ、探すべきです。原子力の安全は、もはや当事国の純然たる国内問題ではなくなっています。

・ プルトニウムの分離のための再処理はエネルギー利用または兵器利用にかかわらず、すべての国でやめるべきです。原子力エネルギー計画におけるすべての分野での高濃縮ウランの使用も停止しなければなりません。燃料サイクル遂行に伴う国際的なセキュリティ上のリスクを鑑み、各国は燃料サイクル方針決定における主権の制約に妥協する必要があります。

関連する分野の科学者たちは政治家、政策決定者、外交官たちと、さまざまな危機、新しい技術、現存する脅威などの文脈で信頼できる情報交換を行う必要があります。研究と異分野間の意見交換は極めて重要です。とりわけ、次の二分野での活動が重要だと考えます。

１） 致死性自律型兵器システム（LAWS）とその関連技術についての法的規範の創生。

２） 宇宙利用に関する 1967 年会議の参加国の 2017 年 50 周年会議への参加と、核兵器の宇宙での使用禁止フォーラムの創設に関する合意に向けた定期会合開催合意。

今回長崎に集った学生･青年パグウォッシュリーダーがパグウォッシュおよびより広い軍縮運動コミュニティーに対し、若い世代の関与を助け、励まして、青年たちが今我々の直面する困難な国際的な安全保障上の諸問題の解決に積極的な役割を果たしていくよう勇気づけるべきだ、と呼びかけたことを支持します。意識の喚起、教育、そして世代を超えた対話は、核兵器のない世界を実現する上で何より重要です。

（訳：パグウォッシュ 2015 組織委員会）

メッセージ・歓迎挨拶

潘基文 国連事務総長メッセージ

代読：キム・ウォンス（Kim won-soo）国連事務次長兼軍縮高等代表代理

第 61 回パグウォッシュ会議世界大会の支援のため本メッセージをお送りすることは私の大きな喜びとするところです。

まず、本大会の開催地として、想像も及ばない悲劇の克服という人類の回復力の世界的象徴である長崎を選ばれたことに大きな拍手を送りたいと思います。私は広島への原爆投下による生存被爆者の方々との遭遇を決して忘れることができません。彼らの力強い声に啓発され、私は世界の指導者たちに対し世界の核兵器を究極的に閉じ込めてしまおうという彼らの呼びかけに耳を傾けるよう繰り返し訴えてきました。

この努力の中で、法王聖フランシスの国連来訪を賜りました。そのときの我々のグローバルアジェンダを通じた活動をご支持くださるお心のこもったスピーチにおいて、法王は国際社会に向けて平和と安全を追及するため、常に紛争の中にいる人々の顔を思い浮かべるよう呼びかけました。

今年は最初で最後の核兵器使用と国連創設の 70 周年に当たります。いまこそ熟考と活動の時であります。

国連では一連の果敢にして達成可能な持続可能な発展目標とともに夢のある 2030 アジェンダを採択しました。この真に変革的な進歩を達成するために、我々はこの 12 月パリでの気候変動に関する締約国会議（COP21）において普遍的で意味のある合意を目指しております。

今我々は実存するもう一つの課題、即ちこれまでに発明された最も危険な兵器である核兵器対策に再度標準を当て、エネルギーを注ぎ込まなければなりません。その完全な廃絶のみが人間性を危機に陥れる危険の排除を可能とするのです。私は国際社会が核兵器のない世界を共有するという夢を実現するため共通の基盤を見出し、ともに歩むよう促したいと思います。

この努力において、私は計り知れない価値を有し勇敢で誇るべき歴史のあるパグウォッシュ会議の貢献を高く評価しております。国連は安全で持続可能な世界を共通して追及するパグウォッシュ会議を全面的に支援致します。

大会の大成功を心から祈念いたします。

安倍晋三 内閣総理大臣メッセージ

代読：高原孝生　パグウォッシュ 2015 副組織委員長

第 61 回パグウォッシュ会議世界大会の開催に当たり、心からお祝いを申し上げます。これまでパグウォッシュ会議では、核兵器の拡散を防ぎ、核兵器廃絶の早期実現を目指す具体的な道筋と目標を見定めるために様々な意見交換が行われ、具体的な提言が行われてきたと承知しています。

本年は、被爆 70 年であるとともに、パグウォッシュ会議発足のきっかけとなったラッセル・アインシュタイン宣言から 60 年の節目の年でもあります。このような年に、被爆地長崎において会議が開催されることは、世界の著名な科学者や専門家の皆さんが被爆の悲惨な現実に直に触れ、核兵器の非人道的影響の正しい理解につながるだけでなく、被爆地から「核兵器のない世界」に向けた新たな提言を、国際社会に力強く発信するという点でも大変大きな意義があります。

本年 5 月に行われた核兵器不拡散条約（ＮＰＴ）運用検討会議では、残念ながら最終合意に至らず、将来の核軍縮・不拡散の指針を示すことができませんでしたが、本会議を機に「核兵器のない世界」に向けた機運が更に高まることを期待しています。

私は、被爆 70 年の本年、8 月 6 日及び 9 日、原爆犠牲者慰霊平和記念式典出席のために広島と長崎を訪れ、改めて平和の尊さをかみしめ、唯一の戦争被爆国として、非核三原則を堅持しつつ、「核兵器のない世界」の実現に向けて、国際社会における核軍縮の取組を主導していく決意を新たにしました。

来年、日本はG7 議長国となり、4 月に広島で外相会合を開きます。我が国としては、核兵器国と非核兵器国、双方の協力を引き続き求めつつ、「核兵器のない世界」の実現に向けて、一層の努力を積み重ねていきます。

最後に、被爆地長崎において、参加者の皆様が被爆の記憶を風化させない、核廃絶を成し遂げたいという被爆者の強い思いを世代と国境を越えて継承され、「核兵器のない世界」実現に向けた有意義な議論が行われることを期待し、また、今次会議の成功と参加者の皆様のますますの御健勝をお祈りし、私の祝辞とさせていただきます。

岸田文雄 外務大臣メッセージ

代読：黄川田仁志 政務官

ダナパラ会長、御列席の皆様、

はじめに、ダナパラ会長を始め、本件会合の開催に尽力された関係者の皆様に敬意を表します。

パグウォッシュ会議は、これまで核兵器の拡散を防ぎ、核廃絶の早期実現を目指す道筋と目標を見定めるために、様々な議論や提言を行ってきたと承知しています。被爆から70年の節目に、ここ長崎においてパグウォッシュ会議が開かれることは、「核兵器のない世界」に向けた決意を高める上で大きな役割を果たすと思います。

今や長崎は、近代化を成し遂げ、かつて焼け野原であったとは信じられないほどの発展を遂げましたが、70年前、ここ長崎、そして私の故郷広島では、原子爆弾により一瞬にして20万人以上の尊い命が奪われ、きれいな街並みが廃墟と化しました。その後も、多くの方が後遺症に苦しみ、亡くなっていきました。

御列席の皆様の多くは、今朝、被爆者から講話を聴講され、平和公園や原爆資料館、城山小学校等を訪ねられ、被爆の実相に触れられたと承知しています。本日、この場にも被爆者の方々がいらっしゃっていますが、被爆者の平均年齢は80歳を超えました。被爆の記憶を風化させてはなりません。我々は、核兵器廃絶を成し遂げたいという被爆地・被爆者の強い思いを、世代と国境を越えて継承していく必要があります。

核軍縮・不拡散の取組については、現在の厳しい安全保障環境を踏まえ、目の前に存在する核リスクに対する冷静な認識を持った上で、現実的かつ実践的な取組を着実に積み重ねていくことが不可欠ですが、その出発点として、核兵器の非人道性に対する正確な認識が必要です。

本会議には、様々な国から政治家、専門家が出席されていますが、私は、唯一の被爆国日本の、被爆地出身の外務大臣として、核兵器国を含め、世界のより多くの指導者に被爆の実相を知っていただきたいと考えており、引き続き、積極的に、世界の指導者に協力を呼び掛けていきます。

日本は、唯一の戦争被爆国として、非核三原則を堅持し、また、核兵器の惨禍をどの国よりもよく知っていることから、「核兵器のない世界」に向けて、これまで国際社会の取組を主導してきました。本年9月からはカザフスタンとCTBT発効促進調整国を務めます。また、来年4月にはＧ7議長国として広島で外相会合を開く予定です。日本は、このような枠組みや様々な国際会議の機会等を通じて、核兵器国と非核兵器国、双方の協力を引き続き求めつつ、「核兵器のない世界」の実現に向けて、一層の努力を積み重ねていきます。

本年5月に行われた核兵器不拡散条約（ＮＰＴ）運用検討会議では、残念ながら最終合意に至らず、将来の核軍縮・不拡散の指針を示すことができませんでしたが、我々は「核兵器のない世界」に向けた取組を怠ることはありません。

先日、日本は「核兵器の全面的廃絶に向けた新たな決意の下での共同行動」と題する決議案を、国連総会第一委員会に提出しました。核軍縮を進めるためには、核兵器国と非核兵器国が協力しながら、具体的かつ実践的な措置を着実に積み重ねることが何より重要との考えから、被爆70年を機に、新たな決意で核兵器廃絶に向けて取り組むよう、各国に呼びかけるものです。決議案の採択は明日以降に行われる予定ですが、日本としては、本決議案を通じて「核兵器のない世界」に向けた機運を一層高めていきたいと考えています。

今やるべきことは、ＮＰＴ体制の更なる強化に向けて努力し、次回のＮＰＴ運用検討会議の成功につなげることです。日本は、引き続き、そのために最大限努力していきます。

本年は、被爆70年に加え、パグウォッシュ会議発足の元となった「ラッセル・アインシュタイン」宣言が行われてから60年、パグウォッシュ会議がノーベル平和賞を受賞して20年の節目でもあります。

今朝、パグウォッシュ会議から、被爆者を初めとする被爆地の取組に敬意を表し、パグウォッシュ会議が受賞したノーベル平和賞のメダルのレプリカが長崎と広島に寄託されました。今回、両都市におけるこれまでの取組が、世界から評価されたことを、喜ばしく思います。このような節目の機会に、このような式典が行われることは、核軍縮・不拡散の機運を更に高めることにもつながると思います。

ある被爆者は、人類の叡智が開発した「核」の脅威こそ、全人類が生き残っていくために一日としておろそかにできない重大な問題であると述べましたが、私は、この問題は、例え年月がかかろうとも、人類の叡智によって必ず解決できる問題であると信じています。

「ラッセル・アインシュタイン」宣言では、ノーベル物理学賞を受賞した湯川秀樹博士を初め、世界の著名な科学者が名を連ね、平和に向けた科学者、市民の責任について述べられました。「私たちの前には、もし私たちがそれを選ぶならば、幸福と知識の絶えまない進歩があります。」人類は、弛みない科学の発達により、様々な課題を乗り越えてきました。核軍縮・不拡散において我々が直面する種々の課題も、必ずや乗り越えていける、そう思います。本日ここに御列席の科学者、軍縮・不拡散の専門家の皆様には、是非会議を通じて、「核兵器のない世界」、そして「幸福と知識の絶えまない進歩」に向けた議論を深めていただきたいと思います。

これから5日間、皆様の議論が有意義なものとなり、ここ被爆地長崎から、実りある成果が世界に発信されることを願い、私の挨拶を終えさせていただきます。御静聴ありがとうございました。

中村法道 長崎県知事 歓迎挨拶

皆様こんにちは。長崎県知事の中村法道でございます。ここからは日本語でご挨拶申し上げます。

第61回パグウォッシュ会議世界大会の開催にあたり、長崎県民を代表いたしまして、本大会のご盛会をお慶び申し上げますとともに、国内外からご参加いただきました皆様のご来県を心から歓迎申し上げます。

1955年の「ラッセル・アインシュタイン宣言」をきっかけに始まったパグウォッシュ会議は、今回、61回目の開催を迎えられました。この間、会議での「対立を超えた対話」を通じて、包括的核実験禁止条約（CTBT）、核兵器不拡散条約（ＮＰＴ）などの立案や成立に貢献され、1995 年には「国際政治における核兵器の役割を減じ、核兵器の廃絶を目指す長年にわたる努力」が評価され、ノーベル平和賞を受賞されました。これまでのパグウォッシュ会議の取組に対しまして、心から敬意を表する次第でございます。

今年は、ラッセル・アインシュタイン宣言が出されてから60年、ノーベル平和賞を受賞されてから20年目の節目の年に当たります。また、ここ長崎は、被爆70年という節目の年を迎えております。こうした節目の年に、被爆地長崎で、世界各国から多くの参加者が集いパグウォッシュ会議世界大会が開催されますことは、大変意義深いものであります。

ここ長崎では、70年前の8月9日、浦上の上空で一発の原子爆弾が炸裂し、強烈な熱線と爆風、大量の放射線が7万4千人もの尊い命を奪い、街を破壊し、焼き尽くしました。それから70年、甚大な被害を受けた街は、今日では平和を願う、美しい街に生まれ変わりましたが、かけがえのない家族を亡くされた悲しみは今なお深く、多くの方々が後遺症に苦しんでおられます。

被爆者は平均年齢80歳を迎え、高齢化が進む中で、必死になって被爆の実相を訴えてこられました。また、私たち長崎県民は「長崎を最後の被爆地に」という願いを込め、あらゆる機会を通して、原爆の悲惨さと非人道性を世界の人々に伝え、一日も早い核兵器の廃絶と世界恒久平和の実現を訴えてまいりました。

しかしながら、未だ世界には、人類を滅ぼしてなお余りある核兵器が存在しており、我々の未来にとって大きな脅威となっております。また、世界の諸地域では緊張・対立が続くなど、世界の平和と安定は実現できておりません。

このような中、この長崎の地で、核兵器や戦争の廃絶を訴えるパグウォッシュ会議世界大会が開催され、世界のあらゆる立場の国から、科学者や政府関係者などが集い、議論が交わされ、その成果として世界へ向けて発信される長崎宣言は、核兵器廃絶と世界恒久平和を実現に貢献していくものと強く期待しております。

各国の指導者をはじめ、世界中の皆様には、この会議で出される被爆地長崎からの長崎宣

言をしっかりと受け止めていただき、そして、被爆地を訪問され、肌身を通して原爆の悲惨さや非人道性を確かめていただきますことを切にお願いいたします。

私たち長崎県民は、今回の会議を契機として、一日も早い核兵器のない平和な世界の実現に向けて、より一層努力してまいります。

結びに、本大会が実り多い成果をあげられますよう祈念いたしますとともに、ご出席皆様方の今後益々のご健勝、ご活躍をお祈り申し上げ、ごあいさつといたします。

ありがとうございました。

田上富久 長崎市長 歓迎挨拶

本日、ここ長崎市において、「第61回パグウォッシュ会議世界大会」が開催されるにあたり、長崎市民を代表し、一言ご挨拶を申し上げます。

ようこそ長崎へお越しくださいました。

はじめに、1957年の第1回開催から本日に至るまで、長年にわたり核兵器廃絶の道筋を世界に示し続けてこられましたパグウォッシュ会議の皆様に深く敬意を表したいと思います。

そして、歴史あるパグウォッシュ会議が、広島・長崎の被爆から70周年、核兵器廃絶と戦争廃絶を訴えたラッセル・アインシュタイン宣言60周年の節目にあたる重要な年に、長崎で初めて開催されますことに、深くお礼を申し上げます。

70年前、原子爆弾による壊滅的な被害を受けた長崎は、「長崎を最後の被爆地へ」という思いで、核兵器廃絶と恒久平和の実現を訴え続けてきました。

このような中、国際社会においては、パグウォッシュ会議での議論を転機として、部分的核実験禁止条約（PTBT)、核不拡散条約（NPT)、非核兵器地帯の実現などあげればきりがないほどの影響を与え、その議論の発展に被爆者をはじめとする私たち長崎市民は勇気づけられてきました。そして、近年では、核兵器の非人道性に焦点を当て、核兵器を国際法上禁止しようとする動きも高まっています。

さらに今回は、会議の成果を「長崎宣言」として発表されるとお聞きしており、長崎や日本のみならず、その宣言の影響力は世界に広がり、非常に重要な提言になると、私たち長崎市民は注目しています。

今回の会議開催を機会に、国内外に核兵器のない世界を求める声が、いっそう大きくなることを期待します。

最後に、「第61回パグウォッシュ会議世界大会」のご成功と関係者の皆様方のますますのご健勝、ご活躍を心から祈念し、私の挨拶といたします。

片峰茂 長崎大学学長 歓迎挨拶

尊敬する素晴らしい科学者の皆さん、ようこそ長崎大学へお出でくださいました。心より歓迎いたします。世界中から皆さんをお迎えし、ここ長崎の地でパグウォッシュ会議が開催されますことは、原爆被ばくを体験した稀有のアカデミアである長崎大学にとりまして、名誉であり大きな喜びであります。

70 年前、1945 年 8 月 9 日、長崎医科大学が存在した正に此処、この場所の真上の空で一発の原子爆弾がさく裂しました。そして、キャンパスと病院は瞬時にして灰塵に帰し、900 名もの学生、教職員、医療従事者の命が奪われました。その後、生き残った先輩たちの努力により、長崎大学は復興を果たし、9 つの学部を擁する日本に不可欠の総合大学として発展し、現在に至っています。被ばくの悲しい体験に基づき、長崎大学の教育・研究の最も根源的なミッションは、核兵器の廃絶と世界恒久平和の実現にあります。

とくに、被ばく直後からの被爆者救済のための医療活動の体験は、原爆後障害医療研究所（Atomic Bomb Disease Institute）に引き継がれ、世界をリードするヒバクシャ医療と放射線健康リスク領域の研究・人材育成が展開されてきました。熱傷や急性白血病などの急性障害にとどまらず、さまざまな臓器の発がんリスクや精神的影響など、ヒバクシャの健康を生涯にわたって苛みつづけることを明らかにし、原爆の非人道性を示す科学的根拠を世界に発信し続けてきました。また、長崎・広島の被爆者、チェルノブイリを始めとする世界のヒバクシャの医療に貢献するとともに、福島の原発事故にあっては福島県民の健康リスク管理に中心的な役割を果たしています。

2009 年のオバマ大統領のプラハ演説を大きな契機に、長崎大学は核兵器廃絶に向けた社会科学的アプローチを強化し、核兵器廃絶に向けた世界の潮流の中でより積極的な役割を果たす決断をし、2012 年 4 月核兵器廃絶研究センター（RECNA）を創設しました。世界で初の核兵器廃絶を冠する本格的な研究組織だと思います。今回のパグウォッシュ会議の事務局長である鈴木達治郎博士が、現在センター長をつとめておられます。発足後 3 年、RECNA の活躍は素晴らしく、被爆地長崎のシンクタンクとして大きな役割を果たすとともに、本年 6 月の NPT 会議において、研究成果である「北東アジア非核地帯構想」を政策提言として世界に発信しました。

長崎原爆から 70 年が経過しました。これまで、核兵器廃絶の象徴であり、その存在をも

って核兵器廃絶の潮流をリードしてきたヒバクシャの皆さんの平均年齢は 80 歳を優に超えました。ヒバクシャの体験や思いを共有し、継承し、“核なき世界”の実現を担ってくれる次世代人材を育成することも、被爆地のアカデミアの大きな役割であると思っています。いま、多くの若者が主体的に RECNA（核兵器廃絶センター）に集い、学び、議論し、発信し、そして世界の若者との交流を開始しています。大変心強く感じているところです。

ラッセル・アインシュタイン宣言から 60 年。世界の構造は大きく変容し、私たち人類は様々な地球規模課題に直面しています。生命科学や情報科学の驚異的発展にともない、科学と人間社会の関係はますます密接となり、そして複雑化しています。科学技術が実現する便利さや豊かさに対する社会の期待は増大するとともに、社会が巨大なステークホルダーとして科学者の前に立ち現れています。一方で、科学技術の進歩それ自体が地球や人類の持続的発展の阻害要因の一つとなっていることも事実です。戦争の危機は減ることはなく、次々に開発される新鋭兵器により戦争が有する非人間性は増大しています。ニューヨークでの NPT 会議の結末を見ても、未だ核兵器廃絶の実現への確たる道筋は見えません。今ほど、科学者に高邁な世界観と倫理観が要求される時代はないと思います。60 年前と比べても、パグウォッシュ会議の役割はますます大きくなっているのだと思います。今回の長崎会議が、核兵器廃絶や世界平和の実現、そして地球・人類の持続的発展に向けての、大きな結節点となることを期待してやみません。

長崎大学も、その一翼を担いたいと思います。今回の会議が、世界の科学者の皆様に、長崎大学の思いや取組を知っていただき、今後様々な形で皆様と長崎大学との協働につながる契機となることを期待したいと思います。

最後に、パグウォッシュ会議長崎大会の成功を心より祈念して、ご挨拶といたします。ご清聴ありがとうございました。

各セッションまとめ

11 月 1 日　ノーベル平和賞寄託式典、遺構訪問、被爆者講話

大会初日の朝は、曇り空の中でまず平和祈念像への献花から始まった。ジャヤンタ・ダナパラ氏とパオロ・コッタ=ラムジーノ氏がパグウォッシュ会議を代表して献花を行い、その後参加者全員による記念撮影を行った。

次に、原爆資料館ホールにて、ノーベル平和賞メダル（複製）と賞状の寄託式典が行われた。これは、パグウォッシュ会議が 1995 年に受賞したノーベル平和賞メダル（複製）と賞状（オリジナル）を長崎市、広島市の両資料館に永久展示（寄託）する、というもので合意に達したものを記念する式典であった。その趣旨は「核兵器廃絶と平和の実現を希求する長崎・広島市民、特に被爆者の声を国際社会が改めて認めた証である」（ダナパラ氏）とされた。式典には長崎市長の田上富久氏に加え、広島市代表、パグウォッシュ会議からは、ダナパラ氏、コッタ=ラムジーノ氏、スティーヴ・ミラー氏、サイデ・ロトフィアン氏が壇上に上がり、厳かにかつ和やかな雰囲気で式典が行われた。

引き続き、原爆資料館ホールにて被爆者講話が行われた。お話しいただいた被爆者の方は、日本政府の初の「非核大使」に任命され、世界各地で英語での被爆体験の講話を続けられてきた山脇佳朗氏（82 歳）であった。また会場には、被爆者の方々や長崎市民が多く参加され、会場全体が一つとなって山脇氏の講話に聞き入った。氏の講話は静かではあったが、当日の生々しい悲惨な長崎の様子、特に実の父親の遺体を荼毘にふす情景など、参加者全員の心に突き刺さる強烈なものであった。最後に、「パグウォッシュ会議に参加されている科学者の方々の力で核兵器の廃絶を実現してください」との言葉で講話を終えられた。その直後から会場は参加者全員が起立して拍手する“スタンディング・オベーション”が 2 分以上も続くほどであった。この講話が会議参加者全員に強い印象を残したことは間違いがない。その後、シリアからの参加者が「今シリアでは毎日のように悲劇が繰り返され市民が犠牲になっている」と発言し、現在も戦争の脅威が継続している事実を参加者全員が共有し、貴重な対話の場となった。

講話を終え、評議会メンバーは、その後城山小学校遺構を見学、他の参加者は原爆資料館、平和祈念館を見学した。城山小学校は、爆心地から西に約 500mに位置し、爆心地に最も近い学校であり、1400 名余の児童と職員が犠牲となった。現在は 1937 年（昭和 12 年）に完成した北校舎が被爆校舎として保存されており、当時の被爆資料を展示する「平和祈念館」として公開されている。当日は、遺構を「文化財」として認定するうえで、活躍された公明党の秋野公造氏も挨拶に訪れ、ダナパラ氏からも遺構訪問の機会を与えていただいたことにお礼の一言が述べられた。また、同校の卒業生で被爆者の方々が案内人として説明をしてくださり、参加者一同、特別な思いで「キノコ雲の下」で起きたことをそれぞれが胸に刻む貴重な体験となった。

11 月 1 日　全体セッション

第一日目の午後は会場を長崎大学坂本キャンパスに移し、医学部大講堂で開会セッションがおこなわれた。司会を長崎大学核兵器廃絶研究センターの中村桂子氏が務めた。

まずダナパラ氏、コッタ=ラムジーノ氏、そして鈴木達治郎氏から、それぞれ挨拶があり、また国連事務総長の潘基文氏、内閣総理大臣の安倍晋三氏からの挨拶が代読された後、黄川田仁志氏によって外務大臣の岸田文雄氏の挨拶が代読された。

引き続いて長崎県知事の中村法道氏が、開催地長崎から発せられる予定の「長崎宣言」の意義を強調し、長崎市長の田上富久氏は、「平和は長崎から」という市民の声が反映されたものになることへの期待を表明した。さらに長崎大学学長である片峰茂氏は、長崎大学の前身である長崎医科大学では千名近くの教職員が原爆の犠牲となったことに触れ、まさにこの地がその現場であることを、あらためて聴衆に想起させた。

3 時からの公開シンポジウム「ラッセル・アインシュタイン宣言と人間性の回復：核兵器のない世界をめざして」開始にあたりジェニファー・サイモン氏は、まず原爆は投下されてはならなかったと断じ、核兵器の問題性は未だに十分に世界で理解されていないと訴えて、

集った人々に自身の果たすべき役割の再認識を促した。核兵器には開発当初から機密がつきまとい民主的統制になじまない。また最近の知見によれば、偶発核戦争や核事故の危険は従来認識されていた以上のものである。既に 60 年前、ラッセル・アインシュタイン宣言は、種としての人類を滅ぼしうる力を手にした以上、核兵器を禁止する取り決めでは不十分で、戦争自体の廃絶をめざさなくてはならないと述べた。サイモン氏はこの点を指摘し、さらに核兵器を人道、倫理の問題としてとらえ直し、多数の人々の意志によって、現状の打破に向けて働きかけていかなくてはならないと述べ、この日のセッションの基調を示した。

サイモン氏の講演を受け、第一セッション「核兵器の非人道的影響」では、グローバル・ゼロのブルース・ブレア氏の司会のもと、長崎原爆病院名誉院長の朝長万左男氏が、人体への破壊的影響について最新の医学的知見を示し、核兵器は人の遺伝子をターゲットにする兵器であると指摘した。さらに赤十字国際委員会駐日代表リン・シュレーダー氏からは、赤十字としての活動が紹介された。会場からは、原発事故による人体への影響について質問があった。

休憩を挟んで、第二セッション「核兵器廃絶への道筋：核軍縮の見通し」では、この分野で中心的な役割を果たしている米ロの現役外交官がパネリストとなってどちらも安全保障を重視する立場から性急な核軍縮の主張とは距離を置く姿勢を示し、会場からいくつもの批判的なコメントを浴びた。イランのサイデ・ロトフィアン氏が司会役を務めた。

続いて、第三セッション「『非核兵器、非大量破壊兵器地帯』をめざして」が開かれた。司会にダナパラ氏、パネリストに梅林宏道氏、ヤルガルサイハニー・エンクサイハン氏、国連軍縮担当事務次長のキム・ウォンス氏の 3 名を迎えた。セッションでは、世界の三分の一以上の人口を擁する 110 ヶ国以上の国が非核地帯のもとにあるのに対し、特に北東アジア地域では「拡大抑止」（核の傘）という考え方に縛られた非核国の安全保障政策や、北朝鮮の核兵器への執着が克服されるべき課題であることが、あらためて浮かび上がった。

最後に、中央アジア非核地帯の一国であるカザフスタン共和国のアキルベク・カマルディノフ氏が挨拶し、非公開セッションの会場となる伊王島で冷戦期の核実験による被害の実態を描いた写真展を行う旨を述べた。

11 月 2 日　全体セッション

非公開の全体セッション、第一日目のテーマは「南アジアの核リスク」であった。報告者はパキスタン国家指揮最高部顧問のハーリド・キドワイ氏、司会をコッタ=ラムジーノ氏が務めた。

キドワイ氏は、パキスタンの核計画に 15 年間携わった経験に基づき、現在のパキスタン軍における核兵器の戦略的位置づけについて報告した。「すなわち、印パの対立するカシミールにおいて、パキスタンの主張は人民の自決権にもとづいており正当である、1998 年の核実験は、インドが強行したのに対してやむを得ず受け身的におこなったものである、核兵器は平和をもたらす兵器として位置づけたいが政治的な未熟さがそれを妨げている、今や核兵器使用を組み込んだ戦争ドクトリンを印パ両国が持つに至っている、核兵器には「平和の兵器」という性格もある、とのこと。」キドワイ氏は、「人間性を忘れるな」という長崎の声を忘れぬようにしたいと繰り返し述べ、印パの関係改善のために交渉を開始すべきであると主張した。

これに対し、パキスタン軍は核兵器関連の指揮命令系統をきちんと機能させるための訓練を行っているのか、新しい戦術核兵器を開発中とのことだが、軍備競争となり状況を不安定化させるのではないか、平時の安全な管理のため米国や NATO 諸国が払ってきた努力について研究しているのか、核兵器保有後も印パの間にカーギル戦争「編集者注: カーギル戦争：インド（核実験 1974 年、1998 年）とパキスタン（核実験 1998 年）は、両国の関係改善を目指して、1999 年 2 月にラホールで首脳会談を開き、「ラホール宣言」を発表した。しかしその直後の 5 月にカシミールのカーギルで両軍が衝突し、関係改善に至らなかった。」などが起きており危険は増しているのではないか、といった質問が飛び交った。キドワイ氏からは、核兵器保有によって平和と安定がもたらされているという主張が繰り返されたが、それらの回答は参加者を満足させず、むしろ軍事バランスの追求がかえって不安定をもたらすことや、高い知性を有する人でも自国の行動が他国に不安を与えることへの感性がどうしても鈍ることなどが、討論から浮かび上がった。

2 時間にわたるセッションに引き続き、コッタ=ラムジーノ氏から、前回イスタンブール大会以来のパグウォッシュ会議の 2 年間の活動について報告があった。

11 月 3 日　全体セッション

非公開の全体セッション「包括的核実験禁止条約（CTBT）に向けて」では、CTBTO 事務局長のラッシーナ・ゼルボ氏 による報告（代読）につづき、セルジオ・デ・キロス・ダルト氏、ダナパラ氏からのコメント、討論が行われた。報告では CTBT の重要性が強調されると

同時に、同条約が依然米国をはじめ多くの国によって批准されておらず、発効に至っていないことの問題性が指摘された。コメントおよび討論では、CTBT が核軍拡競争を抑制する上で果たしてきた積極的役割、発効前の措置として核実験を禁止する国連安保理決議をおこなうことの意義、核保有国における「核兵器の近代化」計画とこの問題との関連などが議論された。

次に、セッション「北東アジアにおける平和共存をめざして」では、遠藤誠治氏、マーク・スー氏、趙通氏による報告が行われた。遠藤氏は日本政府が従来の憲法解釈を変更して「安全保障関連法」を成立させたことに触れたのち、東アジアの現状を分析し、域内パワーバランスの変化、米中の拮抗等の要因を検討した。域内の相互不信に関する具体的データが紹介され、教育の重要性、軍事偏重政策からの脱却の必要性等が議論された。韓国のスー氏は朝鮮戦争・ベトナム戦争を生き抜いて平和主義者となり、パグウォッシュ会議を推進したジョセフ・ロートブラット氏と出会った自らの経験から語り起こして、朝鮮半島をめぐる状況の歴史的背景、問題の平和的解決の展望を論じた。中国の趙氏による報告は、1962 年に沖縄米軍基地の核ミサイルが発射寸前の事態となった誤命令事故のエピソードから始まり、日本のプルトニウム保有や韓国のミサイル計画に対して中国・北朝鮮が抱く危機感を指摘すると共に、域内の緊張を緩和するための現実的方策を検討した。討論では、アジアをめぐる欧米やロシアの立場の相違、非核地帯構想の展望、信頼醸成の具体的方途などが話し合われた。

この日は昼食後、再び長崎大学坂本キャンパスに移動し、長崎大学医学部大講堂で市民の傍聴者を含めた公開セッションが行われた。

全体セッション「原子力の平和利用のリスク」では、黒川清氏、フランク・フォン・ヒッペル氏による報告につづき、ラマムルティ・ラジャラマン氏、シャロン・スクアッソーニ氏のコメント、およびフロアを交えての討論が行われた。黒川氏は、福島第一原発事故に関する国会事故調査委員会での活動の経験を踏まえつつ、現在の世界は経済・エネルギー・国家システム等すべての面にわたって巨大な転換点にあること、事故は日本の政治文化の重大な欠陥や、「責任不在体制」の問題も暴露したことを取り上げ、フォン・ヒッペル氏は、核燃料再処理プロセスの危険性の問題を指摘した。コメントおよび討論では、核エネルギー利用をめぐる世界の現状と核兵器の拡散・核事故のリスクやサイバー・テロとの結合の可能性等が検

討され、原発事故が人間生活と自然に与える影響を全面的に検証する必要性や、平和利用をめぐる「期待と現実のギャップ」の問題などが議論された。

ドロシー・ホジキン・レクチャーでは、ノーベル化学賞受賞者の下村脩氏が「わたしのロス・アラモスへの訪問」と題して講演を行ない、これを受けてノーベル物理学賞受賞者の益川敏英氏がコメントし、フロアからの質疑応答が行われた。下村氏は諫早での学徒動員中に長崎への原爆投下の瞬間を目撃したこと、その後 2 か月の体験の意味を語ると共に、自身の学問形成の歴史を振り返り、さらに後年ロス・アラモス研究所を訪問して米国の科学者と交流した際の感慨を述べた。コメント・討論の中では、若い世代にどのようなメッセージを伝えるか、戦争による科学の利用、科学と政治の関係などの問題が議論され、二度と戦争を繰り返してはならないという思いが共有された。

11 月 3 日　能楽鑑賞

免疫学者故多田富雄氏作の現代能『長崎の聖母』はニューヨークやボストンでの上演を経ての新たな演出にて、大会 3 日目の公開セッションの最後に、特別公演として上演された。劇中に長崎医科大学も登場し、まさにその場所での上演となったため、主演の清水寛二氏をはじめ、出演者も熱の入った素晴らしい公演となった。高校生たちの清らかな歌声と古典である能の中にある声が、パグウォッシュ会議参加者全員の心に強く感動を呼び起こした、素晴らしい 1 時間であった。

11 月 4 日　全体セッション

この日の全体セッションは非公開の 3 部構成で行われた。

最初に、ダナパラ氏より会長報告があった。チュニジアでノーベル平和賞を受賞した民主化・和解の試みや、アフガニスタンをめぐる対話などの動きにパグウォッシュの活動が寄与していることを報告した。脱植民地化・人権・ジェンダー等の分野で国連が果たしてきた役割が強調され、イランやパキスタンをめぐる最近の展開を分析すると共に、難民問題等、人間の尊厳に関わる課題の重要性を指摘した。長崎が東西の文化交流の場として果たしてきた役割を指摘し、最後に長崎市・長崎県への謝意を表明した。

次に、全体セッション「イラク、シリア、「ＩＳ」問題」では、イラク・エネルギー相のフサイン・アル・シャフリスターニー氏による報告（代読）が行われた。いわゆる「ＩＳ」の台頭の政治・社会・経済的背景が分析されると共に、対応策が検討され、中東に存在する「不公正感」（パレスチナ問題や外国占領の傷跡など）を正すこと、教育の重要性、ＩＳへの資金・武器の供給源を断つこと、シリア危機の平和的解決、国際社会の関与の必要等が指摘された。討論では、国際法の重要性、中東への武器流入を止める方策、「破綻国家」の問題、軍事的解決の是非、国際社会の関与のあり方等が議論された。

最後に、全体セッション「イラン核問題をめぐる議論と交渉の 12 年」では、イラン副大統領・イラン原子力機関（ＡＥＯＩ）の長であるアリー・アクバル・サーレヒー氏による講演が行われた。講演では問題の背景が論じられると共に、米・イラン合意成立を可能にした国際的・国内的諸要因が紹介された。合意履行には公正さ、主権の尊重が重要であることが強調されると共に、イランは核軍縮の努力を支持しており、核兵器も大量破壊兵器もない世界をめざしていることが確認された。討論では、合意を永続化させるための方策、CTBT 批准問題、アラブ諸国との信頼醸成や域内協力の必要性等が議論された。

11 月 5 日　全体セッション

会議最終日は、非公開の全体セッション「ラッセル・アインシュタイン宣言から 60 年及びこれから」で始まった。このセッションは、パグウォッシュ会議事務局長及びパグウォッシュ・ヒストリー・プロジェクト長を務めるサンドラ・ブッチャー氏を司会役として、パグウォッシュ会議に当初から関わってきた小沼通二氏と、国際学生・ヤングパグウォッシュ会議（ISYP）議長のアンナ・ペチェリ氏、前

議長のカリム・カドリー氏との間で世代間対話が行われた。小沼氏はこれからのパグウォッシュ会議に対して、会議で取り上げるテーマが広がってきているが、ほかの組織と同様な発言にとどまらないように、パグウォッシュ会議の特色を出して取り組んでいくことと、ラッセル・アインシュタイン宣言の戦争廃絶の主張が深められてこなかったが、今や具体的なステップを一歩一歩進めていく必要があると要望した。また、ISYP 代表は将来構想文書「長崎から行動を求める」を公表した。それは、「私たちすべてが直面する難しい国際安全保障問題の解決において積極的な役割を果たすよう若者を巻き込み、勇気づけ、励ます」ことを社会に訴えるものだった。

もう一つの非公開全体セッション「次なる一歩」は非公開セッションであり、各ワーキング・グループの代表からグループの議論や成果について報告があり、それに対するフロアとの質疑応答が行われた。

そして全体セッション終了後、会議の締めくくりとして、ダナパラ氏、コッタ=ラムジーノ氏、ミラー氏、ロトフィアン氏、鈴木氏、調氏らが記者会見を開き、「長崎宣言」を発表した。様々なメディアで報じられた同宣言は、「長崎を最後の被爆地に」と訴え、「パグウォッシュ評議会は核兵器の廃絶を希求する被爆者の声に耳を澄ます」と言明している。

その他

河野洋平（日本パグウォッシュ会議諮問評議会委員、元衆議院議長）

11 月 3 日グラバー庭園での晩餐会におけるスピーチ（概要）

河野氏はパグウォッシュ会議の長崎開催を歓迎し、自身が外相を務めた 1994 年以来、日本が国連に核兵器廃絶決議案を提出し続けていることを紹介したあとで、核の脅威、戦争の廃絶、そして相互理解の重要性等の問題について議論を進めた。

核の脅威に関しては、核兵器の危険の実態を世界に知らせることが重要であること、2008 年にG8 下院議長会議が広島で開催され、各国議長が被爆地を訪問したことが「核なき世界」をめざすという合意につながり、のちの米オバマ大統領のプラハ演説の前提となったことが紹介された。現実には核保有国による核軍縮の動きが進んでいないこと、核兵器禁止条約の意味が論じられた。ＮＰＴ体制をめぐる状況が論じられ、インドとの原子力協定締結はＮＰＴ体制に打撃を与えることになるという危惧が表明された。また、原子力の平和利用に関しても、福島の事故以降は真剣な見直しが必要であり、河野氏自身はドイツ等による脱原発政策の選択に注目していることが述べられた。

戦争の問題に関して河野氏は、核兵器の災禍から人類を救うためには、ラッセル・アインシュタイン宣言で指摘されたように、究極的には核兵器だけでなく戦争自体を廃止することが必要であると述べ、近年、「問題を軍事力で解決しようとする風潮」が再び高まっていることに警鐘を鳴らした。民族や文化が異なっても、紛争は対話を通じて政治的に解決されるべきであると述べられた。この点で、最近日本が「武器は原則輸出しない」としてきた政策を変更したり、憲法解釈を変えて「集団的自衛権」行使を容認したり、辺野古への米軍基地建設を強行しようとしているのは、「戦争の廃絶」という人類の理想に逆行する動きである。

関連して河野氏は、中国や韓国など、東アジアの隣人たちとの相互理解・信頼醸成の重要性にも触れ、「中国の脅威」をことさらに煽る風潮に苦言を呈した。南京事件（「世界記憶遺産」登録問題）にしても、あるいは「従軍慰安婦」問題に関しても、日本は過去の過ちは率直に認め、決して繰り返さないことを明確にした上で、中国・韓国と力を合わせて共に解決していくべきなのであり、ここでも対話が重要であることが指摘された。

スピーチに対し、ダナパラ氏から感謝の辞が述べられた。

晩餐会では長崎県知事、長崎市長からも挨拶が行われた。

吉川弘之（日本パグウォッシュ会議諮問評議会議長）
11 月 4 日伊王島における晩餐会スピーチ（概要）

吉川氏は、現在、人類が直面している三つの大きな脅威について議論を進めた、これらと立ち向かうには、人文・社会科学者を含むすべての科学者の協力が不可欠であることを指摘した。第 1 の脅威は、近年、地球の地質学的変化によって世界中で自然災害が深刻化していること、第 2 の脅威は地球規模の温暖化あるいは気象変化、そして最後の脅威は核兵器であると述べた。ここで挙げた順番で、脅威と戦うために必要な科学的知見の量は増加しているが、第 1 の脅威は科学の一領域の知見によって対処できる。第 2 の脅威に対処するには、いくつかの領域の知見を要する。第 3 の脅威の場合、科学の全領域からなる新たな見地が必要である。それは、諸科学領域の統合、無から出発するデザイン指向、知識の進化、作り出す者と利用する者が対等に持つ知識などであると指摘した。諸々の科学アカデミーにおいて科学者は証拠に基づいて合意された助言を見出すために協力し、それらによって社会の関係者に助言が与えられるべきである。科学者の統一見解は重要である。われわれ科学者は、異なる領域をまたいで協力することを十分に教え込まれていないが、平和な未来を築くための行動に役に立つ科学的証拠を見出すために協力すべき時が来ていると結論した。

国際学生・ヤングパグウォッシュ会議

2016 年 10 月 30 日（金）、31 日（土）の 2 日間、長崎市の「やすらぎ伊王島」において、第 9 回国際学生・ヤングパグウォッシュ会議世界大会を開催した。今大会では「広島・長崎被爆 70 年−軍備管理、軍縮・不拡散の見通し」とのテーマを掲げ、被爆 70 年の節目に、核兵器の軍備管理、軍縮・不拡散と国際安全保障問題の展望と課題について議論を行った。

国際学生・ヤングパグウォッシュ会議は、ラッセル・アインシュタイン宣言に基づくパグウォッシュ会議の精神を踏まえ、核兵器の廃絶や科学者の社会的責任について、若手研究者が専門分野の枠を越えて議論を行う会議である。これまで、パグウォッシュ会議の世界大会が開催される年などに合わせて国際会議を開催してきている。

今大会には、日本人参加者 5 名を含め、19 カ国から 31 名の若者が参加した。参加者の多くは 20 代〜30 代で、核問題を中心とする安全保障課題や今日の世界が直面する課題に取り組んでいる自然科学と社会科学両分野の若手研究者や実務家である。参加者は応募段階で今大会のテーマに関する論文を提出し、国際学生・ヤングパグウォッシュ会議国際事務局による厳正な審査によって選出された。大会期間中、参加者は他の参加者と 4 人一部屋で寝食をともにして交流を深めつつ、率直な意見を交わして活発な議論を行った。こうした濃密な議論と交流を通し、参加者は専門分野の知識を深めるだけでなく、自然科学と社会科学の枠を越えて同世代の横のつながりを世界中に広げる貴重な機会を得ることができた。また、参加者全員が 11 月 1 日から開催されたパグウォッシュ会議の本会議にも参加し、そこで各分野の第一線で活躍する専門家の議論に触れ、時に議論に加わる中で、ラッセル・アインシュタイン宣言の精神について学び、若手の専門家としてその精神を次の世代に受け継いでいく機会が得られたことも、今大会の重要な成果であったと言える。

今大会では、「国際社会における核兵器の役割」、「核兵器削減に向けた方策」、「国際条約と合意に基づく検証と遵守」、「次世代の軍備管理、軍縮問題の専門家」、「エネルギー、環境および安全保障への影響」の 5 つのトピックを主な議題として 2 日間で 10 のワーキング・グループを行った。会議日程と会場の都合上、国際学生・ヤングパグウォッシュ会議では 2 つのワーキング・グループを並行して行う形式をとっており、今回もそうした形に沿って、2 日間で 5 つのセッションを設け、それぞれのセッション内で並行して A と B の 2 つのワーキング・グループを開催した。各ワーキング・グループのモデレーターは国際学生・ヤングパグウォッシュ会議国際事務局の理事が交代で務めた。

第 1 日目は国際学生・ヤングパグウォッシュ会議国際事務局代表の開会の挨拶で幕を開けた。開会セッションに続き、セッション 1 が行われた。ワーキング・グループ A は「日本の核に対する政策と安全保障戦略」と題し、日本の安全保障政策の転換、中国の南シナ海における活動、北朝鮮の核問題等によって複雑さが増している東アジア地域の安全保障課題について、率直な議論が交わされた。ワーキング・グループ B では、「東欧と欧州の安全保障」

として、中距離核戦力条約の遵守とウクライナ・クリミア危機を事例に、中東欧地域において多国間国際機関がロシアと欧州の間の安全保障上の懸念を解決する役割を担う必要性などについて議論が交わされた。セッション 2 では、ワーキング・グループ A が「新たな核能力と地域の安定」として、技術の進歩による新たな核兵器（およびその運用）能力が地域の安全保障に及ぼす影響について、印パ、中印および米中間を事例に、核弾道ミサイル搭載原子力潜水艦や弾道ミサイルの複数個別誘導弾頭化に焦点を当てて議論が行われた。ワーキング・グループ B では、「原子力エネルギーと持続的な発展」として、核燃料サイクルの問題を中心に、より技術的な観点から今後の政策についての議論が交わされた。セッション 3 では、「信頼醸成と軍縮」と題したワーキング・グループ A で、南アジアにおけるトラック 2 の対話が地域の安定に果たしうる役割が強調されたほか、東アジアにおいては、消極的安全保障などの信頼性を高める取り組みや輸出管理による不拡散の取り組みの重要性について議論が交わされた。ワーキング・グループ B では、「中東の安全保障と安定性」として、トルコがロシア等と締結した原子力協力や中東非大量破壊兵器地帯条約の課題について報告がなされた。

第 2 日目のセッション 4 では、ワーキング・グループ A で「市民社会の貢献と次世代の活動家」として、近年、軍縮・不拡散の分野において重要な役割を果たすようになってきた NGO が、若い世代に核問題を受け継いでいく上で果たす役割などが議論された。ワーキング・グループ B では、「核抑止に関する物語の起源と展開」として、冷戦後の核兵器と核抑止の役割について議論がなされ、核兵器の価値や核抑止の有効性について、様々な観点から疑問が投げかけられた。また、完全な軍縮の目標と核抑止による安定性のジレンマや、核兵器を段階的に削減するアプローチと人道性の観点から削減を進めるアプローチの対立についても活発な議論が交わされた。セッション 5 では、ワーキング・グループ A において「核合意とイラン」と題して、イランの核問題に関する包括的共同作業計画（JCPOA）の合意が中東地域の地政学と不拡散レジームに与える影響について、肯定的評価と否定的評価の両面から率直な議論が行われた。ワーキング・グループ B では、「環境と人間の安全保障」として、気候変動における原子力の役割、放射性廃棄物と科学者の倫理的責任も問題や、東電福島第一原発事故を事例に原子力事故の影響について議論がなされた。

第 2 日目の午後からは、2 日間の 10 のセッションで議論された内容を全員で共有する、総括のセッションが設けられた。参加者はその後、核や平和の問題に取り組む若者との対話を行うために、市内の平和祈念館に移動した。これは日本非核宣言自治体協議会の被爆 70 周年事業、長崎市および長崎大学核兵器廃絶研究センターとの共催で開催されたもので、日本国内および地元長崎において地域の戦争体験や被爆の体験を発信し次の世代に受け継いでいく活動などに関わる若者と、国際学生・ヤングパグウォッシュ会議の参加者が意見交換し交流を深める大変貴重な機会となった。セッションでは、日本の若者と各国からの参加者が混ざって小グループを作り、将来の世代に核兵器の問題などをどのように伝えていくかに

ついて議論した。議論は言葉や専門性の壁を超えて活発に行われ、セッションの時間を超過するほどであった。続いて開催された長崎市主催の夕食会の場においても、引き続き活発な意見交換が行われた。

第 61 回パグウォッシュ会議最終日の 11 月 5 日に行われたセッションにおいて、国際学生・ヤングパグウォッシュ会議は「2015 年国際学生・ヤングパグウォッシュ：長崎からの声明−未来に向けて共に行動を−」と題する声明を発出した。これは参加者が被爆 70 年の節目の年に被爆地長崎で議論し、若者との対話や被爆者の方々のお話を聞いた中で考えたことを踏まえて大会期間中にまとめられたもので、今日の国際安全保障上の課題に取り組むために国際学生・ヤングパグウォッシュ会議が今後進む方向を示し、これからの時代を担う世界中の若い世代に呼びかけるメッセージとなっている。

今回の国際学生・ヤングパグウォッシュ会議世界大会は、1995 年と 2005 年の広島での世界大会に続く日本での開催であり、長崎では初めての開催であった。70 年という節目の年に世界各国から集まった若い参加者たちが活発な議論を行い、直接被爆者の話などを通して「キノコ雲の下で何が起きたか」について直接触れることのできた機会は他では替えることのできない貴重なものであった。また、こうした被爆体験を次の世代につなぐ取り組みを進めている若者たちとの交流を通して、将来への希望を感じるとともに、国際学生・ヤングパグウォッシュ会議として、若い世代が長崎を最後の被爆地とするために取り組みを続けていくことへの想いを新たにした。会議は 2 日間を通して大変内容の濃い充実したものとなり、今大会を 70 年の節目の年に被爆地長崎で開催できたことの意義は大きい。また、そうした背景から今大会はメディアの関心も高く、報道を通して国際学生・ヤングパグウォッシュ会議の活動が国内において認知される機会を得られたことも将来に向けた前進であったと言える。

2015 年「国際学生・ヤングパグウォッシュ」
長崎からの声明
−未来に向けて共に行動を−

2005 年、国際学生・ヤングパグウォッシュ（ISYP）は、広島において「ミッション・ポッシブル：次世代との係り合い」と題する声明を発表しました。10 年後となる今年、また、ラッセル・アインシュタイン宣言の発表から 60 年の節目に、ISYP は不確実性に満ちた現代において平和的な共存が不可欠であることを改めて訴えます。

過去 10 年間、世界では紛争や潜在的な脅威が広がってきました。世界各地で、地域の安定を実現することは容易ではありません。情勢が不安定な地域では軍事的な紛争が今も続いています。核拡散は現在においても現実な脅威であり、核軍縮の達成は遠い目標のように感じられます。テロは世界中で現在も続いており、その手段もますます高度化し、残虐なものになってきました。科学技術の進歩によって戦争を行うことはより容易になりました。また、気候変動が加速し続けていることによって起こる安全保障上の問題も大きな脅威となっています。

これらの深刻な課題に対処するため、我々は引き続き核兵器・大量破壊兵器・テロリズムと戦争の脅威のない世界を作っていくことに取り組んでいきます。平和を希求するために、世界中の若者が連携していくことがこれまで以上に重要です。ISYP は、世界の人々の繋がりがますます増し、より複雑化した今日の世界が直面する課題に対処する次世代のリーダーを育てる機会を提供しています。ISYP の会議は、国や思想の違いを超えて若い世代が集い、長年にわたる争いを解決するための新しいアイデアを活発に議論し、広めることに努めていきます。また ISYP は、若い世代が共に現代の国際安全保障上の困難な課題を解決するために積極的な役割を担えるよう支援していきます。そのために、パグウォッシュ会議及びより広く軍縮に取り組む人たちの協力を求めます。

長崎では被爆者の方々にお会いし、原爆による想像を絶する困難の中でも将来に向けた希望を持ち続けたことと、被爆した経験を世界に伝える精神に強い感銘を受けました。また、最後の原爆投下地、ここ長崎において、被爆者の方々のメッセージを熱心に伝え続ける日本の若い人たちとも交流しました。その平和を希求する前向きな心に刺激を受け、パグウォッシュ会議の中で若い世代がこれまで以上に存在感を示して、ラッセル・アインシュタイン宣言の精神に基づいた未来を築くために一層努力することの重要性を再確認しました。そして、ラッセル・アインシュタイン宣言の言葉を常に心に留めることを誓います。

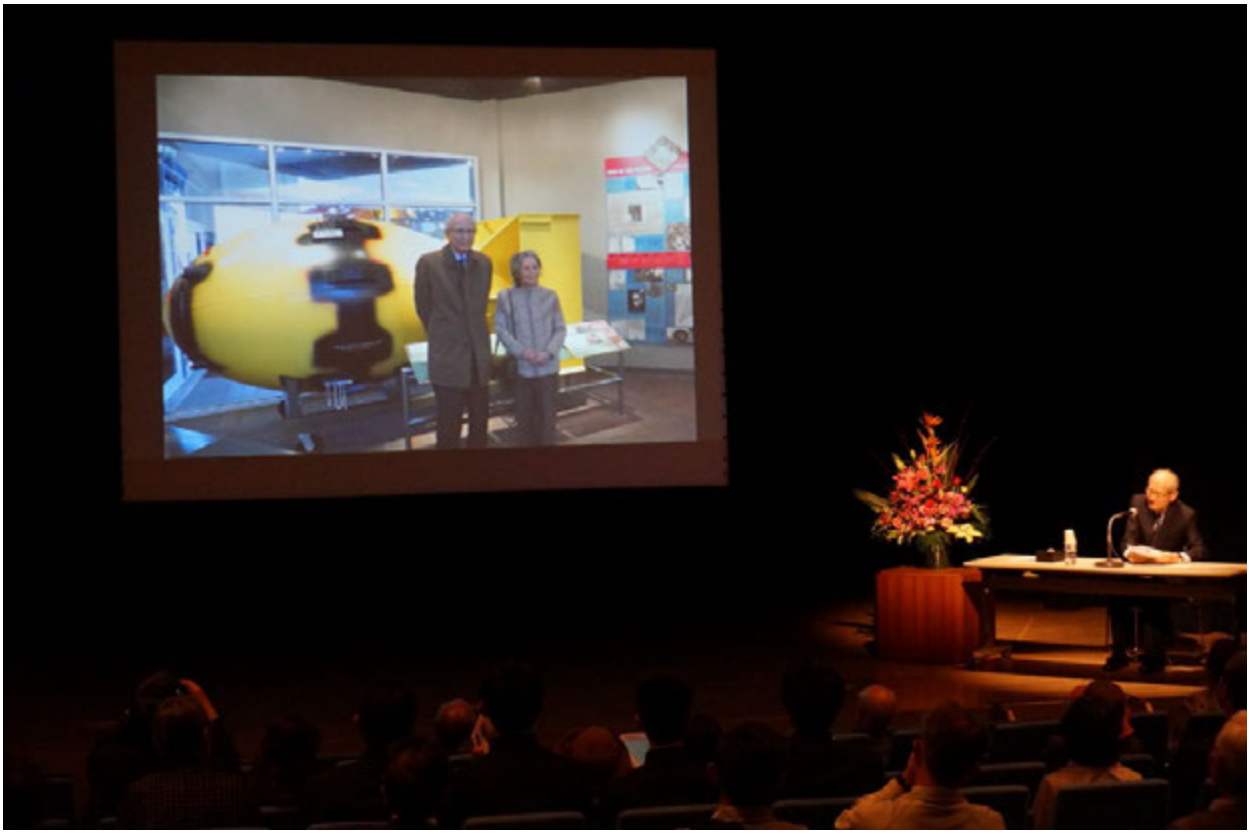
「あなたがたの人間性を心にとどめ、そしてその他のことを忘れよ」

長崎県民平和講演会（佐世保）

県民平和講演会、佐世保市、アルカス SASEBO イベントホール、2015 年 11 月 6 日（金）
概要：

パグウォッシュ会議のメイン会場は長崎市であったが、同市から約 70km 離れた佐世保市においてもサイドイベントとして「県民平和講演会　～核兵器のない世界をめざして～」を開催した。

同講演会では、はじめにパグウォッシュ会議世界大会長崎実行委員会委員長の調漸氏が、前日に発表されたばかりの「長崎宣言」の解説を中心に講演を行った。



引き続き、下村脩氏（長崎県名誉県民）が「米国ロス・アラモス国立研究所を訪ねて」と題し講演。当時住んでいた諫早市で目撃した原爆投下、被爆した友人との再会、原爆で校舎が破壊され諫早市に移転した旧制長崎医科大学附属薬学専門部への進学など、長崎県内での体験を紹介。その後、近年訪問されたロス・アラモス研究所の様子や研究者との交流について述べられ、160 名の聴衆が熱心に耳を傾けていた。

また、講演会に先立ち、下村氏は日中の忙しいスケジュールを縫って「下村脩ジュニア科学賞」受賞者との面談や、長崎県立佐世保南高等学校での「交流会」に参加。下村氏と交流した児童や生徒は、旧制県立佐世保中学校（現・佐世保南高校）で学ばれた郷土の先輩の話を直接聞くことができ、感動しきりだった。講演会及び一連の行事を通じ、パグウォッシュ会議が持つ大きな波及効果が感じられた。

講演者情報

サラ・H・アルファトラウィ　(Salah H. Al-Fatiawi)（イラク）

イラク高等教育省事務局長。

セルゲイ・バタサノフ　(Serguei Batsanov)（ロシア）

パグウォッシュ会議ジュネーブ事務局の長。パグウォッシュ会議評議員。パグウォッシュ生物化学兵器委員会委員、軍隊の民主的統制のためのジュネーブ・センター（DCAF）国際諮問委員等を務める。

ブルース・ブレア（Bruce Blair）（アメリカ）

プリンストン大学「科学とグローバル安全保障」プログラム研究員。国際的な核廃絶運動、グローバル・ゼロの共同創設者。米国務省国際安全保障諮問委員会委員を務める。

サンドラ・I・ブッチャー（Sandora Ionno Butcher）（アメリカ）

パグウォッシュ会議事務局長。「パグウォッシュの歴史」プロジェクト責任者。米国パグウォッシュ学生・若手グループ創設者。

フランチェスコ・カロジェロ（Francesco Calogero）（イタリア）

パグウォッシュ会議の前事務総長（1989-1997）。パグウォッシュ会議特別評議員。1995 年にパグウォッシュ会議を代表してノーベル平和賞の授賞式でメダルを受け取る。ローマ大学物理学名誉教授。

パオロ・コッタ=ラムジーノ（Paolo Cotta-Ramusino）（イタリア）

2002 年 8 月からパグウォッシュ会議事務総長。ミラノ大学数理物理学教授、イタリア国立核物理学研究所上級研究員。

ジャヤンタ・ダナパラ（Jayantha Dhanapala）（スリランカ）

2007 年より第 11 代パグウォッシュ会議会長。ストックホルム国際平和研究所（SIPRI）理事会議長等、他の様々な国際機関の諮問委員を務める。国連軍縮担当事務次長（1998-2003）、米国大使（1995-1997）、国連大使（1984-87）。

セルジオ・デ・キロス・デュアルテ　(Sergio de Queiroz Duarte)（ブラジル）

パグウォッシュ会議評議員。CTBT 賢人グループ（GEM）メンバー。元国連軍縮担当上級代表（2007 年 7 月～2012 年 2 月）。2005 年核兵器不拡散条約（NPT）運用検討会議議長、IAEA 理事会議長（1999 年～2000 年）等を務める。ブラジル大使として様々な国に駐在。

遠藤誠治（Seiji Endo）

成蹊大学法学部教授。元日本平和学会会長。専門は国際政治学。

ヤルガルサイハニー・エンクサイハン（Jargalsaikhany Enkhasaikhan）（モンゴル）
モンゴルの非核兵器地位の推進のためのNGO「ブルーバナー」を設立し、代表を務める。モンゴル民主政府初代大統領の安全保障補佐官（1993-96）を務め、安全保障・外交政策構築に当たり、国連大使としてモンゴルの非核兵器地位の確立に大きく貢献した。

アニタ・フリード（Anita Friedt）（アメリカ）
米国務省軍縮局首席国務次官補代理。同局に加わる以前は、2009年から2011年まで国家安全保障会議（NSC）で軍備管理・不拡散部長。

アニーサ・ハッスーナ（Anissa Hassouna）（エジプト）
パグウォッシュ会議評議員。エジプト外交委員会事務局長。マグディー・ヤークーブ財団事務局長。エジプト国際経済フォーラムゼネラル・マネージャー。エジプト外務省外交研究所およびエジプト中央銀行バンキング研究所講師。

カリム・カドリー　（Karim Kadry）（エジプト）
国際学生・ヤングパグウォッシュ会議前議長。エジプトパグウォッシュグループ理事。大手石油・ガス企業（カイロ）の技師、劇団代表。中東の平和と改革に関する多くのグループに所属。

アキルベク・カマルディノフ（Akylbek Kamaldinov）（カザフスタン）
駐日カザフスタン共和国大使。カザフスタン外務省アジア・中東・アフリカ局副局長、首相府対外経済部部長等を経て、2007年より現職。

片峰茂（Shigeru Katamine）
日本パグウォッシュ会議諮問評議会委員。長崎大学学長（2008 年～）。主な研究テーマは、ヒトレトロウィルス、プリオン感染性因子。

ハーリド・キドワイ（Khalid Kidwai）（パキスタン）
パキスタン国家指揮最高部顧問。戦略計画部門長を15年務めた。パキスタンの民間原子力エネルギー計画、および国家宇宙計画立案者。

黄川田仁志（Hitoshi Kikawada）
衆議院議員（2012年12月～）。外務大臣政務官（2015年10月～）。

河野洋平（Yohei Kono）
日本パグウォッシュ会議諮問評議会委員。元衆議院議長（2003年11月～2009年8月）。元副総理大臣。元外務大臣。元国務大臣内閣官房長官。

小沼通二（Michiji Konuma）
パグウォッシュ2015組織委員。元パグウォッシュ会議評議員。元日本パグウォッシュ会議代表。理論物理学者。慶應義塾大学名誉教授。世界平和アピール七人委員会委員。元日本学術会議原子核特別委員会委員長。元日本物理学会会長。

黒川清（Kiyoshi Kurokawa）

日本パグウォッシュ会議諮問評議会委員。政策研究大学院大学客員教授。東京大学名誉教授。内閣特別参与（2006～2008 年）や世界保健機関（WHO）コミッショナー（2005～2008 年）を務めた。

サイデ・ロトフィアン（Saideh Lotfian）（イラン）

パグウォッシュ評議会議長。テヘラン大学教授（政治学）。

益川敏英（Hidetoshi Maskawa）

日本パグウォッシュ会議諮問評議会委員。名古屋大学素粒子宇宙起源研究機構長・特別教授、京都大学名誉教授、京都産業大学益川塾教授・塾頭。2008 年ノーベル物理学賞受賞。

スティーヴ・ミラー（Steve Miller）（アメリカ）

パグウォッシュ会議執行委員会委員長。米パグウォッシュ委員会共同議長。ハーバード大学ケネディー行政大学院ベルファー・センターの国際安全保障プログラム統括責任者。

中村法道（Hodo Nakamura）

長崎県知事。

アレクサンダー・ニキティン（Alexander Nikitin）（ロシア）

パグウォッシュ会議評議員、ロシア・パグウォッシュ委員会副委員長。ロシア外務省モスクワ国立国際関係研究所欧州・大西洋安全保障センター所長。

アンナ・ペチェリ（Anna Peczeli）（ハンガリー）

国際学生・ヤングパグウォッシュ会議議長。公共サービス国立大学（NUPS）戦略、防衛研究センター（ハンガリー）研究員。研究テーマは核軍備管理、米国の外交・安全保障政策等。

ラマムルティ・ラジャラマン（Ramamurti Rajaraman）（インド）

パグウォッシュ評議会評議員。ジャワハルラール・ネルー大学名誉教授（物理学）。国際核分裂性物質パネル（IPFM）共同議長、インド科学アカデミー副会長を務める。

アブルアフラール・ラミズプール（Abul Ahrar Ramizpoor）（アフガニスタン）

国連アフガニスタン支援ミッション（UNAMA）人権委員。パグウォッシュ会議評議員。カーブル大学法学部講師を経て、アフガニスタン経済学・法学協会（AELSO）を設立。

アリー・アクバル・サーレヒー（Ali Akbar Salehi）（イラン）

イラン原子力機構（AEOI）機構長（2009～10 年、2013 年 8 月～）。外務大臣（2010～2013 年）。1998 年から 2003 年まで IAEA イラン代表。

リン・シュレーダー（Linh Schroeder）（スイス）

赤十字国際委員会（ICRC）駐日代表（2015 年 3 月～）。1997 年より ICRC 職員として世界各地で活動。

下村脩（Osamu Shimomura）

日本パグウォッシュ会議諮問評議会委員。ウッズホール海洋生物学研究所名誉教授。ボストン大学名誉教授。緑色蛍光タンパク質の発見により 2008 年にノーベル化学賞を受賞。

レオン・V ・シーガル（Leon V. Sigal）（アメリカ）

社会科学研究評議会で北東アジア協力的安全保障プロジェクト統括責任者を務める。1989 年から 1995 年まで『ニューヨーク・タイムズ』紙編集委員。米国務省に勤めた経歴を持つ。

ジェニファー・アレン・サイモンズ（Jennifer Allen Simons）（カナダ）

パグウォッシュ会議評議員、サイモンズ財団総裁。核軍縮問題の専門家として活動。

シャロン・スクアッソーニ（Sharon Squassoni）（アメリカ）

戦略国際問題研究センター（CSIS）不拡散プログラム統括責任者（2010 年～）。米国議会調査局（CRS）や米国務省、米軍備管理軍縮局（ACDA）に務めた経歴を持つ。

マーク・スー （Mark Suh）（韓国）

パグウォッシュ会議評議員。韓国パグウォッシュグループの長。コリアトラストファンド議長。政治学者。民主平和統一諮問委員、ベルリン自由大学主任研究員、韓国コーディネータを務めた。

鈴木達治郎（Tatsujiro Suzuki）

パグウォッシュ会議評議員。日本パグウォッシュ会議共同代表。長崎大学核兵器廃絶研究センター（RECNA）長。前内閣府原子力委員会委員長代理。元財団法人電力中央研究所社会経済研究所上席研究員。

田上富久（Tomihisa Taue）

長崎市長。

朝長万左男（Masao Tomonaga）

パグウォッシュ 2015 組織委員。長崎大学名誉教授。日本赤十字社長崎原爆病院名誉院長。恵の丘長崎原爆ホーム診療所長。

ミハイル・ウリヤーノフ （Mikhail Ulyanov） （ロシア）

ロシア外務省軍縮・軍備管理局長。軍事セキュリティと軍備管理に関するウィーン交渉ロシア連邦代表団団長、ロシア連邦とアメリカ合衆国との間の戦略攻撃能力削減に関する条約二国間協議の長を務めた。

梅林宏道（Hiromichi Umebayashi）

ピースデポ特別顧問。前長崎大学核兵器廃絶研究センター（RECNA）長。核軍縮・不拡散議員連盟（PNND）東アジア・コーディネーター、国際 NGO「中堅国家構想（MPI）」国際運営委員、「アボリション 2000」グローバル評議委員を務める。

フランク・フォン・ヒッペル（Frank von Hippel）（アメリカ）

理論物理学者。プリンストン大学公共・国際問題教授。30 年以上にわたり核政策問題について研究。国際核分裂性物質パネル（IPFM）共同議長を務める。

キム・ウォンス（Kim Won-soo）（韓国）

国連軍縮担当事務次長。事務総長特別補佐官、変革担当特別顧問、国連主要機関の長で構成される国連システム事務局長調整委員会（CEB）事務官等を経て 2015 年より現職。

山脇佳朗（Yoshiro Yamawaki）

長崎に投下された原爆で被爆。日本政府非核大使第一号として、世界各地で被爆体験の講演を行う。著書「あしあと」、長崎文献社　(2013/06)。

吉川弘之（Hiroyuki Yoshikawa）

日本パグウォッシュ会議諮問評議会議長。前国立研究開発法人科学技術振興機構研究開発戦略センターセンター長。元日本学術会議会長。元国際科学会議（ICSU）会長。

趙 通　（Tong Zhao）　（中国）

カーネギー・清華グローバル政策センター（北京）原子力政策プログラム研究員。元スタントン核セキュリティーフェロー。研究テーマは、核軍備管理、不拡散、ミサイル防衛、戦略的安定性、中国の安全保障と対外政策等。

レザー・ズィアラン（Reza Ziaran）（イラン）

パグウォッシュ会議評議員。包括的核実験禁止条約機構準備委員会（CTBTO PrepCom）書記。前駐オランダ大使。

組織委員会、実行委員会、募金委員会、諮問評議会の構成と記録

設置した委員会とその役割

日本パグウォッシュ会議では以下の委員会を設置し、パグウォッシュ 2015 の開催に向けた準備、企画、審議、募金活動を行った。これとは別に長崎実行委員会が設置され、長崎での募金活動、広報活動、写真展、ポストコンファレンス等、地域に密接した企画について議論された。

パグウォッシュ 2015 組織委員会：パグウォッシュ 2015 全体の企画、審議、決定を行う委員会として、企画全体の責任を負う。

パグウォッシュ 2015 実行委員会：組織委員会の指示のもと、パグウォッシュ 2015 の実施について責任を負う。

パグウォッシュ 2015 長崎実行委員会：パグウォッシュ 2015 の実施に向け、開催地長崎で必要な準備を行う。

パグウォッシュ 2015 準備委員会：第 61 回パグウォッシュ会議世界大会日本開催提案の準備を行い、開催体制を整える。

パグウォッシュ 2015 募金委員会：パグウォッシュ 2015 に必要な募金活動を全面的に支援し、かつ助言を行う。

日本パグウォッシュ会議諮問評議会：日本パグウォッシュ会議活動全体に対し、多方面から助言や提言を行う。パグウォッシュ 2015 終了後も継続する予定。

長崎宣言起草委員会：長崎宣言を起草する。

各委員会の記録

*記載されている日程は、各委員会の開催日

パグウォッシュ 2015 組織委員会

以下の日程で計 9 回の委員会を開催し、ロゴ、募金趣意書、予算案、大会テーマ日本案、大会プログラム日本案、大会パンフレット案、ポスター案、広報活動、日本から推薦する講演者、参加者について審議し、決定した。また、外部公認会計士の助言の下、募金活動の公正性、透明性について監査した。

2014 年：　6 月 28 日、10 月 10 日

2015 年：　1 月 23 日、3 月 9 日、6 月 19 日、7 月 30 日、9 月 13 日、10 月 16 日

2016 年：　2 月 5 日

パグウォッシュ 2015 実行委員会

以下の日程で 2014 年 13 回、2015 年 15 回、2016 年 1 回の計 29 回の委員会を開催し、ロゴ案、募金趣意書案、予算案、大会テーマ日本案、大会プログラム日本案、大会パンフレ

ット案、ポスター案、大会 Facebook ページ、ウェッブページ、缶バッチ等を作成、各種委員会、記者会見の準備、募金趣意書の送付、企業訪問等の募金活動、用意したパンフレット、ポスターを用いた広報活動等を行った。また、大会開催時の準備、レジストレーション、各種案内、プレス対応等を行った。

2014 年： 5 月 31 日、6 月 22 日、6 月 28 日、7 月 12 日、7 月 25 日、8 月 5 日、8 月 25 日、9 月 6 日、9 月 28 日、10 月 18 日、11 月 16 日、11 月 24 日、12 月 27 日

2015 年： 1 月 23 日、2 月 14 日、2 月 22 日、3 月 20 日、4 月 6 日、4 月 19 日、5 月 17 日、5 月 30 日、6 月 19 日、7 月 7 日、8 月 22 日、9 月 13 日、10 月 9 日、10 月 16 日、11 月 23 日

2016 年： 1 月 24 日

パグウォッシュ 2015 長崎実行委員会

以下の日程で計 6 回の委員会を開催し、長崎周辺での募金活動、広報活動を実施した。また、大会プログラム日本案について検討し、来訪者の送迎、会場間の移動、会場設営、受付け準備等を担当した。

2015 年： 1 月 9 日、2 月 12 日、4 月 24 日、6 月 11 日、9 月 3 日、10 月 13 日

パグウォッシュ 2015 準備委員会

以下の日程で計 7 回の委員会を開催し、第 61 回パグウォッシュ会議世界大会日本開催のための体制を整え、またパグウォッシュ評議会で提案するための準備を行った。実行委員会立ち上げに伴い、準備委員会はその任を終えた。

2013 年： 10 月 19 日、12 月 7 日

2014 年： 2 月 2 日、3 月 2 日、4 月 6 日、4 月 25 日、5 月 17 日

パグウォッシュ 2015 募金委員会

募金活動開始に先駆けて以下の日程で計 2 回の開催し、寄附企業候補リストの検討、従来の寄附とは異なる形での協賛もその受入れを検討すること等を決定した。

2014 年： 7 月 7 日、10 月 10 日

日本パグウォッシュ会議諮問評議会

以下の日程で計 5 回の委員会を開催し、パグウォッシュ 2015 開催に関する組織委員会での主要な審議、決定事項、その他日本パグウォッシュ会議の活動について、幅広い視野で助言、提言、支援を行った。

2014 年： 7 月 7 日

2015 年： 3 月 9 日、6 月 19 日、10 月 16 日

2016 年： 2 月 5 日

長崎宣言起草委員会

以下の日程で計 2 回の委員会を開催し、長崎宣言を起草した。

2015 年： 6 月 14 日、7 月 24～25 日

記者会見

以下の日程で計 6 回の記者会見を行い、パグウォッシュ会議開催について広報した。

2014 年： 7 月 8 日（東京）、7 月 9 日（長崎）

2015 年： 3 月 23 日（東京）、9 月 17 日（長崎）、10 月 16 日（東京）、10 月 20 日（長崎）

記者懇談会

以下の日程で記者懇談会を開催した。

2015 年： 12 月 19 日（長崎）、12 月 25 日（東京）

各委員会のメンバー構成

（役職はパグウォッシュ 2015 開催時）

パグウォッシュ 2015 組織委員会

委員長	鈴木　達治郎	長崎大学核兵器廃絶研究センターセンター長、パグウォッシュ会議評議員
副委員長	栗田　禎子	千葉大学教授、パグウォッシュ会議評議員
（長崎担当）	調　　漸	長崎大学副学長、核兵器廃絶長崎連絡協議会会長
	高原　孝生	明治学院大学教授、国際平和研究所所長
委員	板垣　雄三	東京大学名誉教授、東京経済大学名誉教授
	稲垣　知宏	広島大学教授
	梅林　宏道	長崎大学核兵器廃絶研究センター前センター長
	小沼　通二	神奈川歯科大学理事、元パグウォッシュ会議評議員
	朝長　万左男	長崎大学名誉教授
監事	池上　雅子	東京工業大学大学院教授
	大西　仁	東北大学名誉教授、元パグウォッシュ会議評議員
委員長補佐	太田　昌克	日本軍縮学会企画・運営委員
	吉田　文彦	国際基督教大学客員教授

パグウォッシュ 2015 実行委員会

委員長	稲垣　知宏	広島大学教授
委員長代理	栗田　禎子	千葉大学教授、パグウォッシュ会議評議員
	高原　孝生	明治学院大学教授、元パグウォッシュ会議評議員

委員	榎本　浩司	一橋大学大学院博士課程
	勝田　忠広	明治大学准教授
	黒崎　輝	福島大学准教授
	調　　漸	長崎大学副学長
	鈴木　達治郎	長崎大学教授、パグウォッシュ会議評議員
	向　　和歌奈	東京大学政策ビジョン研究センター特任助教

パグウォッシュ 2015 長崎実行委員会

委 員 長	調　　漸	長崎大学学長特別補佐（副学長）
副委員長	鈴木　達治郎	長崎大学核兵器廃絶研究センター長
委員	松川　久和	長崎県文化観光国際部長
	大安　哲也	長崎県文化観光国際部国際課企画監
	中村　明俊	長崎原爆資料館長
	大久保 一哉	長崎市市民局原爆被爆対策部平和推進課長
	上野　恒信	長崎大学学術情報部長
	横山　義則	長崎大学学術情報部学術情報管理課長
	智多　正信	国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館長
	多以良 光善	公益財団法人長崎平和推進協議会事務局長

パグウォッシュ 2015 事務局

事務局長	小林　陽子
スタッフ	杉山　真弓
	榎本　浩司
メディアアドバイザー	平田　知義

パグウォッシュ 2015 募金委員会

委員長	吉川　弘之	科学技術振興機構特別顧問、 元国際科学会議（ICSU）会長
委員	片峰　茂	長崎大学学長
	栗田　禎子	千葉大学教授、パグウォッシュ会議評議員
	黒川　清	政策研究大学院大学アカデミックフェロー、 日本学術会議前議長
	河野　洋平	元衆議院議長
	下村　脩	2008 年ノーベル化学賞
	調　　漸	長崎大学副学長、核廃絶長崎連絡協議会会長
	鈴木　達治郎	長崎大学教授、パグウォッシュ会議評議員

	高原　孝生	明治学院大学教授、元パグウォッシュ会議評議員
	坂東　昌子	愛知大学名誉教授
	平松　恵一	IPPNW 日本代表
	益川　敏英	名古屋大学素粒子宇宙起源研究機構機構長、2008 年ノーベル物理学賞

日本パグウォッシュ会議諮問評議会

議長	吉川　弘之	科学技術振興機構特別顧問
委員	片岡　勝子	広島大学名誉教授
	片峰　茂	長崎大学学長
	黒川　清	政策研究大学院大学アカデミックフェロー
	黒澤　満	大阪女学院大学教授、大阪大学名誉教授
	河野　洋平	元衆議院議長
	沢田　昭二	名古屋大学名誉教授
	下村　脩	2008 年ノーベル化学賞
	坂東　昌子	愛知大学名誉教授
	平松　恵一	IPPNW 日本代表
	広渡　清吾	専修大学法学部教授、日本学術会議元会長
	藤垣　裕子	東京大学大学院教授
	益川　敏英	2008 年ノーベル物理学賞
	山崎　正勝	東京工業大学名誉教授

長崎宣言起草委員会

委員	板垣　雄三	東京大学名誉教授、東京経済大学名誉教授
	梅林　宏道	長崎大学核兵器廃絶研究センター前センター長
	榎本　浩司	一橋大学大学院博士課程
	栗田　禎子	千葉大学教授、パグウォッシュ会議評議員
	小沼　通二	神奈川歯科大学理事、元パグウォッシュ会議評議員
	鈴木　達治郎	長崎大学教授、パグウォッシュ会議評議員
	高原　孝生	明治学院大学教授、元パグウォッシュ会議評議員

その他関連行事

日本パグウォッシュ会議有志勉強会

第 1 回、明治学院大学、2014 年 11 月 16 日（日）
報告者：小沼通二、沢田昭二、広渡清吾

第 2 回、明治学院大学、2014 年 11 月 24 日（月）
報告者：小沼通二、鈴木達治郎、坂東昌子、沢田昭二、近藤弘樹、黒崎輝、池上雅子

第 3 回、明治学院大学、2014 年 12 月 27 日（土）
報告者：川崎哲、小沼通二、沢田昭二、高原孝生、大西仁、板垣雄三

第 4 回、明治学院大学、2015 年 7 月 30 日（木）
報告者：太田昌克、ダグラス・ラミス

日本物理学会

物理学会京都支部講演会、京都市、2015 年 2 月 15 日（日）
「パグウォッシュ会議の歴史と現代の課題」
報告者：鈴木達治郎、稲垣知宏

日本物理学会第 70 回年次大会、早稲田大学 早稲田キャンパス、2015 年 3 月 21 日（土）
物理と社会シンポジウム「パグウォッシュ会議 2015 年長崎開催に向けて-核の被害のない世界と科学者の社会的責任-」
趣旨説明：稲垣知宏（広島大学）
報告者：鈴木達治郎（長崎大学）
「福島原発事故の教訓と科学者の社会的責任:2015 年パグウォッシュ会議に向けて」
報告者：坂東昌子（NPO 法人あいんしゅたいん）
「パグウォッシュと湯川精神・・科学者の責任再考」
報告者：川野徳幸（広島大学）
「核の脅威:原爆被爆被害を通して」
報告者：吉野太郎（関西学院大学）
「物理学者の社会的責任シンポジウムからパグウォッシュ会議に向けて」

日本平和学会

日本平和学会春季研究大会、広島市、アステールプラザ、2015 年 7 月 8 日（土）

「軍縮・安全保障」分科会

報告者：池上雅子（東京工業大学）

「北東アジア平和への課題：核帝国主義の超克」

討論者：高原孝生（明治学院大学）

司会：黒崎輝（福島大学）

長崎県宗教者懇話会、世界宗教者平和会議日本委員会（WCRP）

公開シンポジウム「核廃絶に向けた科学者と宗教者の対話集会　―パグウォッシュ世界大会を受けて―」

長崎市、長崎カトリックセンター

2015 年 11 月 6 日（金）

参加者：120 人

パグウォッシュ会議からの参加：ゲーツ・ノイネック（パグウォッシュ会議評議員）、カレン・ホールバーグ（パグウォッシュ会議評議員）、レベッカ・ジョンソン、高原孝生

伊王島から見た長崎港

報道リスト

報道数の情報

報道機関登録数　20 社

パグウォッシュ会議前（-10 月 31 日）までの報道数　82 件

パグウォッシュ会議開催以降（11 月 1 日-12 月 20 日）の報道数　　234 件

報道リスト

2014 年 7 月 8 日	核廃絶会議、長崎で初開催　来年、パグウォッシュ世界大会 朝日新聞 夕刊 9 ページ 566 文字
	パグウォッシュ会議：長崎で核廃絶国際会議　被爆７０年の来年、科学者ら参加 毎日新聞 夕刊 11 ページ 427 文字
7 月 9 日	長崎「パグウォッシュ会議」　来年 11 月 1 日～5 日開催 長崎新聞 24 ページ
	パグウォッシュ会議　長崎で来年１１月開催　日本では１０年ぶり 読売新聞 2 ページ 383 文字
	長崎でパグウォッシュ会議　来年　核廃絶へ科学者集結 西日本新聞 33 ページ
	来年１１月に長崎でパグウォッシュ会議　核なき世界へ 中国新聞 3 ページ
9 月 11 日	来年・長崎パグウォッシュ世界大会　組織委　市長に協力要請 長崎新聞 20 ページ
9 月 18 日	世界の目をナガサキに、核軍縮へ若者が圧力を　パグウォッシュ会議会長が語る／長崎県 朝日新聞 35 ページ 1133 文字
9 月 27 日	被爆地の声すくい政策提言 西日本新聞 30 ページ
2015 年 4 月 4 日	11 月パグウォッシュ会議に向け　事務総長視察で来崎 長崎新聞 21 ページ
	パグウォッシュ会議：事務総長、世界大会への協力要請　長崎大を訪問　／長崎 毎日新聞 21 ページ 362 文字
4 月 10 日	核軍縮テーマに講演　パグウォッシュの事務総長

	読売新聞 29 ページ
4 月 11 日	「核の傘」強調は危険　広島、長崎にノーベル賞を 長崎新聞 22 ページ
9 月 18 日	パグウォッシュ長崎大会で下村脩氏講演 西日本新聞 35 ページ
	パグウォッシュ会議　米ロの国務次官級招聘　ノーベル受賞者講演も 長崎新聞 29 ページ
10 月 1 日	核廃絶へ科学者集合　来月 1 日長崎で世界大会開幕 日本海新聞 26 ページ
10 月 4 日	論説／パグウォッシュ会議／核の脅威、科学者が討議 長崎新聞　6 ページ　1070 文字
10 月 8 日	終戦前後　湯川秀樹の書簡　詳細判明　戦争「心が悲しくなる」　吉井勇宛て　短歌も添える 東京新聞夕刊　8 ページ　1555 文字
10 月 9 日	ナガサキの視点／来月長崎でパグウォッシュ会議世界大会開催／報道部・原口司／核使用の危険　今も／国際的な軍縮の進展を 長崎新聞　15 ページ　3079 文字
10 月 10 日	湯川秀樹の吉井勇宛て書簡　平和運動の原点示す 信濃毎日新聞夕刊　2 ページ　538 文字
10 月 16 日	［座標軸］科学と軍事　過ちは繰り返されないか 新潟日報　朝刊　4 ページ　643 文字
10 月 17 日	パグウォッシュ会議：核の平和利用議論へ　長崎で来月 毎日新聞　朝刊　27 ページ　441 文字
	パグウォッシュ会議：「平和利用のリスク」テーマに　長崎で初開催 毎日新聞　西部朝刊　25 ページ　452 文字
	◆米ロ軍縮担当が公開討論へ 秋田魁新報　朝刊　21 ページ　214 文字
	◇ニュータンの質問箱ニュースが分かる山日ＮＩＥプロジェクト　科学者らの組織長崎で世界大会　目的は？　核と戦争の廃絶へ議論 山梨日日新聞　2 ページ　875 文字
	世界 24 時=来月の長崎パグウォッシュ会議　米ロの担当者、核廃絶討論へ 信濃毎日新聞朝刊　5 ページ　189 文字
	40 ヵ国 190 人が参加　長崎で来月「パグウォッシュ会議」 中国新聞朝刊　3 ページ　665 文字

	長崎県／ピースカレンダー=核兵器廃絶市民講座　きょう平和祈念館　ほか／平和を　ナガサキ 西日本新聞朝刊　24 ページ　285 文字
	米ロ軍縮担当が 11 月に公開討論　パグウォッシュ会議 西日本新聞朝刊　29 ページ　234 文字
	来月のパグウォッシュ会議　長崎／米ロ軍縮担当官が論議／イラン副大統領も出席へ 長崎新聞　24 ページ　763 文字
10 月 18 日	パグウォッシュ会議の意義解説　元評議員が講演　被爆者や学生参加=長崎 西部読売新聞　朝刊　31 ページ　408 文字
	核廃絶で小沼氏講演／慶応大名誉教授　パグウォッシュ会議前に／長崎 長崎新聞　22 ページ　603 文字
	ノーベル賞と日本の科学　湯川氏が切り開いた歴史－編集委員　吉川和輝 日本経済新聞電子版ニュース　2362 文字
10 月 19 日	11 月に長崎開催の「パグウォッシュ会議」、プログラム固まる 原子力産業新聞　　602 文字
10 月 21 日	イラン原子力庁長官、核廃絶を語る会議へ　長崎で来月開催　【西部】 朝日新聞　朝刊　35 ページ　407 文字
	核廃絶「夢ではない」　パグウォッシュ会議、長崎で来月　／長崎県 朝日新聞　朝刊　35 ページ　1021 文字
	ノーベル平和賞　被爆地に寄託　パグウォッシュ会議　長崎市へ実物賞状 西部読売新聞　朝刊　35 ページ　403 文字
	長崎を最後の被爆地に／来月　パグウォッシュ会議／組織委員長「宣言で強調する」 長崎新聞　24 ページ　543 文字
10 月 25 日	パグウォッシュ会議長崎：最後の被爆地に　科学者の力で全ての核の廃絶を　11 月 1～5 日、メイン会場・伊王島 毎日新聞　大阪朝刊　12 ページ　3461 文字
	パグウォッシュ会議：「国の対立を超えた議論を」　英語で被爆体験語る、山脇佳朗さん　長崎市で来月 1～5 日 毎日新聞　西部朝刊　26 ページ　747 文字
	核廃絶　科学者の議論期待　パグウォッシュ会議　来月 1 日開幕=長崎 西部読売新聞　朝刊　32 ページ　2080 文字

	パグウォッシュ世界大会　2015 ナガサキ／30、31 日にヤング会議／実行委の榎本浩司さん　一橋大大学院法学研究科／若手研究者の裾野拡大を／20 カ国 40 人、核問題議論 長崎新聞　1 ページ　1207 文字
	ノーベル賞受賞者・助言委員　益川敏英さん（75）／「核への意識　高めたい」／来月、パグウォッシュ会議　長崎 長崎新聞　24 ページ　889 文字
10 月 26 日	社説　核と人類　パグウォッシュ会議を前に　世界を動かした死の灰 東京新聞朝刊　5 ページ　856 文字
	斜面=物理学者の益川敏英さんは反骨の学者として知られて… 信濃毎日新聞朝刊　1 ページ　559 文字
	社説　核と人類　パグウォッシュ会議を前に　世界を動かした死の灰 中日新聞朝刊　5 ページ　856 文字
10 月 27 日	「福島」の教訓、世界にどう発信　来月のパグウォッシュ会議、専門家に聞く　／長崎県 朝日新聞　朝刊　33 ページ　1314 文字
	社説　核と人類　パグウォッシュ会議を前に　いちばん若い被爆者が 東京新聞朝刊　5 ページ　776 文字
	社説　核と人類　パグウォッシュ会議を前に　いちばん若い被爆者が 中日新聞朝刊　7 ページ　776 文字
10 月 28 日	「科学者の平和活動知って」　湯川博士夫妻が収集、絵はがき 2500 枚を展示／長崎県 朝日新聞　朝刊　31 ページ　475 文字
	「議論活発に」長崎市長期待　来月、パグウォッシュ会議=長崎 西部読売新聞　朝刊　30 ページ　350 文字
	長崎パグウォッシュ会議来月 1 日開幕　60 年前のラッセル宣言　紛争の解決、平和的手段を勧告 信濃毎日新聞夕刊　3 ページ　1099 文字
	長崎パグウォッシュ会議、来月 1 日開幕　被爆地からメッセージ発信　益川氏「市民が問題意識を」 信濃毎日新聞夕刊　3 ページ　911 文字
	社説　核と人類　パグウォッシュ会議を前に　戦争ができてはイケン 中日新聞朝刊　5 ページ　763 文字

	パグウォッシュ世界大会　2015 ナガサキ／会議発足メンバー　故湯川秀樹さん　平和希求の足跡／妻と収集　絵はがき 2600 点／来月 15 日まで展示　ナガサキピースミュージアム 長崎新聞　16 ページ　617 文字
10 月 29 日	湯川博士収集　絵はがき展　パグウォッシュ会議に合わせ=長崎 西部読売新聞　朝刊　32 ページ　649 文字
	社説　核と人類　パグウォッシュ会議を前に　抑止より脅威を語ろう 中日新聞朝刊　5 ページ　924 文字
	核被害発表　物理学者の足跡に光 中国新聞ニュース　　1131 文字
10 月 30 日	社説　核と人類　パグウォッシュ会議を前に　政治を動かすのは市民 東京新聞朝刊　5 ページ　926 文字
	社説　核と人類　パグウォッシュ会議を前に　政治を動かすのは市民 中日新聞朝刊　7 ページ　924 文字
	パグウォッシュ世界大会　2015 ナガサキ／核廃絶で「対話」／宗教者と科学者　6 日集会 長崎新聞　24 ページ　528 文字
	核なき世界向け　外相が協力確認／ダナパラ会長と会談 長崎新聞　24 ページ　211 文字
	パグウォッシュ会議のダナパラ会長が岸田外相表敬　来週長崎で世界大会 原子力産業新聞　　894 文字
	＜パグウォッシュ会議＞1 日～長崎で　被爆地発メッセージは 毎日新聞速報ニュース　　604 文字
	パグウォッシュ会議って？の巻 毎日新聞　毎日まんがニュース
10 月 31 日	（いちからわかる！）パグウォッシュ会議って何じゃ？ 朝日新聞　朝刊　2 ページ　1144 文字
	核へ警鐘、日本人科学者尽力　パグウォッシュ会議、あす長崎で開幕　【西部】 朝日新聞　朝刊　37 ページ　1331 文字
	原子力リスク、福島の教訓　あすから長崎でパグウォッシュ会議　／広島県 朝日新聞　朝刊　27 ページ　1300 文字
	20 カ国の若手研究者、核軍縮など議論開始　ヤングパグウォッシュ会議／長崎県

	朝日新聞　朝刊　31 ページ　306 文字
	パグウォッシュ会議：「被爆者に希望を」　あす開幕　長崎 毎日新聞　西部朝刊　26 ページ　644 文字
	企画展：パグウォッシュ会議、発足に関わり　湯川博士と妻、平和の道　収集した絵はがき展示　長崎　／長崎 毎日新聞　地方版　21 ページ　585 文字
	若手科学者　核廃絶目指し討議　長崎　ヤングパグウォッシュ会議開幕=長崎 西部読売新聞　朝刊　35 ページ　471 文字
	パグウォッシュ会議、あす長崎で開幕 中国新聞朝刊　1 ページ　497 文字
	パグウォッシュ会議の被爆地開催の意義は　小沼通二・慶応大名誉教授に聞く　被害直視　核廃絶を後押し 中国新聞朝刊　5 ページ　2057 文字
	パグウォッシュ会議あす開幕　核廃絶　長崎から知恵　科学者ら討議 西日本新聞朝刊　1 ページ　700 文字
	ポンきちの教えて！=パグウォッシュ会議　科学者集い、核廃絶を討議 西日本新聞朝刊　3 ページ　882 文字
	世界の若手研究者　本会議を前に討論　長崎市で開幕　パグウォッシュ会議 西日本新聞朝刊　3 ページ　328 文字
	長崎県／ピースカレンダー=湯川夫妻絵はがき展　ピースミュージアム　ほか／平和を　ナガサキ 西日本新聞朝刊　30 ページ　293 文字
	パグウォッシュ世界大会　2015 ナガサキ／あす開幕／科学者続々長崎入り／ヤング会議は議論開始 長崎新聞　1 ページ　595 文字
	記者の目／原口司（報道部）／世界の核　実情知る機会に 長崎新聞　22 ページ　481 文字
	パグウォッシュ世界大会　2015 ナガサキ／「核兵器廃絶へ決意新た」／科学者ら原爆写真見入る／会場近くで展示 長崎新聞　23 ページ　558 文字
	パグウォッシュ会議 1 日開幕 中国新聞ニュース　　474 文字
11 月 1 日	パグウォッシュ会議、きょうから、核廃絶へ若手が議論、長崎、開幕控え軍

	縮テーマに。 日本経済新聞　西部朝刊　17 ページ　490 文字
	ヤングパグウォッシュ会議：「核軍縮のために何ができるか」　海外若手研究者、全国から集う若者交流　／長崎 毎日新聞　23 ページ　694 文字
	科学者と平和語り交流　ヤングパグウォッシュ会議　高校生ら=長崎 西部読売新聞　朝刊　29 ページ　435 文字
	核廃絶　科学者ら討議　パグウォッシュ会議　きょうから長崎で世界大会 西部読売新聞　朝刊　32 ページ　1535 文字
	〈解〉パグウォッシュ会議 西部読売新聞　朝刊　32 ページ　159 文字
	被爆地長崎で核廃絶議論―パグウォッシュ会議開幕 共同通信ニュース　602 文字
	パグウォッシュ会議開幕=科学者ら、核兵器廃絶目指し―長崎 時事通信ニュース　　444 文字
	被爆 70 年　長崎で「パグウォッシュ会議」始まる　核兵器廃絶を討議 ＮＨＫニュース　　625 文字
	長崎・パグウォッシュ会議　参加者が被爆遺構見学「残虐さの記憶の象徴」 ＮＨＫニュース　　576 文字
	長崎・パグウォッシュ会議　参加の科学者が被爆者と対話“核廃絶の道を” ＮＨＫニュース　　533 文字
	長崎・パグウォッシュ会議　米ロの政府高官に“核軍縮”の姿勢ただす質問 ＮＨＫニュース　　521 文字
	「パグウォッシュ会議」　1957 年初開催　科学者の立場で核と平和論議 ＮＨＫニュース　　456 文字
	河北春秋／約 60 年前、第 1 回会議が開かれたのは、／約 60 年前、第 1 回会議が開かれたのは、地図にも載らないような小さな漁村だった。カナダ東海岸のパグウォッシュに集まったのは、核開発競争に危機感を抱く各国 河北新報朝刊　1 ページ　561 文字
	核廃絶テーマに若者ら議論　「パグウォッシュ」前に 中国新聞朝刊　26 ページ　471 文字
	被爆地・長崎から変える　パグウォッシュ会議の意義　元評議員　小沼通二氏に聞く 西日本新聞朝刊　26 ページ　810 文字

	パグウォッシュ世界大会　2015 ナガサキ／「大統領訪問働き掛ける」／米国務省軍縮局　フリード氏来崎 長崎新聞　1 ページ　620 文字
	水や空／長崎でパグウォッシュ会議 長崎新聞　1 ページ　530 文字
	パグウォッシュ世界大会　2015 ナガサキ／3 日のレセプション　茶道「鎮信流」が呈茶／インタビュー　宗家・松浦宏月さん／「和敬清寂」の心伝えたい 長崎新聞　2 ページ　983 文字
	パグウォッシュ世界大会　2015 ナガサキ／核軍縮「教育や対話重要」／海外の若手科学者と学生ら／意見交換　思い共有 長崎新聞　24 ページ　627 文字
	被爆地長崎で核廃絶議論　パグウォッシュ会議が開幕 日本経済新聞電子版ニュース
11 月 2 日	核廃絶の議論、長崎で、パグウォッシュ会議開幕。 日本経済新聞　朝刊　38 ページ
	「科学者は歴史を学んで」、「パグウォッシュ会議」会場、長崎の被爆者、写真展。 日本経済新聞　西部夕刊　20 ページ　529 文字
	（核といのちを考える）核廃絶、長崎で初議論　抑止論に異議も　パグウォッシュ会議【大阪】 朝日新聞　朝刊　3 ページ　1317 文字
	（核といのちを考える）核廃絶、世界の科学者ら議論　パグウォッシュ会議、長崎初開催 朝日新聞　朝刊　3 ページ　718 文字
	非核、科学者に託す　パグウォッシュ会議　長崎で被爆、山脇さん傍聴【西部】 朝日新聞　朝刊　30 ページ　778 文字
	科学者ら核廃絶の思い新たに　パグウォッシュ会議、開幕　／長崎県 朝日新聞　朝刊　27 ページ　1435 文字
	パグウォッシュ会議：被爆 70 年、核廃絶訴える　長崎で開幕 毎日新聞　朝刊　26 ページ　469 文字
	パグウォッシュ会議：世界大会開幕 毎日新聞　中部朝刊　22 ページ　184 文字

	パグウォッシュ会議：核なき世界めざし　長崎で開幕 毎日新聞　西部朝刊　24 ページ　616 文字
	パグウォッシュ会議：開幕　被爆者・山脇佳朗さんが講話　会場総立ちの拍手　「平和賞」レプリカなども寄託　／長崎 毎日新聞　23 ページ　624 文字
	科学者ら被爆体験聞く　パグウォッシュ会議開幕=長崎 西部読売新聞　朝刊　23 ページ　556 文字
	パグウォッシュ会議開幕　長崎で初　核兵器廃絶へ議論 西部読売新聞　朝刊　26 ページ　482 文字
	長崎「パグウォッシュ会議」　インド・パキスタンの核巡り意見相次ぐ ＮＨＫニュース　　602 文字
	核抑止論に批判続出＊長崎でパグウォッシュ会議 北海道新聞朝刊全道（総合）　4 ページ　551 文字
	米ロの核抑止論に批判　長崎　科学者ら、廃絶へ国際会議 東奥日報　朝刊　17 ページ　664 文字
	長崎で核廃絶議論　科学者「パグウォッシュ会議」開幕　米ロの抑止論に批判 岩手日報　朝刊　24 ページ　772 文字
	「パグウォッシュ会議」開幕　米国・ロシアの核抑止論に批判　被爆地長崎で廃絶議論 秋田魁新報　朝刊　22 ページ　1241 文字
	米ロ核抑止論科学者ら批判／長崎でパグウォッシュ開幕 下野新聞　4 ページ　525 文字
	パグウォッシュ会議　長崎で開幕　米ロ核抑止論　科学者ら批判 東京新聞　朝刊　1 ページ　770 文字
	「長崎　最後の被爆地に」　81 歳語り部　英語で世界へ　パグウォッシュ会議 東京新聞　朝刊　25 ページ　1199 文字
	核廃絶へ抑止論批判／長崎　70 年目被爆地で世界会議＜面名=社会＞ 神奈川新聞　20 ページ　740 文字
	パグウォッシュ会議が長崎で開幕　核廃絶を議論　米ロの抑止論に批判の声 信濃毎日新聞　朝刊　2 ページ　674 文字
	長崎パグウォッシュ会議　核廃絶へ科学者の力を　81 歳被爆者「最後の被爆地に」　英語学び訴え

	信濃毎日新聞　朝刊　26 ページ　963 文字
	長崎で開幕、核廃絶議論　米ロの抑止論に批判－パグウォッシュ会議 静岡新聞　朝刊　2 ページ　621 文字
	長崎でパグウォッシュ会議開幕　米ロの「核抑止論」に批判 中日新聞　朝刊　2 ページ　1827 文字
	科学者ら核廃絶議論　パグウォッシュ会議　長崎で初開催 京都新聞　朝刊　23 ページ　672 文字
	パグウォッシュ会議が開幕　被爆 70 年　長崎で核廃絶議論 中国新聞　朝刊　1 ページ　742 文字
	ナガサキの惨状追体験　パグウォッシュ会議 中国新聞　朝刊　25 ページ　662 文字
	核廃絶へ長崎で議論　米ロの抑止論に批判続出　パグウォッシュ会議開幕 四国新聞　朝刊　3 ページ　664 文字
	米ロの核抑止論に批判続出　長崎・パグウォッシュ会議開幕　40 ヵ国から 200 人集結 愛媛新聞　3 ページ　601 文字
	長崎でパグウォッシュ会議開幕　科学者ら被爆体験聴く 西日本新聞　朝刊　2 ページ　552 文字
	長崎県／長崎　被爆の爪痕　科学者触れる　体験談に耳傾け　城山小校舎訪問　パグウォッシュ会議開幕／長崎ワイド 西日本新聞　朝刊　22 ページ　874 文字
	パグウォッシュ会議　科学者ら厳しく批判　核削減強調の米ロ高官に 西日本新聞　朝刊　24 ページ　571 文字
	核廃絶へ長崎で議論　パグウォッシュ会議開幕 佐賀新聞　24 ページ　551 文字
	パグウォッシュ会議／被爆地長崎で開幕／核廃絶へ科学者集結 長崎新聞　1 ページ　1057 文字
	論説／パグウォッシュ会議／非核の科学者を歓迎する 長崎新聞　6 ページ　1067 文字
	パグウォッシュ世界大会　2015 ナガサキ／米ロ高官　核抑止正当化／科学者、被爆者ら反発 長崎新聞　22 ページ　897 文字
	パグウォッシュ世界大会　2015 ナガサキ／ノーベル賞複製メダル寄託／「被爆者の勇気に敬意」科学者ら

	長崎新聞　22 ページ　734 文字
	パグウォッシュ世界大会　2015 ナガサキ／核廃絶議論後押し　長崎ゆかりの専門家 長崎新聞　22 ページ　619 文字
	◎長崎で核廃絶議論　パグウォッシュ会議開幕　科学者ら被爆者と対話　ズーム 熊本日日新聞　朝刊　2 ページ　733 文字
	長崎で核廃絶科学者ら議論／世界大会開幕 宮崎日日新聞　朝刊　2 ページ　597 文字
	米ロの核抑止論に批判／パグウォッシュ会議　長崎で大会開幕 琉球新報　朝刊　5 ページ　1397 文字
	パグウォッシュ会議／「長崎、最後の被爆地に」／81 歳語り部、英語で訴え 琉球新報　朝刊　5 ページ　878 文字
	長崎で非核会議　核抑止論を批判／パグウォッシュ会議 沖縄タイムス　朝刊　7 ページ　348 文字
	Nagasaki plays host to Pugwash Conf The Japan Times　2 ページ
11 月 3 日	米高官「心動かされた」　パグウォッシュ会議会場で原爆写真展　／長崎県 朝日新聞　朝刊　29 ページ　885 文字
	下村脩さん：原爆体験、核廃絶願う　長崎・パグウォッシュ会議に出席　08 年ノーベル化学賞 毎日新聞　朝刊　26 ページ　943 文字
	下村脩さん：「リスク排除、科学者の役目」　核廃絶「パグウォッシュ会議」出席 毎日新聞　北海道朝刊　28 ページ　821 文字
	科学者らが核兵器廃絶議論 東京読売新聞　朝刊　33 ページ　266 文字
	核兵器の非人道性　理解深まる　パグウォッシュ会議　鈴木委員長=長崎 西部読売新聞　朝刊　25 ページ　750 文字
	下村氏「原爆で人生観変わった」―パグウォッシュ会議で講演 共同通信ニュース　607 文字
	日本の原子力政策を批判―パグウォッシュ会議 共同通信ニュース　511 文字

	長崎・パグウォッシュ会議　ノーベル化学賞の下村脩さん　原爆体験を語る【ノーベル賞】 ＮＨＫニュース　627 文字
	長崎・パグウォッシュ会議　下村脩さん　「とにかく戦争起きないように」【ノーベル賞】 ＮＨＫニュース　594 文字
	長崎・パグウォッシュ会議　日本の専門家　核排除へ日本が周辺国と連携を ＮＨＫニュース　487 文字
	イラン、核合意履行着手　副大統領「分離機の削減準備」 東奥日報　朝刊　6 ページ　663 文字
	パグウォッシュ会議に合わせ長崎集結　「日本の加害にも目を」　学生ら、核・平和題材に発表 秋田魁新報　朝刊　24 ページ　440 文字
	「加害の歴史も」　交流学生ら決意　パグウォッシュ会議 東京新聞　朝刊　28 ページ　290 文字
	時の顔=小沼通二さん　「パグウォッシュ会議」に 60 年近く関わり活動 信濃毎日新聞　朝刊　2 ページ　645 文字
	長崎パグウォッシュ会議　南アジアの核問題を討議　パキスタンのキ元中将、保持を正当化 信濃毎日新聞　朝刊　2 ページ　400 文字
	長崎パグウォッシュ会議に合わせ　平和への決意、大学生ら発表 信濃毎日新聞　朝刊　2 ページ　328 文字
	パキスタンも核戦力正当化　パグウォッシュ会議 中日新聞　朝刊　7 ページ　400 文字
	時のひと　「パグウォッシュ会議」に 60 年近く関わり活動する　小沼通二（こぬま・みちじ）さん（84） 京都新聞　朝刊　7 ページ　612 文字
	パグウォッシュ会議　「科学者も歴史学んで」　長崎で被爆者が写真展 京都新聞　朝刊　28 ページ　506 文字
	南アジアの核リスク議論　パグウォッシュ会議 2 日目 中国新聞　朝刊　3 ページ　502 文字
	パグウォッシュ会議　パキスタンも核保持正当化　再び批判相次ぐ 四国新聞　朝刊　5 ページ　303 文字
	「核兵器　遺伝子を標的」　後遺症研究の被爆医師　朝長さん　長崎・パグ

11 月 4 日	ウォッシュ会議　非人道性を訴え 愛媛新聞　3 ページ　853 文字
	パグウォッシュ世界大会　2015 ナガサキ／事務総長報告／核軍縮へ「対話促す」／紛争解決に貢献を 長崎新聞　26 ページ　623 文字
	核問題への関心　地域で“温度差”／長崎訪問の若者発表／非核協事業 長崎新聞　26 ページ　475 文字
	◎パキスタン元中将　核戦力保持を正当化　パグウォッシュ会議 熊本日日新聞　朝刊　22 ページ　402 文字
	パキスタンも正当化／パグウォッシュ会議　核、批判相次ぐ 琉球新報　朝刊　9 ページ　876 文字
	「原爆で人生観変わった」、ノーベル化学賞下村氏、パグウォッシュ会議で講演。 日本経済新聞　西部朝刊 17 ページ　426 文字
	（核といのちを考える）原発リスク、議論伯仲　パグウォッシュ会議　【西部】 朝日新聞　朝刊　27 ページ　2411 文字
	「戦争・核兵器のない世界を」下村脩さん、原爆目撃を語る　パグウォッシュ会議／長崎県 朝日新聞　朝刊　25 ページ　975 文字
	パグウォッシュ会議：原発リスク巡り議論　福島事故受け 毎日新聞　朝刊　26 ページ　354 文字
	パグウォッシュ会議：「現実と期待にギャップ」　原発事故の背景討議 毎日新聞　西部朝刊　24 ページ　999 文字
	科学者ら郷土料理味わい交流　歓迎レセプションに 200 人=長崎 西部読売新聞　朝刊　31 ページ　301 文字
	パグウォッシュ会議　下村さん核廃絶訴え　ノーベル賞　原爆「強烈なショック」 西部読売新聞　朝刊　34 ページ　696 文字
	「原爆で人生観変わった」　ノーベル賞化学者・下村氏が講演 産経新聞　東京朝刊　26 ページ　357 文字
	長崎「パグウォッシュ会議」　イラク高官　ＩＳなどの組織増強防止を訴え ＮＨＫニュース　611 文字
	日本の原子力政策批判＊パグウォッシュ会議＊兵器転用の恐れ指摘

	北海道新聞　朝刊　26 ページ　511 文字
	「コスト高、兵器転用も」　日本の原子力政策批判　世界大会で米科学者 岩手日報　朝刊　22 ページ　462 文字
	長崎・パグウォッシュ会議　日本の核サイクル批判　米国物理学者 秋田魁新報　朝刊　20 ページ　724 文字
	長崎「パグウォッシュ会議」　海外科学者、日本の核政策批判　「コスト高、兵器に転用可」 東京新聞　朝刊　6 ページ　1388 文字
	長崎「パグウォッシュ会議」河野氏　戦争廃絶へ政権は沿っているか 東京新聞 6 ページ
	長崎パグウォッシュ会議　原子力利用を討議　日本の政策批判 信濃毎日新聞　朝刊　4 ページ　425 文字
	「原爆で人生観変わった」－ノーベル賞下村氏、核廃絶へ願い 静岡新聞　朝刊　3 ページ　659 文字
	科学者、核サイクル批判　「兵器にも転用可能」－パグウォッシュ会議 静岡新聞　朝刊　3 ページ　415 文字
	「兵器に転用可能」　核サイクルを批判　パグウォッシュ会議で学者 京都新聞　朝刊　20 ページ　369 文字
	原爆体験「人生観に変化」　ノーベル賞　下村氏ら講演　パグウォッシュ会議 3 日目 中国新聞　朝刊　2 ページ　695 文字
	日本の原子力政策批判　パグウォッシュ会議で科学者ら　高コスト、兵器転用の恐れ 四国新聞　朝刊　2 ページ　333 文字
	核燃料サイクル　日本の政策批判　長崎・パグウォッシュ会議　コスト・兵器転用　学者危惧 愛媛新聞　3 ページ　1799 文字
	「原爆　人生観変えた」　ノーベル化学賞　下村氏が講演　パグウォッシュ会議 西日本新聞　朝刊　3 ページ　519 文字
	長崎県／長崎　露天風呂、相部屋、日本食…　伊王島のもてなし好評　パグウォッシュ会議の会場、宿泊施設／長崎ワイド 西日本新聞　朝刊　20 ページ　583 文字
	「兵器転用可能」核サイクル批判　米科学者、世界大会で

	佐賀新聞　20 ページ　333 文字
	パグウォッシュ世界大会　2015 ナガサキ／核燃サイクル批判／米国の科学者「兵器転用の恐れ」 長崎新聞　1 ページ　594 文字
	パグウォッシュ世界大会　2015 ナガサキ／ノーベル化学賞・下村さん／原爆は私の人生観変えた／体験語り、核なき世界訴え 長崎新聞　20 ページ　712 文字
	パグウォッシュ世界大会　2015 ナガサキ／「心動かされた」／現代能「長崎の聖母」上演 長崎新聞　20 ページ　342 文字
	パグウォッシュ世界大会　2015 ナガサキ／進むべき方向でない／河野氏、安倍政権を疑問視 長崎新聞　20 ページ　330 文字
	◎原爆で人生観変わった　ノーベル化学賞受賞の下村脩さん　パグウォッシュ会議 熊本日日新聞　朝刊　4 ページ　610 文字
	◎日本の原子力政策批判　パグウォッシュ会議　高コスト、兵器転用恐れ 熊本日日新聞　朝刊　4 ページ　425 文字
	原爆で人生観変わった／ノーベル賞下村氏が講演／河野氏が演説政権を疑問視／「戦争廃絶沿うのか」／日本の原子力政策批判／核廃絶世界大会で討議／長崎市 宮崎日日新聞　朝刊　5 ページ　1509 文字
	核サイクル「兵器にも」／米科学者、日本政府を批判 琉球新報　朝刊　7 ページ　418 文字
	日本の核政策批判／長崎で米学者「兵器転用可能」 沖縄タイムス　朝刊　6 ページ
	河野氏が安倍政権疑問視 沖縄タイムス　朝刊　6 ページ　209 文字
11 月 5 日	日本の原子力、高コストに批判（フラッシュ） 日経産業新聞　8 ページ　273 文字
	「長崎を最後の被爆地に」　パグウォッシュ会議、宣言発表し閉会　【西部】 朝日新聞　夕刊　7 ページ　588 文字
	（地球 24 時）核合意履行 12 月末ごろ　イランの原子力庁長官

	朝日新聞　朝刊　13 ページ　151 文字
	70 年前の長崎の惨状と同じ　パグウォッシュ会議、世界各地の課題議論／長崎県 朝日新聞　朝刊　27 ページ　1832 文字
	パグウォッシュ会議：長崎、最後の被爆地に　宣言を発表 毎日新聞　夕刊　8 ページ　473 文字
	パグウォッシュ会議：「最後の被爆地に」　長崎宣言 毎日新聞　西部夕刊　1 ページ　661 文字
	ことば：パグウォッシュ会議 毎日新聞　西部夕刊　1 ページ　278 文字
	核廃絶へ「長崎宣言」発表　パグウォッシュ会議が閉幕 西部読売新聞　夕刊　1 ページ　450 文字
	核保有国に廃絶確約を要求し閉幕―長崎、パグウォッシュ会議 共同通信ニュース　650 文字
	被爆者対話、大きな力に―パグウォッシュ会議会長 共同通信ニュース　382 文字
	首相、核合意の確実履行を要請―イラン副大統領に 共同通信ニュース　365 文字
	核保有国は廃絶確約を=「長崎宣言」発表し閉幕―パグウォッシュ会議 時事通信ニュース　　430 文字
	長崎・パグウォッシュ会議　世界の指導者に核廃絶訴える　長崎宣言を発表 ＮＨＫニュース　　575 文字
	長崎・パグウォッシュ会議　イラン、6 カ国合意報告　各国科学者ら「祝福する」 秋田魁新報　朝刊　20 ページ　437 文字
	パグウォッシュ会議閉幕　「世界の指導者　被爆者の叫び聞け」　核廃絶へ確約迫る 東京新聞　夕刊　1 ページ　1318 文字
	この人　パグウォッシュ会議に 60 年近く関わる　小沼通二（こぬま・みちじ）さん（84） 東京新聞　朝刊　3 ページ　464 文字
	長崎パグウォッシュ会議が閉幕　核保有国に廃絶確約要求　「宣言」を発表 信濃毎日新聞　夕刊　1 ページ　930 文字
	豆らんぷ=最後の被爆地に―。なお続く苦難訴え…

	信濃毎日新聞　夕刊　1ページ　150 文字
	長崎パグウォッシュ会議　中東情勢を討議　イランのサ副大統領、6カ国合意報告 信濃毎日新聞　朝刊　4ページ　315 文字
	核兵器の廃絶　確約求め閉幕－長崎のパグウォッシュ会議 静岡新聞　夕刊　8ページ　453 文字
	大自在（2015年11月5日・木曜日）=パグウォッシュ会議 静岡新聞　朝刊　1ページ　643 文字
	「核廃絶確約を」宣言発表　パグウォッシュ会議閉幕 中日新聞　夕刊　3ページ　567 文字
	核兵器廃絶　確約を要求　パグウォッシュ会議「長崎宣言」 京都新聞　夕刊　1ページ　666 文字
	イラン副大統領が講演　パグウォッシュ会議4日目　対話で解決　重要性訴え 中国新聞　朝刊　2ページ　478 文字
	核廃絶　割れる国際社会　国連2決議採択　保有五大国　反対や棄権　米の「核の傘」日本岐路 愛媛新聞　3ページ　1123 文字
	「パグウォッシュ会議」閉幕 西日本新聞　夕刊　1ページ　443 文字
	二つの核廃絶決議　国連で採択／核禁止　背を向けた五大国／国際社会分断、日本岐路に 長崎新聞　3ページ　1129 文字
	パグウォッシュ世界大会　2015ナガサキ／核合意　対話で実現／イラン副大統領が強調 長崎新聞　24ページ　787 文字
	パグウォッシュ世界大会　2015ナガサキ／インタビュー　ブッチャー事務局長／核廃絶の動きに勢いを 長崎新聞　24ページ　450 文字
	国連で二つの核廃絶決議採択／核禁止、背向けた五大国／国際社会分断、日本岐路に 琉球新報　朝刊　11ページ　1125 文字
	6カ国と合意　科学者ら歓迎／イラン副大統領が報告 琉球新報　朝刊　11ページ　208 文字

	「核なき世界」に背／保有五大国が反対・棄権／国連総会 2 決議／日本の立ち位置　微妙に 沖縄タイムス　朝刊　6 ページ　1134 文字
	［時の人］／パグウォッシュ会議　発足初期から関わる／小沼通二（みちじ）さん／核廃絶　科学者の立場から 沖縄タイムス　朝刊　23 ページ　602 文字
11 月 6 日	核廃絶確約へ「長崎宣言」、パグウォッシュ会議閉幕。 日本経済新聞　朝刊　38 ページ　147 文字
	イラン核合意巡り会談　安倍首相 朝日新聞　朝刊　4 ページ　165 文字
	「長崎を最後の被爆地に」宣言　パグウォッシュ会議閉幕　【西部】 朝日新聞　朝刊　36 ページ　1450 文字
	パグウォッシュ会議閉幕 朝日新聞　朝刊　37 ページ　338 文字
	被爆者の声「大きな力に」　パグウォッシュ会議、「長崎宣言」発表し閉幕／長崎県 朝日新聞　朝刊　31 ページ　1873 文字
	クローズアップ 2015：長崎・パグウォッシュ会議　核兵器廃絶、厚い壁 毎日新聞　朝刊　3 ページ　2029 文字
	ことば：パグウォッシュ会議 毎日新聞　朝刊　3 ページ　124 文字
	発信箱：科学者と戦争=青野由利 毎日新聞　朝刊　10 ページ　684 文字
	パグウォッシュ会議：閉幕　被爆者の叫び聞け　「長崎宣言」 毎日新聞　西部朝刊　1 ページ　594 文字
	パグウォッシュ会議閉幕 読売新聞　東京朝刊　37 ページ　178 文字
	長崎宣言　核廃絶へ決意　パグウォッシュ会議閉幕　被爆者ら手応え=長崎 読売新聞　西部朝刊　31 ページ　732 文字
	「長崎　最後の被爆地に」　宣言発表　パグウォッシュ会議　閉幕 読売新聞　西部朝刊　34 ページ　648 文字
	核保有国に「廃絶を」＊パグウォッシュ会議で長崎宣言 北海道新聞　朝刊　4 ページ　435 文字
	核廃絶確約求め国際会議が閉幕　長崎

	東奥日報　朝刊　21 ページ　456 文字
	核廃絶求め長崎宣言　パグウォッシュ会議閉幕 岩手日報　朝刊　24 ページ　591 文字
	核保有国、廃絶確約を　「パグウォッシュ会議」閉幕　「長崎宣言」発表 秋田魁新報　朝刊　22 ページ　730 文字
	核廃絶　確約求める／パグウォッシュ会議閉幕／長崎 下野新聞　4 ページ　612 文字
	《三山春秋》 上毛新聞　1 ページ　554 文字
	パグウォッシュ会議閉幕　反戦の科学者　参加は減少　核廃絶あきらめぬ 東京新聞　朝刊　6 ページ　2485 文字
	パグウォッシュ会議　長崎宣言全文 東京新聞
	イラン副大統領と会談／核合意の履行　首相「着実に」＜面名=総合＞ 神奈川新聞　2 ページ　378 文字
	パグウォッシュ会議閉幕／核廃絶　確約求める／「傘」依存も変革を　＜面名=地域＞ 神奈川新聞　17 ページ　783 文字
	長崎パグウォッシュ会議閉幕　ダ会長ら会見　被爆者との対話「大きな力になる」 信濃毎日新聞　朝刊　3 ページ　382 文字
	核廃絶実現　道のり遠く　長崎・パグウォッシュ会議閉幕　保有国　抑止論譲らず 中日新聞　朝刊　32 ページ　1165 文字
	核兵器　法的禁止訴え　パグウォッシュ会議　長崎宣言発表し閉幕 中国新聞　朝刊　1 ページ　679 文字
	科学者と保有国　平行線　パグウォッシュ会議閉幕　日本に厳しい目 中国新聞　朝刊　3 ページ　891 文字
	社説　パグウォッシュ会議　被爆地からの発信重い 中国新聞朝刊　6 ページ　1305 文字
	核保有国に廃絶確約要求　「傘」依存も見直しを　パグウォッシュ会議閉幕 四国新聞朝刊　3 ページ　1663 文字
	核廃絶確約を要求　パグウォッシュ会議　長崎宣言　「傘」含め安保変革迫る　原発議論深まらず

	愛媛新聞　7 ページ　857 文字
	「長崎　最後の被爆地に」　宣言発表　パグウォッシュ会議閉会 西日本新聞　朝刊　1 ページ　706 文字
	長崎県／「核燃料再処理」に反対　パグウォッシュ会議の参加者　きょう首相へ書簡 西日本新聞　朝刊　27 ページ　515 文字
	【解説】パグウォッシュ会議　核廃絶へ具体的行動を　長崎宣言　安保政策変革迫る 西日本新聞　朝刊　33 ページ　668 文字
	「長崎最後の被爆地に」　核保有国に廃絶確約要求　パグウォッシュ会議 佐賀新聞　26 ページ　718 文字
	パグウォッシュ世界大会　2015 ナガサキ／核保有国　廃絶確約を／「人間性　忘れるな」／「長崎宣言」発表し閉幕 長崎新聞　1 ページ　782 文字
	パグウォッシュ世界大会　2015 ナガサキ／解説／「長崎宣言」発表し閉幕／増す脅威に危機感 長崎新聞　1 ページ　437 文字
	論説／「長崎宣言」／核兵器禁止への強い援護 長崎新聞　2 ページ　1077 文字
	パグウォッシュ会議閉幕／「宣言」被爆者ら評価／科学者の行動力に期待／「もっと強いメッセージ」望む声も 長崎新聞　28 ページ　614 文字
	パグウォッシュ会議閉幕／再処理　無期限延期を／科学者有志、首相に要請文 長崎新聞　28 ページ　466 文字
	パグウォッシュ会議閉幕／核兵器の法的禁止を／会長「市民と連携したい」 長崎新聞　29 ページ　820 文字
	パグウォッシュ会議閉幕／ヤング会議も声明／「平和的共存を」 長崎新聞　29 ページ　438 文字
	◎パグウォッシュ会議　核保有国に「廃絶確約を」　「長崎宣言」を発表、閉幕 熊本日日新聞　朝刊　5 ページ　730 文字
	◎「長崎宣言」核廃絶の具体策なし　被爆者ら落胆　「苦しみ伝わった」と長崎開催評価も　パグウォッシュ会議

	熊本日日新聞　朝刊　5 ページ　560 文字
	「核廃絶　保有国確約を」／世界大会閉幕／具体的道筋示せず／長崎 宮崎日日新聞　朝刊　2 ページ　807 文字
	「核廃絶確約を」宣言／パグウォッシュ会議　被爆者の苦境言及／米ロと科学者に溝も 琉球新報朝刊　3 ページ　724 文字
	核の廃絶　確約求める／国際会議　保有国向け「長崎宣言」 沖縄タイムス　朝刊　1 ページ　777 文字
	［核心評論］／パグウォッシュ長崎会議／人間性原点に核廃絶を／長崎を最後の被爆地に 沖縄タイムス　朝刊　4 ページ　1181 文字
	パグウォッシュ世界会議閉幕　長崎宣言「核兵器削減のみならず廃絶の確約を」 原子力産業新聞　　857 文字
	安倍首相、パグウォッシュ会議で来日したサーレヒ・イラン副大統領の表敬受ける 原子力産業新聞　　623 文字
	核廃絶確約へ「長崎宣言」　パグウォッシュ会議が閉幕 日本経済新聞電子版ニュース
11 月 7 日	非核国・保有国、深い溝　核軍縮作業部会案、賛否割れる 朝日新聞　朝刊　6 ページ　1647 文字
	首相に再処理計画中止要請　パグウォッシュ会議参加の有志 朝日新聞　朝刊　37 ページ　151 文字
	科学者と宗教者が対話集会　「核兵器廃絶に向けて協力」　／長崎県 朝日新聞　朝刊　33 ページ　362 文字
	核燃再処理計画停止求める書簡　米の物理学者ら、首相に　／長崎県 朝日新聞　朝刊　33 ページ　314 文字
	青森・六ケ所村の核燃再処理工場：科学者 31 人が首相に意見書 毎日新聞　朝刊　28 ページ　165 文字
	青森・六ケ所村の核燃再処理工場：計画断念を　パグウォッシュ参加の科学者ら、首相に意見書 毎日新聞　西部朝刊　23 ページ　287 文字
	★論説★　核廃絶の行方　被爆者の叫びに応えよ　2015 年 11 月 7 日 岩手日報　朝刊　3 ページ　1006 文字

	論説／2015．11．7／パグウォッシュ長崎会議／核政策の抜本的見直しを 下野新聞　7 ページ　908 文字
	＜社説＞　戦後 70 年　科学者の長崎宣言　核と戦争のない世界へ 北日本新聞　朝刊　9 ページ　1122 文字
	核心核論（2015 年 11 月 7 日・土曜日）=長崎科学者会議－核政策の見直しを迫る 静岡新聞　朝刊　3 ページ　694 文字
	ニュースインサイド=核廃絶へ道のり遠く　保有国「安保に必要」　客観的議論求める声も－パグウォッシュ会議閉幕 静岡新聞　朝刊　23 ページ　1977 文字
	論説／2015．11．7／パグウォッシュ長崎会議／核政策を見直す契機に 山陰中央新報　2 ページ　1264 文字
	［社説］核廃絶決議　日本が先頭に立ち保有国説得を 愛媛新聞　2 ページ　1144 文字
	【社説】核廃絶と日本　問われる被爆国の存在感 西日本新聞　朝刊　2 ページ　804 文字
	長崎県／科学者と宗教者対話集会　「核廃絶へ協力不可欠」　パグウォッシュ会議出席者らが確認 西日本新聞　朝刊　25 ページ　394 文字
	水や空／パグウォッシュ「長崎宣言」 長崎新聞　1 ページ　534 文字
	ＮＥＷＳ論点／パグウォッシュ長崎会議／人間性原点に核廃絶を 長崎新聞　7 ページ　1161 文字
	パグウォッシュ会議参加　科学者と宗教者／核兵器で国守れない／対話集会、協力を確認 長崎新聞　26 ページ　508 文字
	下村さん　子どもらを激励／ゆかりの佐世保訪問／平和講演会で核廃絶を訴え 長崎新聞　26 ページ　495 文字
	社説／核兵器廃絶／科学者の叫びに耳を傾けよ／被爆地の願い世界へ／転換迫られる原子力 宮崎日日新聞　朝刊　3 ページ　1139 文字
11 月 8 日	ナガサキの視点

11 月 11 日	長崎新聞 25 ページ
	社説：パグウォッシュ　科学者の発信力高めよ
	毎日新聞　東京朝刊 5 ページ　1055 字
	そこが聞きたい「科学者の社会的責任」インタビュー　パオロ・コッタラムジーノ氏 パグウォッシュ会議事務総長　危害に最新の注意を
11 月 25 日	毎日新聞　11 ページ
	（ナガサキノート）中村久枝さん：1　伊王島から原爆を見た　／長崎県
	朝日新聞　朝刊　23 ページ　　466 文字
12 月 9 日	ノーベル平和賞の複製メダルを展示　／広島県
	朝日新聞　朝刊　28 ページ　219 文字
	ノーベル賞メダルを原爆資料館で展示　「パグウォッシュ会議」受賞複製　広島市中区
	中国新聞　朝刊　25 ページ
12 月 20 日	日中韓研究グループ結成へ　パグウォッシュ会議　委員長が方針発表=長崎
	読売新聞　朝刊　33 ページ 415 字

新聞記事抜粋

毎日新聞　2015年（平成27年）10月25日（日）　12版　特集　8

パグウォッシュ会議長崎

科学者の力で全ての核の廃絶を

核兵器と戦争の廃絶を目指す科学者らの国際会議「第61回パグウォッシュ会議世界大会」が11月1～5日、長崎市の伊王島をメイン会場に約40カ国から約200人が参加して開かれる。国内では過去2回広島市で世界大会が開かれたが長崎では初めて。主催するパグウォッシュ2015組織委員会委員長の鈴木達治郎・長崎大核兵器廃絶研究センター長に、会議の役割や被爆70年の年に被爆地・長崎で開催する意義などを聞いた。【大平明日香】

11月1~5日　メイン会場 伊王島

最後の被爆地に

パグウォッシュ会議は1955年7月に発表された「ラッセル・アインシュタイン宣言」をきっかけに生まれた。宣言は54年の米ビキニ水爆実験などで危機感を強めたイギリスの哲学者バートランド・ラッセルが起草し、物理学者アインシュタインや湯川秀樹ら著名な科学者11人が署名。人類滅亡の危機を警告し紛争解決を呼びかけた。

57年にカナダ・パグウォッシュ村で第1回会議を開催。冷戦中は東西両陣営の科学者や専門家が集まって率直な意見を交わす唯一の場となり、95年には「政治的分断を越えて科学者と政策決定者を協力させてきた」としてノーベル平和賞を受賞した。

パグウォッシュ会議の評議員も務める鈴木氏は「劇的な会議だったので広くは知られていないが、部分的核実験禁止条約や中距離核戦力全廃条約など節目で影響を与える提言をしてきた」と歴史的役割を説明する。

日本では被爆20年の65年と同60年の2005年に、いずれも広島市で世界大会が開催された。長崎で初開催となる今回のメインテーマは「被爆70年――核なき世界、戦争の廃絶、人間性の回復をめざして」。鈴木氏は「被爆者の声を聞ける時間は残されていない。きのこ雲の下で何が起きたのか。参加者は被爆者と対話し、核兵器の被害を実感してほしい」と強調する。

ただ核兵器廃絶への道は依然険しい。今年5月に米ニューヨークで開かれた核拡散防止条約（NPT）再検討会議は決裂。3月にはロシアのプーチン大統領がクリミア編入を巡って核兵器を準備していたことを明らかにした。パグウォッシュ会議も著名科学者が参加した初期のころやノーベル平和賞受賞時に比べ存在感が薄くなっている。

しかし「現状が厳しいからこそ、あきらめてはいけない」と鈴木氏は力を込める。会議では核兵器の非人道性と北東アジア非核兵器地帯についての議論に特に期待しているという。「核抑止力を信じている限り核兵器はなくならないことを理論的に打ち出したい。NPT再検討会議では示せなかった新しいアイデアを出し、実際の核軍縮につながることを期待したい」

会議は最終日に「長崎宣言」を発表する。鈴木氏は「『長崎を最後の被爆地に』など、長崎でしか伝えられないメッセージを発信したい」と語った。

すずき・たつじろう
1951年生まれ。東京大学工学部卒。専門は原子力政策、エネルギー環境政策など。2010年1月～14年3月、内閣府原子力委員会委員長代理。長崎大学核兵器廃絶研究センター副センター長を経て、15年4月から現職。07～09年と14年からパグウォッシュ会議評議員。

パグウォッシュ会議と核兵器を巡る動き

1945.8　米軍が広島・長崎に原爆投下
1954.3　米ビキニ水爆実験で第五福竜丸乗組員が被爆
1955.7　ラッセル・アインシュタイン宣言

哲学者ラッセルと物理学者アインシュタインが、核戦争による人類滅亡の危険性を訴え、紛争を平和的手段によって解決するようにと告げた宣言。湯川秀樹を含む世界の著名な科学者11人が署名した。

1957.7　カナダ・パグウォッシュ村で第1回会議

ラッセル・アインシュタイン宣言を受け、カナダの漁村・パグウォッシュ村に米ソなど世界の科学者22人が集まって会議を開催。核兵器の危険性、科学者の社会的な責任などについて議論した。日本からは湯川秀樹、朝永振一郎、小川岩雄の3人が参加した。

1957.10　日本パグウォッシュ会議が発足
1962.5　第1回科学者京都会議開催
1963.10　部分的核実験禁止条約（PTBT）が発効
1970.3　核拡散防止条約（NPT）が発効
1975.8　京都で第25回パグウォッシュ・シンポ
1986.4　チェルノブイリ原発事故
1989.9　東京で第56回パグウォッシュ・シンポ
1991.12　ソ連が崩壊
1995.5　NPT無期限延長を決定
1995.7　第45回パグウォッシュ会議年次大会（広島市）
1995.12　パグウォッシュ会議とジョセフ・ロートブラット氏がノーベル平和賞を受賞

「国際政治における核兵器の役割を減じ、核兵器廃絶を目指す長年にわたる努力」が評価され、当時のジョセフ・ロートブラット会長とともに受賞。同じ年の広島大会で核兵器廃絶と国際紛争の解決に戦争以外の手段を用いる目標を宣言したことも受賞理由となった。

1996.9　核実験全面禁止条約（CTBT）採択
2001.9　米同時多発テロ
2003.1　北朝鮮がNPT脱退を宣言
2005.2　北朝鮮が核保有を宣言
2005.7　第55回パグウォッシュ会議年次大会（広島市）

約40カ国から約170人が参加。「ヒロシマ・ナガサキから60年」を全体テーマに5日間、核不拡散や核軍縮などについて議論した。核兵器の危険性が高まっている現状に強い危機感を表明し、核保有国に核兵器禁止条約を締結するよう呼びかける広島宣言を採択した。

2009.4　オバマ米大統領が「プラハ演説」で「核なき世界」の実現訴える
2011.3　東日本大震災・東電福島第1原発事故
2015.5　NPT再検討会議決裂

下村脩氏ら講演公開

5日間にわたる会議は原則非公開だが、市民に理解を深めてもらうため今回、13のセッションを一般公開する。会場は長崎市坂本の長崎大医学部記念講堂。日本パグウォッシュ会議のホームページで事前登録が必要。

一般市民に最大の見どころは、2008年にノーベル化学賞を受賞した長崎出身で米国在住の下村脩氏、同年に物理学賞を受賞した益川敏英氏による講演だ。下村氏は米国が第二次世界大戦時に進めた秘密の原爆開発計画「マンハッタンプロジェクト」の中核施設だった研究所を訪問した体験を語るという。

1日午後には米露の政府高官が登壇し、核兵器廃絶への道筋や核軍縮の見通しについて議論する。質疑応答もあり、核保有国の当事国に対して会場から厳しい質問が予想される。

東京電力福島第1原発事故の教訓を踏まえた「原子力の平和利用のリスク」をテーマにしたセッションもあり、元国会原子力事故調査委員会委員長で元日本学術会議会長の黒川清氏らが登壇。原発の安全確保や使用済み核燃料問題などを巡る活発な議論となりそうだ。

1日午前	特別式典	被爆者の講話 ノーベル平和賞メダルレプリカの寄託
午後	開会セッション	核兵器の非人道的影響 核兵器廃絶への道筋――核軍縮の見通し
2日午前	全体セッション	南アジアの核リスク
3日午前	全体セッション	アフガニスタン・パレスチナの将来 平和と共存の北東アジアをめざして
午後	公開セッション	原子力の平和利用のリスク 下村脩、益川敏英両氏による講演
4日午後	全体セッション	パグウォッシュ会議会長によるスピーチ イラク、シリア、イスラミックステート
5日午前	全体セッション 閉会　長崎宣言	アインシュタイン宣言からの60年

2015 年 10 月 25 日　毎日新聞　朝刊　8 面

いちから わかる！

パグウォッシュ会議って何じゃ？

科学者らが核兵器廃絶を話し合う。長崎であすから開催

ホー先生　核兵器廃絶について話し合う国際会議が長崎市であると聞いたぞ。

A　パグウォッシュ会議のことだね。科学者や軍縮の専門家ら40カ国の約200人が11月1日から5日間、核兵器や戦争の廃絶について話し合う。国内では広島で2度開かれたけど、長崎では初めてだ。

ホ　どんな歴史があるのか？

A　日本とは縁がある。1954年にビキニ環礁で米国が行った水爆実験で、漁船の第五福竜丸が被曝。その影響を知った物理学者アインシュタインと哲学者ラッセルが翌年、「核兵器が人類の存続を脅かしている」と訴えるラッセル・アインシュタイン宣言を発表した。その宣言に賛同した科学者らがカナダのパグウォッシュという村に集まったのが会議の始まりだ。日本初のノーベル賞受賞者、湯川秀樹博士も参加した。

ホ　これまでの成果は？

A　参加者は国や組織の代表ではなく個人として発言するので、各国の政策に直接は影響しない。でも、議論が核不拡散条約（NPT）の成立に結びついた例などがある。95年には、パグウォッシュ会議と当時のロートブラット会長がノーベル平和賞を受賞したよ。

ホ　ホホウ。長崎では何を話しあうのか？

A　核軍縮をめぐっては、世界の核兵器の大半を持つ米ロの政府高官も参加して意見を交わす。東京電力福島第一原発事故の教訓を踏まえ、原発のリスクについても話し合う。イランの核合意など地域の問題についても議論するんだ。

ホ　長崎で開かれることの意味はなんだ？

A　参加者は被爆者と対話し、長崎原爆資料館も訪れる。70年前に何が起きたかを肌で感じたうえで議論することになるよ。最終日に発表する長崎宣言では、「長崎を最後の被爆地に」というメッセージを打ち出すことになりそうだ。

（岡田将平）

パグウォッシュ会議や核問題をめぐる主な出来事

1945年	広島、長崎に原爆投下
54	ビキニでの水爆実験で第五福竜丸が被曝
55	ラッセル・アインシュタイン宣言
57	第1回会議がカナダ・パグウォッシュ村で開かれる。湯川秀樹博士ら参加
95	広島で初開催 パグウォッシュ会議とロートブラット会長（当時）にノーベル平和賞
2005	広島で2回目の会議開催
15	長崎で初の会議

アインシュタイン

湯川秀樹

ロートブラット

長崎での会議の主なテーマ

- 核兵器の非人道的影響
- 核兵器廃絶への道筋
- パレスチナの将来
- 平和と共存の北東アジアをめざして
- 原子力の平和利用のリスク
- イラン核開発をめぐる議論と交渉の12年

2015・10・31

■質問のテーマを募っています。あて先は　wakaru@asahi.com

2015 年 10 月 31 日　朝日新聞　朝刊　2 面

核廃絶 科学者ら討議

パグウォッシュ会議

パグウォッシュ会議　第1回は1957年、カナダの漁村パグウォッシュで開かれ、ノーベル物理学賞を受賞した湯川秀樹ら世界の科学者22人が、核兵器の危険性や科学者の社会的責任について議論した。被爆50年と60年にあたる95年と2005年には、広島市で開催された。核拡散防止条約（NPT）などの議論にも貢献し、95年にノーベル平和賞を贈られた。

きょうから長崎で世界大会

核兵器廃絶などをテーマに世界の科学者らが議論する「パグウォッシュ会議」の第61回世界大会が1日、長崎市で開幕する。国内での開催は3回目で、長崎では初めて。最終日の5日には核軍縮の動きが停滞する現状の打開などを呼びかける「長崎宣言」を採択し、世界に発信する。（南佳子、矢野恵祐）

同会議は、物理学者アインシュタインらが核戦争による人類滅亡の危険性などを訴えた1955年の「ラッセル・アインシュタイン宣言」を受け、科学者が集まって57年に始まった。国籍や政府間の対立を超えた立場で議論している。

今回は40か国約190人が参加。八つの作業部会に分かれ、核兵器廃絶に向けた具体的な道筋や東京電力福島第一原子力発電所事故を受けた原子力の平和利用などをテーマに非公開で討議する。最終日には各作業部会の議論を踏まえ、「長崎宣言」をとりまとめる。

米露政府の核軍縮担当者による意見交換や、ノーベル化学賞受賞者の下村脩・米ボストン大名誉教授の講演もある。1日には、参加者が長崎市の平和公園や長崎原爆資料館などを訪れ、被爆者から体験を聞く。

パグウォッシュ会議を巡る主な経過

1945年8月	米国が広島、長崎市に原爆を投下
54年3月	太平洋ビキニ環礁で米国が水爆実験。マグロ漁船「第五福竜丸」の乗組員が被曝（ひばく）
55年7月	「ラッセル・アインシュタイン宣言」発表
57年7月	カナダ・パグウォッシュ村で第1回会議
秋	日本パグウォッシュ会議発足
70年3月	核拡散防止条約（NPT）発効
95年7月	広島市で国内初の世界大会開催
10月	ジョセフ・ロートブラット会長（当時）と会議のノーベル平和賞受賞発表
2005年7月	広島市で国内2回目の世界大会開催
15年5月	NPT再検討会議が決裂
15年11月	長崎市で世界大会開催

「被爆者の声伝えたい」「核軍縮へヒントを」

ダナパラ会長インタビュー

「パグウォッシュ会議」世界大会を前に、ジャヤンタ・ダナパラ会長(76)＝写真、浦上太介撮影＝が31日、長崎市内で読売新聞社のインタビューに応じた。「長崎の被爆者の声を世界に伝え、核兵器廃絶と戦争をなくす取り組みを確かなものにしなければならない」と決意を示した。

スリランカ出身。国連の軍縮担当事務次長などを歴任し、2007年にパグウォッシュ会議の会長に就任した。

ダナパラ氏は世界に1万6000発近い核弾頭が存在することを挙げ、「（核軍縮に向けて）核保有国の責任は増していると指摘。今大会では米露政府の核軍縮担当者による討論が予定されており、「両政府の考えを科学者が直接聞くことは、核軍縮を考えるうえでヒントを得ることにつながる」と述べた。

被爆70年の節目にあたり、長崎では初めての開催。「核兵器がもたらすものを直接、体験した被爆者から学べば、核兵器廃絶の重要性を強く認識できる。被爆者のメッセージを世界に広げることを約束する」と誓った。

大会では、東京電力福島第一原子力発電所の事故を踏まえ、原子力の平和利用のリスクに関する議論も行われる。ダナパラ氏は安全性の確保を前提としたうえで、「核の平和利用は、がん治療や農業分野などで人類に利益をもたらしうる。科学者が事故の教訓に基づく意見を出し合い、最良の方法を検討しなければならない」と訴えた。

2015年11月1日 読売新聞 朝刊 32面

「核軍縮のために何ができるか」

ヤングパグウォッシュ会議

海外若手研究者 全国から集う若者交流

核兵器と戦争の廃絶

核兵器と戦争の廃絶を目指す科学者らによる国際会議「第61回パグウォッシュ会議世界大会」に合わせ、海外の若手研究者と全国から集まった若者ら計約60人による意見交換会が31日、長崎市の国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館で開かれた。「核軍縮のために若者に何ができるか」をテーマに、国を超えた活発な議論が交わされた。

日本非核宣言自治体協議会が主催。参加したのは10月30、31日に長崎市の伊王島で開かれた「第9回国際学生・ヤングパグウォッシュ会議」に出席した約20カ国の若手研究者約30人と、平和に関心を持つ全国の大学生や自治体職員計9人。長崎大の学生ら約20人も加わった。

前半は、日本側の参加者が平和のための取り組みを発表。京都市の京都外語大生の阿比留高広さん(21)は、被爆者の証言を多言語に翻訳してインターネットで紹介する活動を説明し、「日本人でも原爆の知識が少ないのが問題点だ」と話した。

後半はグループに分かれて議論。「インターネットなどで簡単に世界と交流ができるので、歴史や立場を乗り越えて話し合える」など若者の良い所や、「国ではばらつきがあるので、共通した国際的な平和教育ができるようになればいい」「漫画や映画で伝えると心に響きやすいのではないか」などのアイデアが出された。

参加した東京都国立市の一橋大大学院2年で、広島市の被爆体験の伝承者になるための研修をしている大澤志織さん(23)は、「海外で戦争の記憶がどのように伝承されているかを聞けて面白かった」と話した。

【大平明日香】

核廃絶に向けた議論をする海外の若手研究者と日本の学生たち

2015年11月1日 毎日新聞 朝刊 23面

ヤングパグウォッシュ会議に参加する若手研究者や学生ら（30日）

パグウォッシュ会議、きょうから

核廃絶へ若手が議論

長崎 開幕控え軍縮テーマに

核兵器と戦争のない世界を目指す科学者らの国際組織「パグウォッシュ会議」の世界大会が1日に長崎市で開幕するのを前に、国内外の若手研究者や学生らは31日、軍縮などをテーマに議論し合う「国際学生・ヤングパグウォッシュ会議」を行った。

同会議は非公開で10月30日から市内で実施。大会事務局によると、約20カ国の約30人が核兵器削減に向けた方策など5つのテーマで意見交換し、結論をまとめた。31日夕には、全国8都府県の大学生らと交流。各地域での平和活動の進め方について話し合った。

1日からの世界大会では、パグウォッシュ会議が1995年に受賞したノーベル平和賞のメダルの複製品を、市に寄託。被爆者と科学者の対話や、米国とロシアの軍縮担当高官による討議もある。2日以降は、非公開の作業部会で各地の紛争地帯の情勢などについて議論する。会期は5日間。

会議の評議会議長を務めるテヘラン大のサイデ・ロトフィアン教授（政治学）は「被爆者の証言に参加者は大きな衝撃を受け、核兵器の廃絶に向けた決意を強めるだろう」と期待した。

2015年11月1日 日経新聞 朝刊 35面（共同通信配信）

パグウォッシュ会議 開幕

科学者ら 核廃絶の思い新たに

核兵器廃絶などについて議論するパグウォッシュ会議に参加する科学者らは1日、開会に先立って長崎市の平和公園で献花し、長崎原爆資料館などを訪れた。証言や展示から長崎で起きたことを知り、核廃絶への思いを新たにした。参加者と会った被爆者は実相を知った科学者らの役割に期待を寄せる。

長崎原爆資料館や 城山小校舎訪問

長崎原爆資料館では、被爆者の山脇佳朗さん(81)が原爆で父親を亡くしたことや被爆後の街の様子を英語で語り、参加者は真剣に耳を傾けた。

パグウォッシュ会議が1995年に受賞したノーベル平和賞のメダルのレプリカと証書の複製が同館に寄託され、同日から常設展示が始まった。核軍縮への被爆者らの貢献に敬意を表すとともに、同館を訪れる人に会議を知ってもらおうと、会議が提案。ジャヤンタ・ダナパラ会長は「被爆者がたゆまず核軍縮を叫んできた勇気と決意を心から尊敬する」と述べ、田上富久市長が「今後も核兵器廃絶の声を発し続ける決意を新たにした」と語った。

参加者の一部は城山小の被爆校舎も訪れ、午後から長崎大医学部で議論を始めた。

城山小学校で説明を受ける参加者ら＝長崎市城山町

教授、証言聞き「被害深く理解」

スウェーデンのストックホルム大教授（国際政治）トーマス・ジョンターさんは山脇さんの証言を聞き、「核兵器の殺害を深く理解できた。頭だけでなく感情的にも理解することが大事だ」と語った。

4年以上内戦が続き、25万人以上が死亡したとされるシリアから訪れた国際政治学者エリアス・サーモさんは山脇さんの証言後、「私たちは原爆の犠牲者のために祈る。シリア人のために祈ってほしい」と発言。「70年前は核兵器で広島、長崎の2都市が破壊された。シリアは通常兵器で国全体が破壊されようとしている」と訴えた。

イスラエルとの衝突が続くパレスチナの人権団体で活動するウェセム・アフマドさんは長崎原爆資料館を見学し、「戦争は多くの破壊をもたらす。平和についての理論と実際の被害を結びつけることが、より平和な世界を保証する」と長崎で会議をする意義を語った。

イスラエルで中東・アフリカ史を研究するデイビッド・メナシュリさんは城山小の被爆校舎を見学し、「核兵器はすべてを破壊し、年齢、性別に関係なく人の命を奪う。二度と使ってはいけない」と話した。

被爆者「見学踏まえ議論深めて」

原爆資料館での寄託式には、被爆者も同席した。長崎原爆遺族会の正林克記会長(76)は「原爆を生み出した科学者が核廃絶を訴える真摯な思いを尊敬する」と歓迎。県平和運動センター被爆者連絡協議会の川野浩一議長(75)は紛争下の国から参加した人たちの話を聞き、「核廃絶とともに戦争をどう止めるかを考える必要がある」と語った。

長年語り部をしている下平作江さん(80)は「平和を愛する人たちが集まった。人間を犠牲にせずに、平和を守ることを決意して、次の世代に平和のバトンを受け継いでほしい」。

城山小では三田村静子さん(73)が、被爆したコンクリート壁や崩れた階段を案内した。参加者は壁に触れ、資料を見て質問を寄せた。「真剣に聞いてくれた。自分の目で見て体験してもらうことが重要」

内田伯さん(85)は城山小が被爆者らの活動で保存された経緯を説明。参加者からは「校舎を残してくれてありがとう」と声をかけられた。「核兵器がもたらす結果を見てもらえた。見学を踏まえて議論を深めてほしい」と語った。

（岡田将平、力丸祥子、岩波精、比留間陽介）

2015年11月2日 朝日新聞 朝刊 27面

米ロ高官 核抑止正当化

科学者、被爆者ら反発

核軍縮の見通しについて議論する（右から）ロシアのウリヤーノフ氏、米国のフリード氏、イランのロトフィアン氏＝長崎大[illegible]（[illegible]撮影）

「核兵器をなくすと戦略的バランスを崩す」「ただちに撤廃する段階ではない」―。被爆地長崎で1日開幕したパグウォッシュ会議世界大会で、米ロの政府高官は、核抑止論に基づく大国の論理を矢継ぎ早に主張した。会場を埋めた科学者は次々に反発。傍聴する被爆者からも憤りの声が漏れた。

全体会議「核兵器廃絶への道筋―核軍縮の見通し」は、米国務省で核戦略を担当するアニタ・フリード首席国務次官補代理、ロシア外務省のミハイル・ウリヤーノフ軍縮・軍備管理局長が登壇。進行はサイデ・ロトフィアン・パグウォッシュ会議評議会議長（イラン）が務めた。

フリード氏は核兵器廃絶を「究極的目標」と表現し、核抑止の信頼性、安全性を高める必要性に言及。「核軍縮の条件は難しい課題。道のりは簡単ではない」と述べた。

ウリヤーノフ氏は、ロシアのラブロフ外相の「グローバルな安全性は必要」とするメッセージを読み上げ。核削減は「ステップバイステップが現実的」とフリード氏と同様の発言をし、「即時に核なき世界を目指すのはロマンチックで非現実的」などと述べた。また、パグウォッシュ会議が大会最終日に発表する「長崎宣言」に、世界の戦略的安定性の維持の視点を盛り込むよう注文した。

2人は、自国の核軍縮努力も強調したが、ロトフィアン氏は「二大核兵器国が核軍縮に取り組んでいることは心強いが、非保有国はそれ以上のものを期待している」と皮肉を込めた。

会場では、幾人もの科学者らが反論しようと挙手。同会議のジャヤンタ・ダナパラ会長は「核兵器国には核軍縮を完結させる義務がある」と米ロの姿勢を批判し、別の科学者はフリード氏に「個人的見解もそうなのか」と質問した。

傍聴した被爆者の末永浩さん(79)は「大国意識丸出し。米ロの立場がはっきり分かった」。被爆3世の活水高3年、小柳雅樹さん(17)は「段階的核軍縮の考えでは状況は変わらない」と語った。（[illegible]）

核廃絶議論後押し 長崎ゆかりの専門家

1日のパグウォッシュ会議世界大会全体会議では、長崎ゆかりの専門家が日本や朝鮮半島を含む北東アジア地域の非核化への具体策を示したり核兵器の非人道性を報告したりして、核兵器廃絶の議論を後押しした。

全体会議「非核兵器、非大量破壊兵器地帯を目指して」で、長崎大核兵器廃絶研究センター（RECNA）の梅林宏道客員教授(78)は、RECNAの政策提言書「北東アジア非核兵器地帯設立への包括的アプローチ」を紹介。この提言は、北朝鮮の非核化だけでなく朝鮮戦争の終結なども包括した枠組み協定を掲げているのが特徴で、梅林氏は「日韓（両政府）が大胆な地域ビジョンを提案することで、70年間続いた歴史的なねじれを解決できる」と強調した。

同「核兵器の非人道的影響」では、日赤長崎原爆病院の朝長万左男名誉院長(72)が長崎原爆による白血病などの放射線の人体影響や精神影響に加え、医療拠点だった旧長崎医科大（現長崎大医学部）が壊滅して十分な医療提供が不可能になった状況を説明。「核兵器の有効な治療法は廃絶しかない」と訴えた。

一方、旧ソ連時代に核実験が繰り返されたカザフスタンのアクルベク・カマルディノフ駐日大使は、9月の国連本部での会合で同国代表が「（国連創設100周年に当たる）2045年までに核兵器なき世界を実現するという目標を達成すべく、より果敢に取り組んでいきたい」と提唱したと報告。包括的核実験禁止条約（CTBT）の発効促進を呼び掛けた。（[illegible]）

「被爆者の勇気に敬意」 科学者ら

山脇さんが語る壮絶な被爆体験に聞き入る科学者ら＝長崎原爆資料館（[illegible]撮影）

「被爆者の勇気と行動に敬意を」―。パグウォッシュ会議世界大会で来崎した海外の科学者らは1日、長崎市内で被爆者の講話を聞くなどして原爆被害の実相に触れた。

同会議のパオロ・コッタ・ラムジーノ事務局長（イタリア）は「核兵器が二度と使われないようにすることこそ、この会議の存在意義」と述べ、廃絶への決意を新たにした。

同会議は「核兵器廃絶に努力を続けてきた被爆者への敬意の証し」として、1995年に受けたノーベル平和賞のメダルの複製などを長崎、広島両市に寄託。長崎原爆資料館で受け渡しがあり、田上富久市長は「被爆地の声を発し続ける」と述べた。同席した被爆者の下平作江さん(80)は「一人一人が核兵器廃絶の決意を持ち、次の世代につなげて」と願った。市によると、同会議が複製メダルを外部寄託するのは初めて。同資料館で展示する。

被爆者の山脇佳朗さん(81)は、自身の壮絶な被爆体験を英語で講話。「長崎を最後の被爆地にするため力を貸してください」と締めくくると、科学者らは総立ちで拍手を送った。

講話を受け、ラムジーノ氏は「私たちは戦争そのものを止める必要がある」とし、シリア危機に言及。シリア代表の元大学教授、エリアス・サーモ氏は「今や通常兵器もすごい脅威。私たちが広島、長崎の犠牲者に祈るように、皆さんにもシリアで今起きていることを知ってほしい」と語った。

一行は長崎原爆資料館や旧城山国民学校校舎を見学。同会議のジャヤンタ・ダナパラ会長らは平和祈念像前で献花した。（[illegible]、[illegible]）

ノーベル賞複製メダル寄託

ダナパラ会長（左）からノーベル平和賞メダルの複製を受け取る田上市長＝長崎原爆資料館（[illegible]撮影）

2015年11月2日 長崎新聞22面（長崎新聞社提供）

核廃絶の議論 長崎で

パグウォッシュ会議開幕

パグウォッシュ会議に先立ち平和公園を訪れた科学者ら（1日、長崎市）

核兵器と戦争の廃絶を目指す科学者らの国際組織「パグウォッシュ会議」の第61回世界大会が1日、長崎市で始まった。原爆投下70年の節目に、約40カ国の科学者や政府高官ら200人近くが被爆地に集結した。長崎市での開催は初めてで、参加者は被爆遺構などを精力的に視察。米ロの軍縮担当者が従来の核抑止論を繰り返したのに対し批判の声が相次いだ。

初日の午後、長崎大で行われた全体会議には、米国のフリード国務次官補代理とロシア外務省のウリヤノフ不拡散・軍備管理局長が出席。双方とも「安全保障上、核兵器は必要で急な削減は現状では困難だ」との認識で一致。会場からは、両国の姿勢に批判的な意見が続出した。

全体会議に先立ち、参加者は午前、爆心地に近い平和公園の平和祈念像前で献花し、長崎原爆資料館に集合。同会議は1995年にノーベル平和賞を受賞しているが、「核軍縮に向けた被爆者の長年の努力に敬意を表する」として、平和賞のメダルの複製品を長崎市の田上富久市長と広島市の担当者に手渡した。

その後、長崎市で語り部活動をする被爆者の山脇佳朗さん(81)と対話。山脇さんは英語で「戦争のない世界をともにつくりましょう」と呼び掛けた。

2015年11月2日 日経新聞 朝刊 38面（共同通信配信）

長崎でパグウォッシュ会議開幕

科学者ら被爆体験聴く

核兵器と戦争の廃絶を目指し、世界の科学者らが議論する国際組織「パグウォッシュ会議」の第61回世界大会が1日、長崎市で始まった。被爆70年の節目の年に被爆地・長崎で初めて開催。この日、36カ国、計167人の参加者は長崎原爆資料館を見学し、被爆者の体験講話に耳を傾け、「核兵器のない世界」の実現に向け思いを新たにした。【24面に関連記事】

資料館では特別式典があり、11歳の時に爆心地から2・2キロの自宅で被爆した山脇佳朗さん(81)による英語の体験講話を聴いた。爆心地近くで被爆校舎が残る城山小学校も訪れた。

長崎大では市民や学生も聴講する中、開会式と全体会があり、組織委員長を務める長崎大核兵器廃絶研究センターの鈴木達治郎センター長が「どのように核廃絶に向かうのか、革新的な考えを出し合って議論を深めよう」と呼び掛けた。

安倍晋三首相らのメッセージも読み上げられた。

このほか核兵器の非人道的影響などの討論会があったほか、米国、ロシア両国の軍縮担当官がそれぞれ核兵器削減の取り組みを説明し、会場からの質問に答えた。

5日までの日程で全体会や分科会があり、中東など各地域の安全保障の課題や、東京電力福島第1原発事故を受け原子力の平和利用のリスクなどを討議。最終日に長崎宣言を世界に発信する。（上野洋光）

長崎原爆資料館に展示されている長崎型原爆「ファットマン」の模型を見学するパグウォッシュ会議世界大会の参加者＝1日午前、長崎市（撮影・三浦淳）

2015年11月2日 西日本新聞 朝刊 2面（許諾済）

被爆の爪痕 科学者触れる

体験談に耳傾け 城山小校舎訪問

パグウォッシュ会議開幕 長崎

世界の科学者が核兵器廃絶について議論するパグウォッシュ会議世界大会が長崎市で開幕した1日、参加者は長崎原爆資料館で被爆者の体験を聞いたり、被爆校舎が残る城山小を訪れたりして、被爆の爪痕に触れた。会議が1995年に受賞したノーベル平和賞のメダルのレプリカもこの日、市に永久貸与された。被爆者は「平和賞の精神を受け継ぎ、核廃絶の道筋を切り開いてほしい」と会議に期待を寄せた。

「核廃絶へ道筋」地元期待

被爆体験を語ったのは、爆心地から2・2キロの自宅で被爆した長崎市の山脇佳朗さん(81)。70年前に原爆で亡くした父を捜す途中、寄生虫が飛び出していた少年を目撃したことや、被爆後に胃がんを患い手術を受けたことを英語で伝えた。

山脇さんは最後に「原爆開発の助言をした科学者を責める気持ちはない」と切り出し、こう続けた。「しかし、原爆は生き残った被爆者だけでなく、その子どもにも悪影響を与えた。長崎を最後の被爆地にするため力を貸してください」

そのメッセージに、参加者は盛大な拍手で応じた。米プリンストン大の物理学者でインド人のM・V・ラマナさん(49)は「10代の双子の娘には山脇さんのような体験を絶対にさせたくない。参加者が核廃絶の議論をする素晴らしい動機づけになった」と語った。

参加者の一部は国の登録記念物の旧城山国民学校校舎が残る城山小も訪問。被爆者ら5人の案内を受け、原爆の熱線で黒く焦げた壁や被爆樹木を見て回った。

韓国人男性(70)は「見ただけで原爆の被害の大きさが分かる」と驚き、案内役の一人で被爆者の三田村静子さん(73)は「世界の科学者に原爆の脅威を見てもらい、世界で核兵器廃絶の声を上げてほしい」と願った。

ノーベル平和賞の複製メダルは「被爆者がたゆまず核軍縮を訴えてきたことへのささやかな敬意」として市に寄託され、原爆資料館での展示が始まった。被爆体験の語り部の下平作江さん(80)は「被爆者の思いが伝わっているんだと感じた。これからも核兵器の使用、戦争は絶対にだめだと発信したい」と語った。

(三浦淳、鎌田真一郎、佐藤里佳)

上 被爆者の案内で旧城山国民学校校舎を見て回る会議の参加者たち
下 長崎原爆資料館での展示が始まったノーベル平和賞の証書と複製メダル

2015年11月2日 西日本新聞 朝刊 22面（許諾済）

核兵器の非人道性 理解深まる

パグウォッシュ会議 鈴木委員長

核抑止力では議論必要

世界大会について語る鈴木委員長

長崎市で開かれている「パグウォッシュ会議」の世界大会組織委員長を務める鈴木達治郎・長崎大核兵器廃絶研究センター長(64)が本紙の取材に応じた。科学者らが被爆地を訪れ、核兵器の非人道性に理解を深めたことに手応えを感じる一方、核保有国などとの核兵器廃絶に対する認識に隔たりがあり、「核抑止力」に関する議論を深める重要性を指摘。大会後、公開講座を開いて市民に議論の内容を報告する場を設ける考えを明らかにした。

(聞き手・南佳子)

戦後70年

一問一答の主な内容は次の通り。

――始まった感想は。

「実際に被爆者の生の声に触れ、心を揺さぶられた参加者は多く、核兵器の非人道性への理解は深まった。しかし、1日の米露政府軍縮担当者による意見交換などを通して、(参加者の中に)抑止力を認める立場を変えない人も一定数いると改めて分かり、現状は厳しい。今後は抑止力の検証の議論も必要で、最終日の長崎宣言にも、世界のメインテーマにすべきとの意見が盛り込まれる可能性がある」

――原子力の平和利用をテーマにしたセッションではどんな議論をするのか。

「2011、13年の世界大会では、現状報告が中心だった。今回は一歩踏み込んでリスクを理解した上で、リスクをどのように減らすのかという議論をするのが狙い。専門家が真剣に検討している」

――長崎での大会後の展望は。

「日本パグウォッシュ会議としての活動を何か検討したい。市民の関心の高さも実感したので、年内にも公開講座を開き、大会の議論や課題を報告したい。サポーター制度も設け、定期的な情報発信、会議のメンバーを講師にした講座開催などを検討していきたい。長崎で生まれた連携を発展させ、核兵器廃絶につなげたい」

2015年11月3日 読売新聞 朝刊 25面

原発リスク 議論伯仲

パグウォッシュ会議

核と いのち を考える

核兵器と戦争の廃絶をめざして世界の科学者らが集い、長崎市で開かれている第61回パグウォッシュ会議世界大会は3日、原発のリスクやアジアの平和などをテーマに議論が進められた。米国の国連本部では、日本が提出した核兵器廃絶決議が採択されたものの、保有国の米英仏が棄権し、中国やロシアは反対。各国が足並みをそろえて対処することの難しさが浮き彫りになった。会議の参加者らも様々な思いをめぐらせた。

原子力の平和利用のリスクについて議論するパグウォッシュ会議の参加者＝3日午後3時25分、長崎市、真野啓太撮影

事故対策「オープンに」主張
「電気持たぬ危険性」指摘も

パグウォッシュ会議は3日、東京電力福島第一原発事故を受け、原子力の平和利用のリスクについて全体会合で意見を交わした。2011年の原発事故後、会議ではこれまでも福島をテーマに議論しており、事故後に国内初開催となる今回も全体会合のテーマの一つに取り上げた。

福島事故の国会事故調査委員長を務めた黒川清・東大名誉教授は事故を振り返り、国内で原発に対して、「安全意識が欠如していた」と発言。原発事故対策は国際的な専門家を交えてオープンに行うべきだと指摘した。

米国のシンクタンク、戦略国際問題研究所のシャロン・スクアッソーニ氏は「原発より安くエネルギーを得られる方法はある。福島の事故は原発への期待と現実のギャップを浮き彫りにした」と原発への慎重姿勢を示し、「どこまで安全が保証されないといけないのか、考えなければならない」と述べた。

一方インドの物理学者ラマムルティ・ラジャラマン氏は「原子力の危険性と電気を持たない危険性を比べてみる必要性がある」と、原発推進の立場を示した。

会場の参加者からは、「途上国の成長には核エネルギーが助けになる。チェルノブイリ、スリーマイル、福島と事故があったが、感情的になってはいけない」と原発の必要性を訴える声も上がった。

夕食会でのスピーチでは、河野洋平・元衆院議長が、日本政府が進める憲法解釈の変更や武器輸出の緩和、沖縄・辺野古への新基地建設について、「戦争の廃絶という人類の進むべき方向に沿ったものなのだろうか」と批判した。

（岡田将平、岩波精、真野啓太）

安保法 割れる評価
参加者ら

1946年11月に日本国憲法が公布されて3日で69年。パグウォッシュ会議に参加する世界の科学者らは戦争放棄をうたう憲法9条と、解釈改憲をして集団的自衛権の行使容認に踏み込んだ安全保障関連法をどう見ているのか。会場で聞いた。

参加者の多くは日本の平和憲法を知っており、その価値を評価した。安全保障が専門のロシアのアナスタシア・パラニコワさん(33)は「9条は平和国家・日本の象徴。維持すべきだ」と話す。海外での戦闘や武器使用を抑制し、日本の国際的イメージを良くしてきたとみる。

安全保障を研究するインドのジャガナート・サンカランさん(34)は、9条が日本の軍国化を防ぐためのものだったとしたうえで、「反対する人はいないのでは」と語った。

安保法についての評価は割れた。「なぜ解釈を変えたのか理解できない」。フランスの核物理学者、セルジ・フランチョさん(43)はそう話す。日本が海外に自衛隊を派遣すれば、「中立的だった日本のイメージが悪くなる」。軍事よりも経済や科学の面で世界に貢献すべきだと強調した。

韓国の政治学者、マーク・スーさん(69)も「日本の防衛のためじゃない。他国の戦争のため」と批判。欧州連合（EU）を手本に日中韓が協力して平和を保つべきだと訴えた。

米国のシンクタンクで働くトン・ジャオさん(32)＝中国＝は、日本が、南シナ海の島々の領有権をめぐって中国と対立するベトナム、フィリピンなどと関係を深めているとして「日本が軍事的に強力になれば新たな脅威となり、中国も行動を取らざるを得ないだろう」と語った。

一方、米国の原子力工学者、メーガン・マクギャリーさん(35)は、中国が軍事的に台頭し、北朝鮮が核を持つ現状を指摘。「日本が米国と協力し、平和維持活動などに自衛隊を派遣できるようになる」と評価した。

（比留間陽介）

国連委採択決議への思い

核を手放したくないだけ／依存から転換を

「核保有国は核兵器を手放したくないだけだ」。パグウォッシュ会議のジャヤンタ・ダナパラ会長（スリランカ）は3日、国連総会の委員会で日本が提案した核兵器廃絶決議に核保有国の米英仏が棄権し、中国やロシアが反対したことを批判した。

▼1面参照

ダナパラ会長は「いまだに約1万6千発の核兵器が残っている。事故で発射されたり、テロリストの手に渡ったりする恐れもある」と、核兵器の危険性を改めて指摘。「核の傘に守られている非保有国も有罪だ」と話した。

会議に参加していない被爆者からも批判の声が上がった。長崎大元学長の土山秀夫さん(90)は、日本の提案した決議を米国などが棄権したことについて「核兵器の非人道性を訴える共同声明に署名している日本が、核兵器禁止の流れに乗ることを警戒して、今のうちに日本政府を牽制しようということではないか」との見解を述べた。

一方、同じ国連総会の委員会でオーストリアなどが提出した、核兵器の禁止に向けた法的枠組みへの努力を誓う決議の採択で、日本が棄権したことを疑問視する声もパグウォッシュ会議の参加者から出た。

アルゼンチンの物理学者カレン・ホルバーグさんは原爆投下を経験した日本の発言には重みがあり、核廃絶に向けて主導的立場をとるべきだと主張。米国と同盟関係を結ぶ日本の政治的立場に理解を示しながらも「人道的理由は政治的理由よりも重い」と話した。長崎大核兵器廃絶研究センターの梅林宏道・前センター長も「被爆国として、当然賛成すべきだった」と指摘。「核の傘に依存している現状を転換しなければならない」と語った。

2015年11月4日 朝日新聞 朝刊 29面

パグウォッシュ会議 世界各地の課題議論

長崎市で5日まで開かれるパグウォッシュ会議では、核軍縮や原発だけではなく、世界各地の課題などが幅広く議論されている。中東、南アジア、北東アジア……。紛争で多くの犠牲者や難民を出しているシリアの国際政治学者も、シリアのことを伝えたいと、長崎での議論に臨んだ。

70年前の長崎の惨状と同じ

シリアの政治学者の思い

サーモさん

シリアの国際政治学者エリアス・サーモさん(70)は1日、ほかの参加者とともに被爆者の山脇佳朗さん(81)の被爆体験を聞いた。共感しつつ、自国の惨状のことも思った。「長崎で70年前に起きたことが、シリアで今起きている」

シリアは内戦に入って5年目。25万人以上の死者が出て、400万人以上が国外に逃げて難民となっている。「日本では(原爆で)2都市が破壊されたが、シリアは国全体が破壊されようとしているんです」

サーモさんの友人や知人も内戦の犠牲となった。「爆弾は突然落ちてくるんです。何ができると言うんですか」と語る。

学者として、アサド政権側、反政府勢力側の一方に肩入れすることはない。特に反政府勢力側とは何度も面会し、平和的に解決するよう呼びかけてきた。「みな国が残ることを願っているのに、シリアがシリアじゃなくなってしまうかもしれない。愚かなことだ」と考えるからだ。

望むのは、シリアがシリアとして、国を保つことだ。イスラム教のイメージが強いシリアだが、キリスト教徒もおり、サーモさんもそうだ。キリストが使ったとされる古語アラム語を使う人もいる。宗教の違いや対立を超え、シリアが一つの国として存続してほしいという。

国内では過激派の「イスラム国」(IS)も活動する。「彼らは、自分たちに反対する人は見境なく殺す。テロ組織はシリアには要らない」

サーモさんは、戦争を止めるための障害になっているのが、米ロなど他国の介入だ、と指摘する。「自分たちの利益を考えることはやめてほしい。シリアが良くなることを考えられるのはシリアの人たちだ。シリアの人たちは破壊にさらされ、戦争に疲れている。止めたいんだ」(岡田将平)

4日は過激派組織「イスラム国」(IS)の問題などについて話し合った=長崎市伊王島町

戦術核やむを得ないの意見

南アジアの核リスク(2日) パキスタン軍の元中将を交え、ともに核兵器を保有するインド、パキスタンの核問題について議論した。カシミール地方の領有権を巡り両国間では対立が続いている。パキスタンの通常兵力はインドを大きく下回るため、武力行使の抑止のためには戦術核の存在はやむを得ない状況だ、という意見が出た。初日にあった被爆者のスピーチについて、心に響いたとしつつ、現実を直視する必要性を訴える声が出た。(山野健太郎)

核実験規制の方策など示す

CTBTの進展(3日) 爆発を伴うあらゆる核実験を禁止する包括的核実験禁止条約(CTBT)は1996年に国連総会で採択され、来年で20年の節目だが、発効に必要な44カ国のうち、米中など8カ国が批准していない。会議では、国際的な核実験の監視など条約の成果を確認。引き続き批准を働きかけながら、国連安全保障理事会の決議を通じて核実験を規制する方策などが示された。核兵器の小型化、近代化を止めるための枠組みについても意見が出た。(真野啓太)

研究者の役割を改めて確認

北東アジアの平和と共存(3日) 日中韓ロの研究者を中心に、北東アジア各国間の緊張や相互不信について意見が交わされた。北朝鮮の非核化に向けては、制裁や孤立化を避け、国際社会に巻き込むことで改善を図る方策が示された。また、原発から出るプルトニウムを日本が核兵器に転用するおそれがあると指摘されている問題については、専門家が経緯を調べて示すことで解消できる誤解も多いとして、研究者の役割を改めて確認する意見もあった。(真野啓太)

国際的に協調の必要性指摘

過激派組織「イスラム国(IS)」(4日) 中東などで勢力を広げるISをめぐる問題を議論した。認められたいという承認欲求を抱く若者から支持を得ているとの指摘や、アジアにも支援組織が30ほどあり、もはや中東だけの問題でないとの見方が示された。武力による解決は現実的でなく、国際的に協調して対処する必要があるとの意見や、国連の介入を求める意見もあった。一方で、ロシアによるシリア領内のISへの空爆を歓迎する発言もあった。(小野太郎)

2015年11月5日 朝日新聞 朝刊 27面

パグウォッシュ会議

核廃絶へ具体的行動を

被爆地開催の意義重く

閉会式で長崎宣言を読み上げるパグウォッシュ会議評議員
＝5日午後、長崎市（撮影・上野洋光）

【解説】被爆70年の節目に長崎市で開かれたパグウォッシュ会議世界大会で発表された「長崎宣言」は、「長崎を最後の被爆地に」と被爆者が一貫して訴えてきた言葉を冒頭に盛り込んだ。各国の科学者が被爆者の声を直接聞き、核兵器の非人道性を強く認識したことは、大きな成果だろう。ただ、テーマが多すぎて個別の議論が深まらなかった印象は否めない。【1面参照】

大会では、核軍縮のほか、インドやパキスタンの核問題など地域ごとの課題や原子力の平和利用のリスクなどもテーマに話し合った。米ロの軍縮担当高官を招いた公開討論会には、研究者から「米ロともに核抑止力を正当化する言い訳ばかりだった。こんな討論で済ませるとは、会議の『看板力』が落ちたのではないか」と不満の声も漏れた。

大会は国連総会第1委員会の核廃絶決議採択の日程と重なった。核保有国の米国やフランスが採択を棄権したことは、今春決裂した核拡散防止条約（NPT）再検討会議と同様に、核廃絶の難しさを際立たせた。

宣言が、唯一の戦争被爆国ながら米国との同盟関係を気遣い、「核兵器禁止」をはっきりと打ち出せないでいる日本も念頭に、安全保障政策の変革を迫ったのは多くの被爆者の思いに沿う視点だ。

会議に出席した被爆者で日赤長崎原爆病院名誉院長の朝長万左男氏は科学者たちにこう訴える。「評論家としてではなく、被爆地とともに行動してほしい。政治指導者に会って直接訴える手もあるはずだ」。宣言を単なる科学者の意見発表に終わらせず、被爆者の悲願である「核なき世界」への具体的な行動が会議に求められる。（上野洋光）

2015年11月6日 西日本新聞 朝刊 33面（許諾済）

長崎宣言を読み上げるパグウォッシュ会議のサイデ・ロトフィアン評議会議長
＝長崎市で５日午後０時11分、津村豊和撮影

「長崎を最後の被爆地に」

宣言発表 パグウォッシュ会議閉幕

長崎市で開かれていた核兵器と戦争の廃絶を目指す科学者らによる国際会議「第61回パグウォッシュ会議世界大会」が5日、閉幕した。閉幕に合わせて発表した「長崎宣言」では、広島・長崎の被爆者が「今日に至っても影響に苦しんでいる」とし、世界の指導者に対し「被爆者の叫びを受け止めるよう強く訴える」と語りかけた。

（３面にクローズアップ、23面に長崎宣言の要旨）

閉幕後に記者会見したジャヤンタ・ダナパラ会長は「『長崎を最後の被爆地に』という言葉を、宣言の最初に入れた。核抑止力に依存しない安全保障政策への必要性を再認識した」と述べ、戦後70年の節目に初めて長崎開催が実現したことの意義を強調。パオロ・コッタ・ラムジーノ事務総長は「中東など各地域での非核兵器地帯の創設が重要だ」と語った。

宣言は被爆者の声に耳を傾け、世界の国々と市民社会などが連携して核兵器の法的禁止を目指すよう求めた。また、福島第1原発事故にも言及し「原子力技術に付随するリスクを封じ込めることの重要性を思い起こさせた。科学者の社会的責任はかつてないほど大きい」と呼びかけた。

世界大会で宣言を出したのは、広島市で開催された2005年以来で、5回目。会議には約40カ国から約200人が参加した。

【竹内麻子】

2015年11月6日 毎日新聞 朝刊 1面

核兵器廃絶 厚い壁

長崎市で5日閉幕した「第61回パグウォッシュ会議世界大会」が発表した「長崎宣言」は核保有国に核廃絶を迫り、「核の傘」に守られた非核保有国にも変革を求めた。参加者は、科学者たちが被爆地から世界の指導者に送るメッセージの力に期待を寄せるが、現実には核廃絶に向け国際社会が協調できる情勢にはない。会議に出席した米露の高官がそろって「核抑止力」論を展開するなど、かつてノーベル平和賞を受賞した同会議の前には核大国の厚い壁が立ちはだかる。

長崎・パグウォッシュ会議

クローズアップ2015

「宣言」各国に変革迫る

「核兵器の非人道性を訴える上で、被爆者との対話や、会議での議論は非常に大きな力になる。参加者全員が核抑止力に依存しない政策の必要性を実感したのではないか」。パグウォッシュ会議閉幕後の記者会見で、ジャヤンタ・ダナパラ会長は世界大会が被爆地で開かれた意義を強調した。

「長崎宣言」は、核拡散防止条約（NPT）再検討会議など既存の国際的な枠組みには限界があり「新たな核兵器の法的禁止の枠組みを目指すべきだ」と提言した。これについて、ダナパラ会長は「参加者が各国に持ち帰り、政策決定者に働きかけたり、市民社会と連携したりしていく必要がある」と述べ、具体的な取り組みへつなげることを期待した。

1957年創立のパグウォッシュ会議は、冷戦期でも東西両陣営の科学者が国の立場を超えて議論を交わし、核実験全面禁止条約（CTBT）やNPTの成立に影響を与えた。95年にはノーベル平和賞も受賞した。

しかし、核廃絶への道は依然険しい。今春のNPT再検討会議は加盟国の対立から最終合意文書を採択できず決裂。国連総会の第1委員会が今月2日、核廃絶への法的枠組みの強化を求める「人道の誓約」決議案を採択した際には、核保有国の大半が反対し、被爆国ながら「核の傘」に守られている日本も棄権した。

今回の会議でも初日の全体セッションで、米露の核軍縮担当の高官が登場し、両者とも核の抑止力の必要性を強調。ただちに核兵器をゼロにすることは「ロマンチックで非現実的だ」（ミハイル・ウリヤーノフ露外務省軍縮・軍備管理局長）と話すなど、改めて会議と核保有国との溝が浮き彫りになった。

こうした現状を踏まえ、「長崎宣言」は核保有国に「核兵器削減にとどまらず、核廃絶を確約しなくてはならない」と迫ると同時に、「核の傘」に依存する日本などの非核保有国にも「核軍縮を支持し、自身の安全保障政策を変革しなくてはならない」と求めた。

とはいえ、宣言に拘束力はなく、核廃絶の具体的な方法や目標も盛り込まれていない。被爆者の評価も分かれ、元長崎大学長の土山秀夫さん(90)は「残念ながら物足りなさを感じた。せっかく専門家がいるのだから、パグウォッシュ会議としてこの問題をどう解決すればいいかもっと具体的な提言をしてほしかった」と語る。

一方、今回の参加者に被爆体験を語った山脇佳朗さん(81)は「世界の指導者に『被爆者の声を聞け』とはっきり表明してくれたのはありがたい。この宣言を生かして、今後どのような提言をしてくれるのか注目したい」と期待した。【大平明日香】

原発 議論は深まらず

長崎での会議では、初めて「原子力の民生利用（平和利用）のリスク」も全体会合の議題となった。

パグウォッシュ会議は原発に無関心だったわけではなく、57年の初回から原発など民生利用を含む放射線の影響を懸念していた。一方で同会議が成立に貢献したNPTは平和利用を「奪い得ない権利」としており、科学者の間では「適切に管理すれば原子力利用は有益」との考え方が根強い。チェルノブイリ原発事故後も同会議は原発利用に明確な姿勢を示してこなかった。

今回、主要議題とした背景には「東京電力福島第1原発事故の教訓共有」を目指した日本側の積極的な働きかけと共に、「原発利用の拡大が核拡散につながる」との懸念が国際的に高まっていることがある。

全体会合では、熱を帯びる原発ビジネスや、発展途上国への原発拡大による核物質管理の不安が指摘された。非公開の作業部会は「プルトニウムを増やすべきではない」との見解で一致。

核政策研究の第一人者で米プリンストン大のフランク・フォンヒッペル氏は「日本が保有する50㌧近い分離済みプルトニウムは長崎型原爆の1万倍の威力がある」と批判し、青森県六ケ所村の使用済み核燃料再処理工場の計画中止を求める安倍晋三首相あての要望書を有志でとりまとめた。

ただ、「原発の是非は扱わない方針」（鈴木達治郎・組織委員長）だったため、福島の教訓の議論は深まらず、長崎宣言でも「（福島事故は）原子力技術に付随するリスクを封じ込めることの重要性を思い起こさせた」と触れるにとどまった。核技術の歴史に詳しい山崎正勝・東京工業大名誉教授は会議後、「被爆者の証言など人権の視点から核兵器のあり方も問いかけるのが会議の役割と期待したが、よく分からなかった」と嘆いた。【[illegible]】

パグウォッシュ会議と核兵器を巡る動き

1945年 8月	米国が広島、長崎に原爆投下
1954年 3月	米国のビキニ水爆実験で第五福竜丸乗組員が被ばく
1955年 7月	ラッセル・アインシュタイン宣言

長崎の上空高く吹き上がったキノコ雲

ラッセル・アインシュタイン宣言
哲学者ラッセルと物理学者アインシュタインが、核戦争による人類滅亡の危険性を訴え、紛争を平和的手段によって解決するようにと告げた宣言。湯川秀樹を含む世界の著名な科学者11人が署名した。

1957年 7月	第1回パグウォッシュ会議

パグウォッシュ会議
ラッセル・アインシュタイン宣言を受け、カナダの漁村・パグウォッシュ村に米ソなど世界の科学者22人が集まった。核兵器の危険性、科学者の社会的な責任などについて議論した。日本からは湯川秀樹、朝永振一郎、小川岩雄の3人が参加した。

第1回パグウォッシュ会議の参加者たち。左から4人目が朝永振一郎博士＝パグウォッシュ会議提供

1970年 3月	核拡散防止条約(NPT)が発効
1986年 4月	チェルノブイリ原発事故
1995年 7月	広島市でパグウォッシュ会議(05年に2回目開催)
1995年12月	パグウォッシュ会議とロートブラット会長がノーベル平和賞受賞
1996年 9月	核実験全面禁止条約(CTBT)採択
1998年 5月	インド、パキスタンが核実験
2006年10月	北朝鮮が核実験
2011年 3月	東京電力福島第1原発事故
2015年11月	長崎市でパグウォッシュ会議

廃炉に向けた作業が進む福島第1原発＝2012年9月、丸山博撮影

2015年11月6日 毎日新聞 朝刊 3面

長崎宣言 核廃絶へ決意

戦後70年

パグウォッシュ会議閉幕 被爆者ら手応え

5日に閉幕した長崎市での「パグウォッシュ会議」世界大会。被爆70年の節目の年に初の長崎開催となった大会では、各国の科学者らが長崎原爆の被害や健康被害などを学び、最終日に取りまとめた「長崎宣言」に核兵器廃絶への決意を込めた。（南佳子、高田佳明）

核兵器廃絶に向けた道筋を討議した会議のメンバーら

「非核兵器地帯の創設や、『長崎を最後の被爆地に』という目標の実現のため、長崎宣言は新しい活動の柱になる」。宣言発表後の記者会見で、パオロ・コッタ・ラムジーノ事務総長は宣言の意義をこう強調した。

宣言文を読み上げたサイデ・ロトフィアン評議会議長も「発表して終わりではなく、永久に思い出していく」と気を引き締めた。

閉幕後、報道陣の取材に応じた田上富久市長は「様々な考えを持っている方が集まって議論を交わし、長崎が対話と発信の場となった。市民の思いが組み込まれていて長崎らしい宣言」と評価した上で、「新しい対話の場をつくり、核保有国と非核保有国が議論を進められるようにしてほしい」と期待感を示した。

被爆者で日赤長崎原爆病院の朝長万左男・名誉院長(72)も「参加者は真剣に耳を傾けてくれ、被害は長期的なものだと伝わった」と手応えを示した。朝長名誉院長は、大会初日に核兵器の非人道性に関して講演。議論を見守った感想として、「今後の具体的行動のアイデアに期待していたが、議論は深まらなかった。物足りなさを感じた」とも語った。

最終日の全体会議で若手科学者らと意見交換した同会議の元評議員、小沼通二・慶応大名誉教授(84)は「科学者だけの議論では広がらない。戦争のない世界をつくるために、多様な分野の研究者や若者を巻き込んでいくことも必要だ」と注文を付けた。

2015年11月6日 読売新聞 朝刊 31面

核保有国 廃絶確約を

「人間性 忘れるな」

「長崎宣言」発表し閉幕

パグウォッシュ世界大会 2015ナガサキ

被爆から70年の長崎市で開かれていた核兵器と戦争の廃絶を目指す科学者らの国際組織パグウォッシュ会議の第61回世界大会は最終日の5日、「長崎を最後の被爆地に」と訴え、核兵器の法的禁止と廃絶を呼び掛ける「長崎宣言」を発表し、閉幕した。核保有国に核軍縮の促進と廃絶の確約を迫る一方、日本などを念頭に「核の傘」に依存する非保有国には非核兵器地帯の創設など安全保障政策の変革を求めた。

【6面に長崎宣言全文、28、29面に関連記事】

「長崎宣言」の発表を受け、拍手でパグウォッシュ会議世界大会を締めくくる科学者ら＝長崎市、やすらぎ伊王島（荒木勝巡撮影）

長崎宣言の骨子

- 「長崎を最後の被爆地に」―。政治指導者は被爆者の叫びを受け止めよ
- 核兵器保有国は廃絶を確約し、「核の傘」に頼る非核保有国も安全保障政策の変革を
- 軍縮・核不拡散の既存の枠組みには限界。国、市民、国際組織が連携し主導するのが重要
- 東京電力福島第1原発事故は、原子力技術のリスクを封じ込める重要性を想起。科学者の責任は重大になっている

宣言は、評議会が取りまとめたもので2005年の広島大会以来10年ぶり5回目。被爆者の声を受け止めるよう世界の指導者に強く促し、「核兵器やその他の大量破壊兵器が存在する限り、壊滅的な結末は避けられない」「人間性を忘れるな」として、核兵器と戦争の廃絶を訴えた。福島第1原発事故を踏まえ注目された原子力の平和利用については、リスクへの言及にとどまったが、分科会の場では使用済み核燃料の再処理をやめるべきとの意見で一致したという。

ジャヤンタ・ダナパラ会長（スリランカ）は閉幕後の会見で、宣言の意義について「『長崎を最後の被爆地に』とのメッセージに尽きる。参加者は被爆者の声を持ち帰って行動に移していく」と語った。

大会は1日から5日間の日程で35カ国・地域から192人が参加。開会に先立ち被爆証言を聞き、米ロの政府高官が登壇した「核兵器廃絶への道筋」など複数のテーマで全体会議を開き、八つの分科会で活発な議論を交わした。

増す脅威に危機感

（解説）

パグウォッシュ会議の「長崎宣言」は、今なお核被害に苦しむ高齢被爆者に思いを寄せながら、核兵器廃絶を強く訴えた。同時に、核の脅威が増す現状への危機感も強くにじんだ内容となった。

米ロが対立するウクライナ危機、決裂した5月の核拡散防止条約（NPT）再検討会議―。国連総会第1委員会では今月、核兵器の法的禁止に向けた決議案に、核保有5カ国に加え日本なども賛同せず、厳しい現実を突き付けた。

核軍縮が行き詰まる中、組織委員長の鈴木達治郎・長崎大核兵器廃絶研究センター長は「米ロのやりとりなどを通じ、参加者全員が核抑止力に依存しない安全保障政策への転換の必要性を再確認した」と語った。（蒲川裕之）

開かれた世界大会。米ロの政府高官ら核兵器を保有する国々の参加者が核抑止論を正当化し、非保有国の科学者らが強く反発する場面もあった。しかし長崎宣言では、廃絶に至る何らかの道筋や具体的な目標を盛り込むことはできなかった。また期間中、原子力の平和利用の是非についても論議は深まらなかった。

原爆被害を現地で学んだ科学者は、社会的責任を自覚し市民社会と手をつないで新たな行動に踏み出すことができるのか。被爆地で開かれた世界大会の成果と真価が問われるのはこれからだ。（原口司）

2015年11月6日 長崎新聞 1面（長崎新聞社提供）

論説

2015・11・6

核兵器禁止への強い援護

「長崎宣言」

第61回パグウォッシュ会議世界大会は5日、「長崎宣言」を発表して閉幕した。

人類を滅ぼしかねない核兵器の危険性を指摘した1955年のラッセル・アインシュタイン宣言を機に、その廃絶を目指す科学者が議論する場となってきた同会議。米国の原爆投下によって広島と長崎が壊滅して70年の節目に、初めて長崎で開かれた。5日間の討議を終え、まとめられた宣言は「長崎を最後の被爆地に」という文で始まる。

核軍縮は行き詰まり、核兵器転用可能な核物質の量が世界各地で増大し、意図的、偶発的な核兵器使用のリスクが存在し続けている―と現状を語り、核兵器保有国に対し、兵器近代化を中止し、その財源を核リスクの最小化、偶発的発射やサイバー攻撃の防止と軍縮に振り向けるよう求めた。

核保有国には核兵器廃絶の確約を、拡大核抑止に依存する非保有国には非核地帯参加などによる安全保障政策の変革を求め、さらには、核兵器の法的禁止を目指す世界的な運動の重要性を強調。結びに「強固な道徳心と倫理観がなければ、人類は生き延びられない」と訴えた。

核兵器の法的禁止を目指す動きが徐々に勢いを増すほど、それに対する核保有国と核抑止に依存する非保有国の忌避感は強まっている。その非保有国には日本政府が含まれ、逆に被爆地長崎は法的禁止を求めている―という解けないねじれを抱えている。

核軍縮を求める国際世論に照らせば、この宣言に書かれたことは新しい内容ではないが、今はこれらの主張を何度でも共有し、積み上げていく過程にある。長崎で科学者たちが発したメッセージは核兵器廃絶を目指す世界の連帯を強く援護してくれるだろう。

一方、宣言は「東京電力福島第1原発事故は、原子力安全と原子力技術に付随するリスクを封じ込める重要性を思い起こさせた」として、科学者の社会的責任も指摘した。討議の中で、原子力の平和利用に対する是非は分かれた。それに物足りなさを感じた被爆者も多かっただろう。

福島事故は、「安全神話」に陥っていた原子力の産学官の姿を暴き出した。さらに見逃せないのは、事故後の地元社会の混乱と痛みを緩和することにも失敗したことだ。そこでは、科学者にも果たすべき役割があったはずだが、十分に機能したと評価されているわけではない。

世界各国で原子力利用に対する立場はさまざまだが、福島事故を経験した日本政府は今も原発依存の低減を掲げているし、脱原発を求める国民は非常に多い。にもかかわらず、その方向性が既に危ういと言わざるを得ないのは、政治と世論の隔絶だけでなく、科学者と市民の間にも距離を感じるからだ。（森永玲）

2015 年 11 月 6 日 長崎新聞 2 面（長崎新聞社提供）

核兵器の法的禁止を

パグウォッシュ会議閉幕

会長「市民と連携したい」

被爆70年に被爆地長崎で初めて開かれ、5日に閉幕した第61回パグウォッシュ会議世界大会。記者会見で、ジャヤンタ・ダナパラ会長（スリランカ）は「大量破壊兵器で（法的に）禁止されていないのは核兵器だけ。パグウォッシュ会議として核兵器の法的な禁止を目標にしたい」と明言。「市民社会と連携し、核兵器の禁止に向け行動したい」と力を込めた。

ダナパラ氏は、初日の全体会議で米国とロシアの政府高官が核抑止論や段階的な核軍縮論を強く主張したことを挙げ、「パグウォッシュは違う立場で考えている」とけん制。核兵器使用は国際法や人道法に「一般的に反する」とした国際司法裁判所の勧告的意見に触れ、禁止条約を定めた後に段階的に減らすよう提唱した。

この考えは「長崎宣言」にも盛り込まれ、法的禁止に触れた上で核保有国にまず、核兵器システムの近代化計画を中止することなどを求めた。また核保有国と同盟関係にある「核の傘」依存国に対しても安全保障政策の転換を促した。

会見で、サイデ・ロトフィアン議長（イラン）は、核保有国も非保有国もそれぞれ核軍縮の役割があることに言及した。

一方、原子力の平和利用についてダナパラ氏は、「途上国の立場からすれば、大きな恩恵がある」と一定の理解を示した。原子力の平和利用を疑問視する被爆者の声については「平和利用と核兵器は大きく違う」と述べ、是非には踏み込まない立場を強調。核兵器と原発などを同じ核問題ととらえる考え方とは一線を画した。

ただし組織委員会の鈴木達治郎委員長は「パグウォッシュ会議として最も関心が高いのは核拡散への影響。（使用済み核燃料からの）プルトニウムの分離については分科会で（やめるべきだという）合意を得た」と説明し、日本政府が計画する使用済み核燃料の再処理について疑問を呈した。

（原口司、蒼川裕之）

パグウォッシュ会議世界大会終了後、記者会見するダナパラ会長（右）ら　＝長崎市、やすらぎ伊王島（荒木勝郎撮影）

ヤング会議も声明

「平和的共存を」

国内外の若手研究者による「国際学生・ヤングパグウォッシュ会議」は5日、核兵器やテロ、紛争などのない平和的な共存を呼び掛ける声明を発表した。

ヤング会議は31人が10月30、31日に長崎市に集まり開催。パグウォッシュ会議世界大会にも参加し、被爆の実相に触れる中で声明作成の声が上がり、急きょまとめた。

声明は、安全保障上の脅威がこの10年間で広がっていることを懸念。長崎に集まった研究者は被爆証言に強い感銘を受けたとし、「（核兵器と戦争の廃絶を訴えた）ラッセル・アインシュタイン宣言の精神に基づいた未来を築くために一層努力する」と誓った。

5日の世界大会全体会議で、ヤング会議のカリム・カドリ代表が読み上げた。会議報告と共にホームページに近く掲載する。

実行委の榎本浩司さん(29)は「被爆者や長崎の学生と対話したことが声明作成の原動力になった」と語った。

（原口司）

国際学生・ヤングパグウォッシュ会議が声明を発表した全体会議　＝長崎市、やすらぎ伊王島（荒木勝郎撮影）

2015 年 11 月 6 日　長崎新聞 29 面（長崎新聞社提供）

(25) 全国 長崎新聞 2015年(平成27年)11月8日 日曜日 紙面編集・中村亮介

核兵器廃絶～パグウォッシュ会議の科学者に聞く　報道部・原口　司、蓑川　裕之

対話と信頼必要

ナガサキの視点

題字は被爆者の故・山口仙二さん

長崎市で5～9日に開かれた第61回パグウォッシュ会議世界大会は、35カ国・地域から科学者や専門家197人が被爆地に集結、被爆証言を聞き、核兵器と戦争の廃絶という目標に向けて議論を重ね、「長崎宣言」を発表し、閉幕した。

ジャヤンタ・ダナパラ会長に会議の役割などを尋ねたほか、大会期間中、「北東アジア非核兵器地帯」「核抑止力」のテーマで、核大国の米ロを含む各国の専門家に意見を聞いた。

核兵器をめぐって、世界は国家間の思惑が絡み合い、緊張が高まっており、廃絶には困難が続いている。その状況を踏まえた上で、同地帯の実現に向けて、専門家は関係国間の「対話」と「信頼構築」が不可欠との考えで共通していた。また、核兵器を廃棄させるために必要なこととして、核保有国と、周辺国との関係安定などを挙げた。

世界の科学者が核兵器と戦争をめぐり議論したパグウォッシュ会議世界大会全体会議＝5日、長崎市、やすらぎ伊王島（荒木勝彦撮影）

第61回パグウォッシュ会議世界大会「長崎宣言」　長崎市で開かれた大会最終日の5日に発表。宣言は注意喚起が必要な特別な場合に同会議評議会がとりまとめるもので、2005年の広島大会以来10年ぶり5回目。「長崎を最後の被爆地に」とのメッセージで始まり、世界の国々と市民社会、国際組織が連携し、核兵器の法的禁止を目指すよう呼び掛けた。核軍縮の行き詰まりなどへの危機感を表明。核保有国に核兵器廃絶の確約を迫り、日本など非保有国にも非核兵器地帯の創設など安全保障政策の変革を求めた。

「リスクゼロには廃絶しかない」

ジャヤンタ・ダナパラ会長(76)

パグウォッシュ会議の役割などを語るジャヤンタ・ダナパラ会長＝長崎市、やすらぎ伊王島（荒木勝彦撮影）

―パグウォッシュ会議の役割は。

各国政府に対話し、戦争、紛争、核兵器使用を防ぐことがメインの任務。冷戦時代は、米ソ間の対話の場をつくった。最近では、5月にアフガニスタン政府と反政府武装勢力タリバンとの対話の場をつくりあげた。今後も紛争を防ぐ活動を続けていく。

―米ロの問題を解決しないと、核兵器廃絶の道は見つからない。核兵器は国際社会全体の脅威を保有している。平和的な対話の場をつくり続けるものだ。

核保有国が核兵器を使用できるように準備していないということは、核の脅威を考えていないということになる。だからこそ核保有国と周辺国は、非人道的影響のキャンペーンを続けている。

核兵器は必ずリスクがある。何よりも人間が使うものなのでミスがある。テロリストも入手しようと狙っている。リスクをゼロとなくすには、廃絶しかない。米ロだけだなく、全ての核保有国に市民社会からプレッシャーをかけ、政策を変えさせなければいけない。

―東北アジアの核・和利用に対する考えは。

温暖化問題の観点では、核エネルギーはクリーンなエネルギー。スリーマイル島、チェルノブイリ、福島の原発事故があったが、それでも核エネルギーは必要だ。医療、農業でも核エネルギーに頼る部分がある。一番大事なのは安全、安全の責任を取るのは政府。各国には核エネルギーを使う権利があり、使うかどうかはその国が決めること。平和利用だけに使っているのか、核兵器への転用か、それを確かめるのは国際原子力機関（IAEA）だ。

日本の安全保障環境が不安定化する一つの要因は、北朝鮮の核武装化だろう。何らかの国際的な保障のある形で放棄させる仕組みづくりが必要で、北東アジア地域の非核兵器地帯化は日本を含む地域全体の利益になり、意義のあることだ。

日本を含む国際社会は、北朝鮮が国際的な規範をもっていないとして経済制裁を科してしまった。（北朝鮮の核開発を凍結するための枠組みだ）1994年の米朝枠組み合意も実を結ばなかった。背景には「約束しても守らないのでは」という相互不信がある。信頼構築と双方の利益が固立される大な対話ができるだろうか。金朝鮮は金正恩体制の存続が最大の問題だが、「過去の経緯から米国を簡単に信用できない国がある。特にリビアの問題が大きい。カダフィ政権は米欧と対立し米欧からテロ支援国家と指定されたが、2003年に核兵器を含む大量破壊兵器の放棄を約束し、国際原子力機関（IAEA）が査察を実施された。しかし11年に市民主化（アラブの春）で、北大西洋条約機構（NATO）が支援する反体制派に打倒されてしまった。金朝鮮が「核をひっつり返されるのでは」となる。

信頼関係が壊れれば、核兵器自体は脅威ではなくなる。まずは朝鮮が先に核兵器の問題は後で付いてくる。現状は厳しいが、地域全体の政治的緊張を緩和し相互信頼を構築することが必要で、その方向に向かって大きな日本は核を放棄すべきだ。

北朝鮮との関係構築が鍵

遠藤　誠治氏(53)　成蹊大法学部教授（国際政治学）

北東アジア非核兵器地帯

不信に満ちた世界情勢

趙　通氏(32)

カーネギー・清華グローバル政策センター研究員（中国）

現在、北東アジアの情勢は安定しているが、構成する各国は安全保障上の不安を抱えている。特に、日本と韓国は危機感がある。日韓の同盟国である米国はミサイル防衛（MD）に力をそそいでいるが、米国と政治的に距離を置く中国やロシアは自国が狙われていると認識。中国は核兵器の近代化を進めており、攻撃を回避するために地上基地への配備ではなく移動式にしている。

また中国と韓国は、日本に対し（使用済み核燃料から分離したプルトニウムによる）核拡散を心配している。

不信感に満ちた今の状態では、何も解決できない。まずは米ロと中国の主要核保有国で対話すべき。米国はMDの狙いを伝え、北朝鮮の核開発問題なども解決するかを一緒に考えてほしい。

いずれにしても、北東アジア非核兵器地帯実現の前提として、関係国のオープンな対話が不可欠だ。

弱い立場にいる北朝鮮

マーク・スー氏(69)

政治学者（韓国）

北朝鮮はなぜ、核兵器を持ち始めたのか。なぜ2003年に核拡散防止条約（NPT）脱退を表明したのか。その背景の一つには、朝鮮半島の戦争状態が続いていないということがある。北朝鮮は、今でも攻撃を受けるかもしれないと思っている。一方で、米国の自国を守るために、核兵器を持つという考えが生まれたのだ。

北朝鮮を一番刺激したのは、03年3月のイラク戦争開戦だ。米国はイラクを攻撃した。それは、自分たちも米国は攻撃してくるかもしれないという恐怖を北朝鮮に与えた。また「イラクは核兵器を持たないから攻撃されたのだ」と思っている。自国を守るために核兵器は必要として、製造に踏切った。国連を動かすためではない。米国や日本を脅かして持ち始めたのだ。

日米は朝鮮を敵として認めるべきなのか、対話なのかということを北朝鮮に始めてほしくない。国際コミュニティーの中で無視し、見ぎろしている。まず国連として認め、受け入れることが、それがションを落ち着かせ、雰囲気をやわらげる。

日本は世論の力強めて

小沼　通二氏(84)

慶応大名誉教授（素粒子物理）

「真の核軍縮の達成を目指すのであれば、私たちは、何よりも第一に核抑止という考え方を捨て、私たちの発想を根本的に転換することが必要である」

1995年のパグウォッシュ京都シンポジウムで発表された「核抑止を捨てよ」と題する通川・朝永宣言」の一節だ。核抑止は軍拡競争を引き起こす。「私たちは一貫して『核抑止による安全保障は成り立たない』と訴えてきた。だが世界には依然、核保有を容認する核抑止論にとりつかれている国がある。長崎大会でも核保有国の政府関係者から正当化する発言が相次いだ。国際の委員会で今月採択された核兵器禁止条約の禁止に向けた決議案に、米国の核抑止力依存する政策に矛盾するとして日本は賛成しなかった。核兵器は絶対に使ってはならないと国民が求めるべきなのか。本当に恥ずかしい。

「長崎宣言」では、核の傘に頼る国に非核兵器地帯の設定など安全保障政策の変革を求めた。世界に核の傘から抜け出す決意を示さなければ、日本の主張は説得力を持たない。世論で国を動かす、世論の力を強めなければならない。

核抑止力

「核兵器廃絶のために」と題するパネルの全体会議＝長崎市出島メッセ（荒木勝彦撮影）

非人道性だけでは駄目

アレクサンダー・ニキティン氏(57)

ロシア外務省欧州・大西洋安全保障センター所長

核兵器使用の影響については、情報的で人道に反するというとかすでに知られている。私たちが無視するわけにその影響が大きいということも、それも「インド、パキスタン、イスラエルなどを含む核保有国の一致協定案作成の考えは変わらない。だから人道的影響が、核兵器廃絶を考える上で大きな要素になるとは言えない。

核兵器を持つ国は核兵器を手放さないだろうと思うだ。核保有国はそれぞれ、政治的な理念を抱えているのだから、いずれも周辺国との関係が安定するまでは、核兵器を廃絶するよう説得することはできない。そこでいくらも、政治的問題の解決を進めることはできない。

一方で、テロや事故など、核兵器保有に伴う潜在的な危険リスクは考慮されるべきだ。

米ロの主張 大きな障害

ブルース・ブレア氏(67)

米プリンストン大研究員

世界の核兵器の大半を保有する国とロシアは即発足できる態勢を敷っており、互いに神経を尖っている。この状態が、核軍縮の大きな障害になっている。

1日の全体会議では、両国政府高官がいかに核軍縮を進めているかを語り、自国の立場を正当化した。米ロの関係は良くないのに、「廃絶を求める」ほかの国々を米ロ神経を逆なでするとしているように見えた。問題はライターの解決を進めたのでは足りない。核兵器の近代化を進めている。オバマ大統領は、核兵器のない世界を目指すのビジョンを示したが、実現機構の考えは、核兵器の使用を自国の安全保障の中で考えるキッカケに行き詰ることができていない。

私は核爆発を目撃した。いつも考える現場に来たいという気持ちになる。核兵器が「使い勝手のいい」と思ってしまうことを思い起こさせてくれる。そして核兵器廃絶をいう目標に立ち戻らせてくれる。

2015年11月8日　長崎新聞 25面（長崎新聞社提供）

科学者の発信力高めよ

パグウォッシュ

1957年、カナダの漁村パグウォッシュに世界の科学者22人が集い、核兵器の危険性や科学者の社会的責任について議論した。湯川秀樹、朝永振一郎も参加した会議のきっかけは、核兵器がもたらす地球規模の破壊を警告し、平和的手段による紛争解決を呼びかけた「ラッセル・アインシュタイン宣言」だ。

この流れをくむ「パグウォッシュ会議」の第61回会合が今月、長崎市で開催された。採択された「長崎宣言」は、「長崎を最後の被爆地に」と訴え、核兵器の法的禁止をめざすことを提言している。

戦後70年、会議を取り巻く環境は楽観できない。核拡散防止条約（NPT）再検討会議が決裂し、今月の国連総会の委員会でも核を持つ国と持たない国の溝が際立つなど、核廃絶の道は険しい。こうした世界情勢の中、科学者の集まりがどれほど影響力を持てるか、疑問を感じる人は多いかもしれない。

しかし、こういう時だからこそラッセル・アインシュタイン宣言の精神に立ち返り、科学者が担うべき役割を改めて考えることが大事だ。

今回は、「原子力の平和利用のリスク」も議題となり、原発の使用済み核燃料の再処理で生じた民生用プルトニウムが過剰に蓄積していることが論点となった。世界で長崎型原爆3万発分に相当するという。専門の作業グループでは核兵器に転用できるプルトニウムをこれ以上増やすべきではないとの見解で一致した。事実上、再処理中止の合意だ。

日本は英仏露に次いで多くの民生用プルトニウムを持ち、国内外あわせて47トンに上る。高速増殖原型炉「もんじゅ」も頓挫している今、青森県の再処理工場を動かせば余剰プルトニウムがますます増加する。

核廃絶のためにも再処理中止に向けた政治決断が必要だ。作業グループの合意を生かすためにも、科学者は再処理の高コストや核拡散のリスクを客観的データで繰り返し示すことで決断を後押ししてほしい。

日本では安全保障政策の転換により、政府が軍民両用技術を推進する動きもある。防衛省が大学などに支給する研究費はひとつの表れだ。初年度の今年、109件の応募があり9件が採択された。研究結果は公表されるというが、こうした研究費が結果的に科学者の政治利用、軍事利用に結びついていく恐れは否定できない。

「長崎宣言」は、現代科学技術が多くの分野で急速に進展する今、科学者の社会的責任はかつてないほど重大だと呼びかける。その責任を果たすには、科学技術が社会にもたらす影響を客観的に示し、国際世論に訴えていくことが重要だ。科学者ならではの発信力を高めてほしい。

2015年11月8日 毎日新聞 朝刊 5面

参加者リスト

本会議招待者　（195 名、 38 カ国）

参加者　137 名

来賓　20 名

事務局国外 2 名

事務局国内 5 名

国際学生・ヤングパグウォッシュ参加者　31 名

一般公開セッション参加登録者（招待者を除く）

123 名（11 月 1 日）

155 名（11 月 3 日）

報道機関登録数

20 社・機関　合計 120 名（報道機関内にはフリーランス 1 人を含む）

参加者（招待者）リスト

参加者　（137 名）＊印はパグウォッシュ会議評議員

Mr.	Ahmad	Wesam	Palestine
Prof.	Ahmadi	Hamid	Iran
Prof.	Akiyama	Nobumasa	Japan
Mr.	Al-Fatlawi	Salah	Iraq
Prof.	Arimoto	Tateo	Japan
Prof.	Bando	Masako	Japan
Mrs.	Baramki *	Haifa	Palestine
Prof.	Bartosch	Ulrich	Germany
Dr.	Barzegar	Kayhan	Iran
Amb.	Batsanov *	Serguei	Russia/Switzerland
Dr.	Blair	Bruce	USA
Dr.	Boutwell	Jeff	USA
Gen. (ret)	Brom	Shlomo	Israel
Dr.	Buckley *	Adele	Canada
Mrs	Butcher *	Sandra	USA
Prof.	Calogero *	Francesco	Italy
Prof.	Cassim	Monte	Japan
Mr.	Choi	Sungyeol	South Korea

Dr.	Clements	Kevin	New Zealand
Prof.	Cotta Ramusino *	Paolo	Italy
Amb.	Dhanapala *	Jayantha	Sri Lanka
Prof.	Dippenaar	Nola	South Africa
Mr.	Dong	Huy Cuong	Vietnam
Amb.	Duarte *	Sergio	Brazil
Prof.	Endo	Seiji	Japan
Amb.	Enkhsaikhan	J.	Mongolia
Dr.	Franchoo	Serge	France
Dr.	Fujigaki	Yuko	Japan
Mr.	Gilinsky	Victor	USA
Dr.	Goldewijk	Berma Klein	Netherlands
Mr.	Guinnessy	Paul	UK
Mr.	Guthrie	Richard	UK
Dr.	Ha	Thanh Toan	Vietnam
Dr.	Hallberg *	Karen	Argentina
Dr.	Harries	David	Canada
Mrs.	Hassouna *	Anissa	Egypt
Prof.	Hirose	Satoshi	Japan
Mr.	Hong	Hyung Taek	South Korea
Prof.	Hwang	Il-Soon	South Korea
Prof.	Ikegami	Masako	Japan
Prof.	Inagaki	Tomohiro	Japan
Maj.	Iqbal	Javed	Pakistan
Prof.	Itagaki	Yuzo	Japan
Mr.	Iwata	Wataru	Japan
Prof.	Jacob *	Happymon	India
Amb. Dr.	Jargalsaikhany	Enkhasaikhan	Mongolia
Mr.	Jenkins	Peter	UK
Dr.	Johnson	Rebecca	UK
Prof.	Jonter	Thomas	Sweden
Dr.	Journé *	Venance	France
Amb.	Kamaldinov	Akylbek	Kazakhstan
Rev.	Kamiya	Masamichi	Japan

Dr.	Kamyshanov	Victor	Russia
Dr.	Kang	Jungmin	South Korea
Mr.	Karakullukcu	Memduh	Turkey
Prof.	Katamine	Shigeru	Japan
Prof.	Kataoka	Katsuko	Japan
Mr.	Kato	Tomohiro	Japan
Mr.	Kawai	Kimiaki	Japan
Mr.	Kawasaki	Akira	Japan
Amb.	Khan	Aziz Ahmad	Pakistan
Dr.	Kibaroglu *	Mustafa	Turkey
Lt.Gen. (ret)	Kidwai	Khalid	Pakistan
Dr.	Kikuchi	Masahiro	Japan
Mr.	Kim	Won-soo	South Korea
Dr.	Kinoshita	Moto-yasu	Japan
Prof.	Kolesnikov	Sergey	Russia
Hon.	Kono	Yohei	Japan
Prof.	Konuma	Michiji	Japan
Prof.	Kurokawa	Kiyoshi	Japan
Dr.	Kurosaki	Akira	Japan
Prof.	Kurosawa	Mitsuru	Japan
Dr.	Lenci *	Francesco	Italy
Mr.	Leventis	Yiorghos	Cyprus
Amb.	Limbert	John	USA
Mr.	Lodgaard *	Sverre	Norway
Prof.	Lotfian *	Saideh	Iran
Mr.	Luethold *	Arnold	Switzerland
Prof.	Maskawa	Toshihide	Japan
Prof.	Matsuda	Masahisa	Japan
Mr.	Mauro-Todd	Dominic	Italy
Dr.	Menashri *	David	Israel
Amb.	Meyer	Paul	Canada
Dr.	Miller *	Steve	USA
Mr.	Mirzatillaev	Anvar	Kazakhstan
Amb.	Mohmand	Rustam Shah	Pakistan

Dr.	Mukai	Wakana	Japan
Ms.	Murata	Aya	Japan
Prof.	Nakamura	Keiko	Japan
Prof.	Natvig	Bent	Norway
Prof.	Nayyar	Abdul	Pakistan
Dr.	Neuneck *	Goetz	Germany
Prof.	Nikitin *	Alexander	Russia
Prof.	Ohnishi	Hitoshi	Japan
Prof.	Okamoto	Ryoji	Japan
Dr.	Ota	Masakatsu	Japan
Gen. (ret)	Pan *	Zhenqiang	China
Dr.	Parkhalina	Tatiana	Russia
Prof.	Petersen	Arthur	Netherlands
Prof.	Rajaraman *	Ramamurti	India
Dr.	Ramana	M.V.	India
Dr.	Ramirez	Martin	Spain
Dr.	Rózsa	Erzsébet	Hungary
Amb.	Saghafi-Ameri	Nasser	Iran
Mr.	Samo	Elias	Syria
Prof.	Sauer	Tom	Belgium
Prof.	Sawada	Shoji	Japan
Dr.	Shimomura	Osamu	Japan
Prof.	Shirabe	Susumu	Japan
Dr.	Sigal	Leon V.	USA
Ms.	Simonen *	Katariina	Finland
Dr.	Simons *	Jennifer Allen	Canada
Amb.	Soltanieh	Ali Asghar	Iran
Ms.	Squassoni	Sharon	USA
Dr.	Suh *	Mark	South Korea / Germany
Prof.	Suzor-Weiner	Annick	France
Dr.	Suzuki *	Tatsujiro	Japan
Prof.	Takahara	Takao	Japan
Dr.	Takahashi	Hiroko	Japan
Prof.	Takhshid	Mohammad Reza	Iran

Mr.	Takubo	Masafumi	Japan
Dr.	Tomonaga	Masao	Japan
Amb.	Trezza	Carlo	Italy
Gen.	Trubnikov	Vyacheslav	Russia
Dr.	Umebayashi	Hiromichi	Japan
Prof.	Usuki	Akira	Japan
Dr.	von Hippel	Frank	USA
Dr.	Watson *	Christopher	UK
Prof.	Yagasaki	Katsuma	Japan
Prof.	Yamazaki	Masakatsu	Japan
Prof.	Yoshida	Fumihiko	Japan
Prof.	Yoshikawa	Hiroyuki	Japan
Prof.	Yoshino	Taro	Japan
Mr.	Yusuf *	Moeed	Pakistan
Dr.	Zanders *	Jean Pascal	Belgium
Amb.	Ziaran *	Bozorgmehr (Reza)	Iran
Dr.	Zohar *	Aharon	Israel

来賓　(20 名)

Mr.	Asato	Daiki	Japan
Mr.	Fedkiw	Yuriy	USA
Ms.	Friedt	Anita	USA
Mr.	Hajizadeh	Nader	Iran
Amb.	Kamaldinov	Akylbek	Kazakhstan
Mr.	Kangarloo	Majid	Iran
Mr.	Kikawada	Hitoshi	Japan
Mr.	Masujima	Sho	Japan
Mr.	Murakami	Kenjyu	Japan
Hon.	Nakamura	Hōdō	Japan
Mr.	Narendra	Blake	USA
Mr.	Rezaei	Ali Akbar	Iran
H.E.	Salehi	Ali Akbar	Iran
Mr.	Saruhashi	Hiroyuki	Japan
Ms.	Schroeder	Linh	Switzerland

Mr.	Tajik	Majid	Iran
Hon.	Taue	Tomihisa	Japan
Mr.	Ulyanov	Mikhail	Russia
Mr.	Yamawaki	Yoshiro	Japan
Mr.	Zanjani	Hossein	Iran

事務局国外　(2 名)

Ms.	Vaughn	Claudia	USA
Mrs.	De Santis	Mimma	Italy

事務局国内　(5 名)

Ms.	Sugiyama	Mayumi	Japan
Mr.	Hirata	Tomoyoshi	Japan
Ms.	Kobayashi	Yoko	Japan
Ms.	Ishida	Erika	Japan
Mr.	Okabe	Yoshinobu	Japan

国際学生・ヤングパグウォッシュ参加者　(31 名)

Ms.	Barannikova	Anastasia	Russia
Mr.	Christiansen	Poul-Erik	UK
Mr.	Enomoto	Koji	Japan
Mr.	Friedman	Ezra	Israel/USA
Ms.	Hansen	Emma	Canada
Mr.	Harrington	Cameron	Canada
Prof.	Higuchi	Toshihiro	Japan
Mr.	Horio	Kenta	Japan
Mr.	Ide	Kentaro	Japan
Ms.	Javan Shahraki	Maryam	Iran
Mr.	Jiang	Tianjiao	China
Mr.	Kadry *	Karim	Egypt
Dr.	Korzun	Petr	Russia
Mr.	Kuett	Moritz	Germany
Dr.	McGarry	Meghan	USA
Mr.	Miletic	Kevin	Switzerland/Croatia

Ms.	Mulas	Roberta	Italy
Ms.	Paracha	Sobia	Pakistan
Dr.	Peczeli	Anna	Hungary
Ms.	Pekar (Bilezikci)	Cigdem	Turkey
Dr.	Rouhi	Mahsa	Iran
Mr.	Rusek	Benjamin	USA
Mr.	Sankaran	Jaganath	India
Mr.	Schofield	Joseph	USA
Mr.	Shabani	Mohammad Ali	Iran / Sweden
Ms.	Sharma	Ananya	India
Ms.	Theobald	Silene	France
Ms.	Tsamados	Alexandra Agnes	Greece
Mr.	Weyers	Till	Germany
Prof.	Yakushige	Yoshihiro	Japan
Mr.	Zhao	Tong	China

付録

付録

Nagasaki Declaration of the Pugwash Council.....115
Statement of the Pugwash Council 117
2015 International Student/Young Pugwash Vision Statement: The Nagasaki Call for Action....122
河野洋平（日本パグウォッシュ会議諮問評議会委員）晩餐会スピーチ全文 123
吉川弘之（日本パグウォッシュ会議諮問評議会議長）晩餐会スピーチ全文 126
ラッセル・アインシュタイン宣言 132
広報資料 135

Nagasaki Declaration of the Pugwash Council

"Let Nagasaki be the last." Seventy years after the destruction of Hiroshima and Nagasaki, we are still faced with the imminent dangers posed by thousands of nuclear warheads. Atomic bomb survivors (Hibakusha) are on average above 80 years old. To this day they suffer from the effects of the nuclear attacks that devastated their lives. The Pugwash Council hears the voices of the Hibakusha calling for the abolition of nuclear weapons. We urge world leaders to heed their call now.

The menace of nuclear weapons is still growing. Nuclear disarmament is stalled. Conflicts are multiplying. Stockpiles of weapon-usable materials are increasing worldwide. The risks of intentional or accidental nuclear weapons use will always exist until nuclear weapons are legally banned and eliminated and weapon-usable materials are disposed of safely.

All states with nuclear weapons must abandon nuclear-weapon system modernization programs. They should spend the billions of dollars earmarked for those programs on minimizing nuclear risks, preventing accidental launches and cyber attacks, and promoting disarmament. Most importantly, they must commit themselves not only to reduce but also to eliminate nuclear weapons. The speedy Entry-Into-Force of the Comprehensive Nuclear-Test Ban Treaty is essential. Non-nuclear-weapon states that depend on extended nuclear deterrence also must support nuclear disarmament and change their security policies, for example by joining or establishing Nuclear-Weapon-Free Zones.

Current international disarmament and non-proliferation fora, such as the nuclear Non-Proliferation Treaty (NPT) review process as well as the Conference on Disarmament (CD), are important but also have shown limitations. Global initiatives aimed at legally banning nuclear weapons through coalition among states, civil society, and international organizations can play a significant role in eliminating nuclear threats.

The 2011 Fukushima nuclear disaster reminded us of the importance of nuclear safety and the containment of nuclear technology risks. Modern technology is progressing rapidly in many fields. Without sufficient attention paid to its ultimate effects on humanity, further dangers may arise. The social responsibility of scientists is perhaps today more critically important than ever.

"Dialogue across divides" is the spirit of the Pugwash movement. Regional tensions that might trigger nuclear conflicts should be addressed through diplomatic measures. All parties must avoid military conflicts at all costs. Unless

war is eventually eliminated, the survival of human beings will continue to be threatened by present and new generations of weapons of mass destruction. We reiterate the essence of the Russell-Einstein Manifesto, we must abolish nuclear weapons and ultimately eliminate war itself from our planet.

Human beings cannot survive without a strong sense of morality and ethics. It is crucially important that the experiences of the Hibakusha from Hiroshima, Nagasaki, and nuclear test sites around the world should be transferred to the next generation. As long as nuclear weapons and other weapons of mass destruction exist, their catastrophic consequences cannot be avoided. Recalling the Russell-Einstein Manifesto, sharing the voices of Nagasaki citizens and Hibakusha, standing in the middle of this city with its deep-rooted memory of devastation under the mushroom cloud, the Pugwash Council appeals again as human beings to human beings, “Remember your humanity, and forget the rest.”

Statement of the Pugwash Council

Seventy years after the city of Nagasaki was obliterated by nuclear attack, the voices of the atomic bombing survivors (Hibakusha) resolutely call for nuclear abolition. The message of hope emanating from this city inspires people worldwide to work without delay to forge a more peaceful world free of nuclear weapons. Sixty years ago the would-be founders of the Pugwash movement released the Russell-Einstein Manifesto. Twenty years ago, the Pugwash Conferences on Science and World Affairs and one of its founders, Joseph Rotblat, received the 1995 Nobel Peace Prize "for their efforts to diminish the part played by nuclear arms in international politics and, in the longer run, to eliminate such arms."

In recognition of these anniversaries and on the occasion of the 61st Pugwash Conference in Nagasaki, Pugwash provided its Nobel symbols of peace to the people of Nagasaki and Hiroshima, and especially to the Hibakusha, as proof that the international community has heard their calls for peace and the abolition of nuclear weapons and to show that even in the darkest of times, dialogue across divides can help to build a more peaceful and less dangerous world.

To further commemorate these important anniversaries, the Pugwash Council issued the "Nagasaki Declaration" which concludes: "As long as nuclear weapons and other weapons of mass destruction exist, their catastrophic consequences cannot be avoided. Recalling the Russell-Einstein Manifesto, sharing the voices of Nagasaki citizens and Hibakusha, standing in the middle of this city with its deep-rooted memory of devastation under the mushroom cloud, the Pugwash Council appeals again as human beings to human beings, 'Remember your humanity, and forget the rest.' "

The Pugwash Council reaffirms that raising awareness of the humanitarian impacts of nuclear weapons use remains one of the key elements in promoting nuclear disarmament. One hundred and twenty one States have supported or endorsed the Humanitarian Pledge that calls for world leaders to "pursue effective measures to fill the legal gap for the prohibition and elimination of nuclear weapons" and calls on "all nuclear weapons possessor states to take concrete interim measures to reduce the risk of nuclear weapon detonations." However, the humanitarian call alone cannot succeed, it must be supported by pain-staking efforts in real verifiable disarmament. The Pugwash Council urged governments to remain seized on these topics, including by convening the planned fourth intergovernmental meetings on the humanitarian impact of nuclear weapons as soon as possible.

Similarly, steps should be taken to prevent the further spread of weapons of mass destruction, and to universalize the nuclear Non-Proliferation Treaty, the Chemical Weapons Convention, and the Biological Weapons Convention, and to severely reduce the salience of nuclear weapons, pending the multilateral negotiation and adoption of effective measures of nuclear disarmament. Most importantly, states possessing nuclear weapons must make significant progress to achieve nuclear disarmament as called for in Article VI of the NPT, the current pace of which could undermine the confidence on this important treaty by non-nuclear states. The US and Russia carry a special responsibility to reduce their overwhelming arsenals drastically. Pugwash is fully committed to facilitate in all possible ways the entry into force of the CTBT. The CTBT is an essential instrument in the preservation of the non-proliferation regime and ultimately in the future elimination of nuclear weapons. Safe management and disposal of weapon-usable materials is another important issue. In particular, stockpiling of plutonium, including civilian materials, should be stopped as soon as possible and then reversed.

Regional conflict and tensions in areas where nuclear weapons are present must be addressed. With a few notable exceptions, the world suffers from a shortage of negotiated restraint, with a growing gap between what is desirable and what is achieved. Pervasive problems of mistrust must be overcome through implementation of confidence building measures. The importance of constructive dialogue, especially interaction and communication between troubled states, remains of paramount importance. Those regimes and agreements that exist to limit weapons of mass destruction and military and dual-use technologies, must be strengthened, expanded and created where gaps exist, including strengthening provisions for addressing violations. Massive migration, which is generated by conflicts and deprivation, has a profound impact on security. If not urgently and adequately addressed with all due responsibility and humanism, it may lead to the proliferation and deepening of divides and the degradation of societies.

In various regions significant challenges exist. A new and forward-looking dialogue between Russia and NATO and among the wider Euro-Atlantic community is needed to overcome the current deadlock, to continue with talks on reliable steps for nuclear and conventional arms control and to find new ways for a sustainable security architecture. The rise of extremism poses additional challenges, particularly in the Middle East. The Syrian crisis demands immediate focus of the

global community. The Pugwash Council condemns the ongoing use of chemical weapons in all its forms in the Syrian civil war, as repeatedly confirmed by the United Nations and the Organisation for the Prohibition of Chemical Weapons since 2013, and demands the immediate cessation of chemical warfare in any form. The situation in Palestine remains untenable - serious negotiations on the two-state solution are the only real solution. Most urgently, it is imperative to find structural and sustainable solutions to the urgent humanitarian crisis in Gaza, which should be opened up and the international community should be allowed, without any impediment, to intervene and help in reconstruction. Reconciliation and confidence-building measures are necessary to counteract rising nationalism in Northeast Asia and to provide essential underpinnings for improved security. In South Asia, India and Pakistan must immediately resume, and sustain, a meaningful dialogue on all issues of bilateral importance, including Kashmir and terrorism. Dialogue among all parties is essential and urgent to secure a peaceful future for Afghanistan. The Pugwash meeting held 2-3 May 2015 in Qatar, with the support of the Qatari Government, shows that inter-Afghan dialogue is possible and in fact necessary to bring peace in that troubled region.

Steps to decrease nuclear tensions in various regions are needed:

- On the positive side, the Pugwash Council strongly welcomed the 14 July 2015 Joint Comprehensive Plan of Action on the Iranian nuclear program. The agreement strengthens the Non Proliferation Treaty, and contributes in important ways to security and stability in the Middle East region. The historic agreement reached between Iran and the six powers proved that cooperation, including on highly technical matters, can contribute toward increased stability. Pugwash worked intensely over the years to facilitate and promote this agreement. It is important that its full implementation by all parties will proceed smoothly, including by removing the sanctions, as specified in the JCPOA. Promoting further progress during the implementation phase of this agreement and beyond will continue to be high on the Pugwash agenda.
- On the negative side, failure to date to convene the Middle East WMD Free Zone conference continues to have negative reverberations. This issue must not fall from the international agenda as it affects not only the region but also raises into question broader issues regarding the NPT Review Process.
- Disarmament, arms control and non-proliferation steps between the US and Russia

needs further action on a range of issues, including ballistic missile defense, nuclear modernization, and the need to reaffirm, reinstate or expand existing agreements and security architectures. Urgently, US nuclear weapons in Europe should be removed, a norm should be established against basing nuclear weapons on foreign soil, and more transparency in the existing stockpiles (including of so-called tactical nuclear weapons in Russia) is overdue. Propagandistic language on both sides especially concerning the threat or deployments of new nuclear weapons in Europe must end, as well as the deployment of new combat forces or large-scale military maneuvers. The Pugwash Council expresses its concern about the on-going controversy with regard to the INF Treaty and calls upon Russia and the US to engage in an honest dialogue with the purpose of strengthening this treaty, including the possibility of extending its scope to sea-launched cruise missiles.

- India and Pakistan remained locked in a crisis prone relationship. India and Pakistan should work actively towards conflict resolution and avoid a strategy relying on "early use of nuclear weapons". There is an urgent need for them to devise a permanent mechanism that allows them to communicate and cooperate immediately in the wake of any incident that has the potential to trigger a crisis. Both countries must also ensure that their nuclear arsenals always remain under the tight control of their respective Nuclear/National Command Authorities. Simultaneously, efforts are needed to mainstream both countries into the global non-proliferation regime.
- Confidence building and crisis management among Japan, China and the two Koreas is needed. The increasing tendency to taking recourse to the idea of military 'deterrence' should be discouraged since this can fuel a regional arms race. Interpretation of history issues and items in the nuclear field such as the Japanese plutonium stockpile, the strategic intentions of China's nuclear weapons program, and the transparency of China's nuclear material are topics for consideration.
- A moratorium on DPRK nuclear testing and/or missile tests with a reciprocal constraint on a US-ROK joint military exercises might open the way to broader normalization efforts, including bilaterally between the US and DPRK. Further steps to denuclearize the Korean Peninsula will require a comprehensive approach as envisioned in the 2005 six-party joint statement. Negotiation of a Northeast Asia Nuclear-Weapons Free Zone, which would be ratified only when

North Korea joins, could serve as a catalyst and legal framework for deconflictization and denuclearization of the Korean Peninsula.

- International cooperation and further dialogue is needed on civilian nuclear energy, energy resources and international cooperation. The Fukushima accident is not over. More than 100,000 persons still cannot return to their homes. Some will never be able to do so. Governments should present the public a more honest evaluation of the possibilities of accidents and the long term health and humanitarian impacts. Up to now, the benefits of nuclear power have been overstated, the costs understated. In view of the potentially enormous cost of an accident, the Pugwash Council recommended caution in starting new nuclear power programs or expanding existing ones. Countries should first seek alternatives, including in dealing with climate change. Nuclear safety and security cannot be considered any longer as exclusively internal affairs of countries concerned.
- Reprocessing to separate plutonium should end in all countries, including all nuclear weapon countries, whether for energy or weapon purposes. All use of highly enriched uranium in nuclear energy programs should end. In view of the international security consequences of fuel cycle decisions, countries need to mutually agree to restrictions on their national sovereignty in making nuclear fuel cycle decisions.

Scientists with the relevant expertise should communicate reliable information with involved politicians, policy-makers, and diplomats in the context of crises, emerging technologies, and existing risks. The promotion of research and the exchange of different views remain vitally important. Action in two such areas are particularly important: 1) There is a need for the creation of a legal norm against lethal autonomous weapons systems (LAWS) and related technologies, and 2) Parties to the 1967 Convention on Outer Space should meet in 2017 (50th anniversary) and agree to further regular review meetings, with a view to creating a forum for discussions on preventing the weaponization of outer space.

Finally, the Pugwash Council Pugwash supports the call from the International Student/Young Pugwash leaders assembled in Nagasaki, urging Pugwash and the broader disarmament community to help engage, encourage, and embolden young people to take an active role in solving the difficult international security problems we all face. Awareness, education, and intergenerational dialogue are critical aspects of achieving a world free of nuclear weapons.

2015 International Student/Young Pugwash Vision Statement: The Nagasaki Call for Action

In 2005 International Student/Young Pugwash (ISYP) issued its vision statement in Hiroshima: "Mission possible: engaging a new generation." Ten years later, and sixty years after the Russell-Einstein Manifesto, ISYP reiterates its call for peaceful co- existence in the face of the uncertainty of the contemporary age.

Over the past decade the world has seen the spread of conflict and risk. Regional stability is elusive in many parts of the world. Military conflicts continue to rage in volatile areas. Nuclear proliferation remains a real threat and disarmament still appears a distant goal. Terrorist attacks around the world continue and are increasing in sophistication and brutality. Technological advancements have made it easier to wage war. Climate change continues to accelerate.

Despite these grave challenges, we remain committed to creating a world free from the dangers of nuclear weapons, weapons of mass destruction, terrorism and war. It is more important than ever to bring young people from around the world together in the pursuit of peace. ISYP prepares a new generation of leaders to handle the challenges that they will inevitably face in an increasingly interconnected, complex world. ISYP conferences continue to provide a dynamic platform where young people can meet across national and ideological divides to discuss, debate, and disseminate innovative ideas and solutions to long standing disputes. We call on Pugwash and the broader disarmament community to help ISYP engage, encourage, and embolden young people to take an active role in solving the difficult international security problems we all face.

In Nagasaki we have met with the Hibakusha, the Japanese survivors of the atomic bombings. We are inspired by their hope for the future in the face of great challenges and their commitment to sharing their experience with the world. We have also engaged with the young generation committed to keeping the message of the Hibakusha alive. Their optimism and creativity have inspired ISYP to strengthen its voice in the Pugwash community and redouble its efforts to create a future built on the spirit of the Russell- Einstein manifesto. Here in Nagasaki, the last city to experience a nuclear weapon attack, it is clear to us that we must always remember our humanity and forget the rest.

河野洋平（日本パグウォッシュ会議諮問評議会委員）晩餐会スピーチ全文

はじめに

パグウォッシュ会議世界大会に出席のため、世界中から長崎にお集まりの錚々たる顔ぶれの皆様の前で、私がお話しするのは誠に恐縮ですが、指名をいただいたことに根拠があるとすれば、それは 21 年前に日本の外務大臣として、国連に核兵器廃絶決議案を提出するイニシアチブをとったことにあるのではないかと思われます。この決議案は 150 カ国以上の国々の賛成を得て採択され、以後毎年、日本政府により同様の決議案が提出され、採択されています。

もっとも、未だにこの決議案を提出しなければならないということは、核廃絶が実現していないということであり、それは残念なことでもあるわけです。今夕は、核軍縮と平和の問題に関して短いお話しをさせていただきます。

1. 核の脅威への理解を広める

「ラッセル・アインシュタイン宣言」の肝は、一つには「核兵器の危険の実相について、科学者はそれを世界の人々に知らせなければならない」ということです。そして、もう一つは「冷戦構造の陰で世界には紛争の原因があふれている。戦争は全面核戦争に拡大する危険があり、核による破滅を防ぐには戦争を廃絶しなければならない」という点であると要約できます。

宣言は第五福竜丸事件のあとに出されたものであり、核兵器の危険は爆発力だけではなく、放射能の拡散による生命の危機の問題であると言及していました。わが国は 2011 年に福島で原子力発電所の大事故を引き起こしており、この問題について深刻に考えなければならない立場にあります。

今回の大会ではまさに今日の午後、長崎大学を会場に、福島の事故について国会の事故調査委員会の委員長を務められた黒川清先生も参加してのセッションが行われたとうかがっております。私は北京からこちらに向かう途上で参加できませんでしたが、ぜひ記録を読ませていただきたいと考えております。

パグウォッシュ会議には、原子力の平和利用について様々なお考えの方が参加しておられると承知しておりますが、私自身は、福島の事故を契機として、ドイツが脱原発を決めたことに大いに注目しています。コストを払っても、いまだに最終処分のメドも立っていない放射性廃棄物を出さずに済むこと、事故により放射能を大気中に拡散させるリスクがゼロになるといった魅力のある選択肢だからです。

核戦争の脅威について多くの人々に体感していただく上では、ここ長崎、そして広島という日本の二つの都市を訪問していただくことが、効果的な方法の一つであると思います。2008 年 9 月、私は衆議院議長としてG8 下院議長会議を広島で開催しましたが、そこでは原爆資料館訪問や被爆者の体験を聴くことにより受けた感銘に後押しされてか、会議の結論と

して「核のない世界を目ざす」という点について、アメリカのペローシ下院議長（当時）も含む８カ国とＥＵの議長９名全員が合意しました。私は、これが翌年のオバマ大統領のプラハにおける核廃絶演説とノーベル平和賞受賞につながった一つの要因であると信じております。

本年のＮＹにおけるＮＰＴ再検討会議において、中東の非核地帯化をめぐる問題で合意が成立せず最終文書の採択に至らなかったように、最近はイランと欧米がやっと合意に漕ぎ着けたこと以外は、核軍縮・核軍縮をめぐる情勢には厳しいものがあります。核兵器保有国がＮＰＴの条約で約束している核軍縮に向けての努力をしなければ、核兵器を違法とする国際条約を求める意見は勢いをますでしょう。また、わが国としてインドのようにＮＰＴのワクの外で核兵器を開発した国との間で、安易に原子力協定を締結しＮＰＴ体制に打撃を与えるようなことは、慎重に避けるべきであると考えます。

2. 戦争の廃絶

ラッセル・アインシュタイン宣言が強く主張している戦争の放棄についても、「イスラム国」を名乗る集団の問題、シリア内戦の長期化などによる大量の難民、国内避難民の発生、ウクライナ東部の状況など、世界の現状は非常に厳しいと言わざるを得ません。

私は、戦争の廃絶に向けて、近年ふたたび強まっている「問題を軍事力で解決しようとする風潮」を改めることが必要であると思います。そして、もう一つは故ハンティントン教授の『文明の衝突』のような、宗教や文化の相違が必ず衝突に至るといった発想を脱却し、あらゆる人々が、異なる民族的帰属や異なる文化の下に暮らす人々が、お互いを尊重し、協力関係を育てていくことが重要であると思います。

意見の対立は同じテーブルについて対話し、話し合いで解決する。その基本に立ち返るべきです。シリアをめぐって、それぞれの思惑で介入しているアメリカとロシアの間に話し合いの気運が見られることは歓迎すべきで、関係各国は国連のデミストラ特使が示した「テロリズムに勝つには政治的なプロセスも必要で、武力だけでは問題は解決しない」という指摘を重く受け止め、アサド政権と反政府勢力との対話再開の優先を求める呼びかけに真摯に応じてほしいと思います。

2001 年 9 月 11 日に米国内で引き起こされた「同時多発テロ」事件の際に、当時のローマ法王・ヨハネ・パウロ二世は「力による報復は控えるべきだ。それは報復の連鎖を生み出す」と警告を発しました。もしあの時、アメリカの大統領が、世界の指導者たちが、このことばをもっと重く受け止めていたら、今日の世界は全然違ったものになっていたであろうと考えると残念でなりません。

わが国は 1976 年以来続けてきた「武器を原則輸出しない」という政策を安倍政権の下でやめてしまいました。さらに、昨年夏には「集団的自衛権は行使できない」としてきた歴代内閣の憲法解釈を変更すると表明し、この夏にはアメリカ軍等の後方支援活動を積極化し、

自衛隊の海外での活動における武器使用の制限を大幅に緩和するなどの内容を含む法案を、半世紀ぶりと言われた大きな抗議行動を無視して成立させました。また、いまや世界中どこを見てもアメリカ軍の新しい基地を建設する動きなどない中、沖縄の美しい自然を破壊して大型艦が接岸できる米海兵隊の新基地の建設を強行しようとしています。

私は、残念ながら今、日本政府が進めようとしているこうした政策の方向性は「戦争の廃絶」という人類が進むべき方向に沿ったものになっていないのではないかと残念に思っています。これらの政策は「中国の脅威」を口実に進められる傾向が見られます。例えば中国の急速な軍事費拡大が言われますが、わが国も 1970 年代から 1980 年代にかけ、防衛費を 1 兆円台から 4 兆円台に 4 倍増した時期があったのです。これはどちらも「経済の急速な成長に比例して」という側面があることを指摘しなければなりません。

先日、ユネスコが中国政府提案の 1937 年の日本軍による南京虐殺事件に関わる文書を「世界記憶遺産」に登録したことについて、日本政府は強く抗議し、官房長官が会見でユネスコへの拠出金削減の検討に言及しました。私はこうしたけんか腰、またリビジョニストではないかと疑われるような姿勢は、地域の平和に貢献しないし、わが国が尊敬を得ることにつながらないと思います。私はむしろ中国に対し「わが国も南京事件は遺憾な事件と考えており、決して繰り返してはならないと考えています。同じ考えに立つ国同士として、世界記憶遺産登録について共同作業したい」と申し入れるべきではないかと考えます。

3. むすび

中国、韓国とは「こちらとあちらは敵対している。パワーゲームに勝たねば」と考えるような発想はやめ、領土問題にせよ、「慰安婦問題」などの歴史問題にせよ「これはお互いにとって解決しなければならない問題であり、一緒に力を合わせて解決しよう」という発想で、とにかくテーブルに就き、話し合っていくことを求めたいと思います。

このスピーチでは、核軍縮交渉をめぐる技術的な問題や、近年の軍縮問題の焦点であるドローンや、ロボットの問題には触れませんでした。しかし、ディナーを前にあまりの長話は避けるべきと考え割愛することをご了承願います。

今次パグウォッシュ世界大会は、この夕食会で中盤までのスケジュールを終え、後半に入っていくということだと思います。核軍縮を前進させる推進力は国際世論の盛り上がりです。その大きな一端を担う今大会の後半が、一段と盛り上がり、大きな成果を産み出すことを祈念いたしまして、私のお話のしめくくりとさせていただきます。

ありがとうございました。

吉川弘之（日本パグウォッシュ会議諮問評議会議長）晩餐会スピーチ全文

Dinner speech on 4th November 2015 by Hiroyuki Yoshikawa

The 61st Pugwash Conference on Science and World Affairs, 1-5 November at Nagasaki

Dear Pugwashites, Distinguished guests, Ladies and Gentlemen,
It is an honour and pleasure that I have an opportunity to speak at dinner of Pugwash Conference 2015 at Nagasaki. Frankly, I am a new comer to the Pugwash conference, but today, I will talk my thought about the necessary role of scientists in Pugwash.
The topic I would speak is big threats that confront human beings presently. And cooperation of scientists necessary for fighting against them will be discussed. By scientists I mean all fields which include social sciences and humanities.
Let me start with taking up three categories of big threats to closely connected to science which exist in front of human beings to be overcome urgently. The first is the possible recent aggravation of natural disaster caused by geological changes within the earth, such as earthquake, tsunami, eruption (volcano), flood, drought, and storm: now their aggravations are observed worldwide. The second is the global warming or change of meteorology. And the last is the nuclear weapon. This sequence, from the first to the last corresponds to the amount of respective scientific knowledge necessary for fighting against the threat.
These three are all horrible threats to human beings, but have different character. Consequently, means to overcome them must be different each other.
When we look at the threats due to geological changes, we may remember long history of human beings attacked by them, and at the same time the processes how they conquered the cause of those threats. We may call them “evils”, who gave threats and actually attacked human beings. Present threats due to the unexpected geological changes, such as earthquake belong to this category. Presently intensifying natural disasters are caused by enlarging geological changes. It is the result of enlargement of some evils which have been observed in the past.
Those evils were strong and almost destroy humankind, but it fought against evils and successfully conquered them. Humans were weak but enough wise to beat them. A typical example is the Black Death, or the pest. After fighting for a long time under the wrong hypotheses, medical specialists finally identified a particular bacterium as the cause of the disease, and stopped the infection. This fight was

not only successful but also created new knowledge, namely a discipline- 'microbiology' - which has developed subsequently into modern life science. Knowledge acquired through fights against storm and earthquake has converged into Meteorology and Seismology and further, derived engineering knowledge such as architectural engineering and civil engineering which are necessary to build durable buildings.

By conquering different evils in history, humans accumulated huge amount of knowledge and systematised it as scientific knowledge which is educated through generations and can be used anytime.

Present problems are the change of the scale or dimension of disaster; bigger earthquakes, harder tornados, and higher tsunamis, and so on, which devastate human society especially in the excessively artificialized areas. We have already started to revise the safety standards for constructions for the swelling disaster. In short, we already know how to develop our knowledge to confront the present threats of first category.

Now, let us go into the second category. That is the global warming in modern age. Of course it is a kind of natural threats. But this is absolutely different from the past threats we have discussed just before.

The historical past threats were brought by some Evils who existed visibly. They were diastrophism, abnormal wind, seabed slip and bacterium. Those evils were definitely due to natural phenomena which were outside and sometime uncontrollable, but whenever humans realise and identify the outside evils, they could technologically eliminate or avoid them.

On the contrary, we cannot find any visible outside enemy when we struggle against the global warming. In 1970s, scientists in meteorology had discovered the cause of average temperature rise of the earth surface. It was due to the increase of carbon-dioxide content of the air.

At this stage, we could say that the evil which attacked humans by rising the global temperature was the increase of carbon- dioxide. However, where is the enemy we should fight against? Scientists have also discovered the evidence that the increase of carbon dioxide is the exhaustion which was emitted as the result of human activity.

There is no visible enemy outside of human circle. Evil does not exist outside, but does come from our own activities. Even more, we can never identify the suspect who is responsible for the increase of carbon dioxide, because the total

increase is result of accumulation of small amount of gas exhausted separately by diversified and countless individual activities of humans. Unfortunately, we must recognise that new type of threats is emerging, which may be called the modern evil. This is quite different from the past one.

There are many modern evils other than the global warming. They include the loss of biodiversity, emergence of new infectious disease, bovine spongiform encephalitis, increase of severity of accident by artefacts, and digital criminals. In spite of the diverse causes of these threats, there is a common feature among them. It is that those causes are the results of human activities, especially excessive pursuit of economic wealth, in many cases using scientific knowledge.

In case of those modern evils, the traditional method of overcoming threats is surely powerless, and nations have not yet been successful to derive systematic method applicable to fight against them with and actually forced to struggle to confront them. But there is an exceptional case which we must learn from. It is the global warming.

There have been many research works on global warming. In the 1950s, and as the accuracy of measurements of constituent of the air and temperature distribution is improved, those measured data urged scientists to warn the society or government that the increase of carbon dioxide in the air would cause harmful effects such as elevation of the sea level, change of ecological systems etc, and finally threatening the existence of human beings. The society, however, did not listen to scientists.

It was a conference in 1985 in Villach Austria where society first listened to the scientists. This was the International Conference on the Assessment of the Role of Carbon Dioxide jointly organized by WMO, UNEP, and ICSU. In the opening address of this Conference, the chairperson, Dr J. Bruce, mentioned that the Conference had two important missions concerning global warming. The first was to issue a consensus statement of the participants on global warming based on the presently available scientific knowledge, and the second was to make sound recommendations to society for action, well-grounded on the scientific evidence. It is remarkable that both missions were successfully carried out in this conference, and actually gave an impact to society. The statement was taken up by United Nations Commission, and cited in a book “Our Common Future”.

The subsequent process was very fast. The Intergovernmental Panel on Climate Change by scientists started and The Framework Convention on Climate Change was concluded under The United Nations. We may say that an official mechanism was appeared here, by which international consultation about tough problems became possible with the advice of scientists. Actually, as a result of consultations, effective actions to suppress global warming through international cooperation have been started.

Then, the decision made by United Nations to create negotiation system between Nations aiming at establishing an international agreement how to cut the emission. Conference of Parties have been organised periodically where nations are given a place for discussion. It is still difficult to get conclusion, but we can have a hope of an international agreement. I am ready to tell you that specialists started to tackle other threats of this category using the similar method.

Here, we must stress that the reason of the constructive discussion at Conference of Parties is based upon the scientific data about global warming which is continuously supplied by a lucid process conducted by a scientists' group: IPCC (Intergovernmental Panel on Climate Change).

We now speak the subject of the third category of threats, nuclear weapon. But just before going into this topic, I would like to mention my own worry.

I am not a physicist but an engineering scientist, and have studied the theory of design. So I have no chance to be involved into the Pugwash activity so far. But now, I remember that the manifesto by Russell and Einstein in 1955 gave me a great shock. The shock had broken the spell of atomic bomb that was an invisible but inevitable barrier for me, a young man who was going to decide the profession: to be a scientist or not.

It is now 60 years since then, and when I read the manifesto again I found that the spirit of the manifesto remains absolutely correct and still I learn a lot from the sentences how scientists should act in future.

My worry is exactly the fact that I learn a lot from the Manifesto still after 60 years. This implies that there are still many proposals within the sentences, which were not realised after 60 years. Those proposals were not written explicitly but potentially and we can read them.

Returning to the two categories of threats I mentioned before, they were conquered by the cooperation between scientists and society. In the first

category, scientists had offered systematic useful knowledge to society. In the second category, society could develop a useful strategy with the aid by scientific academies, not only natural science but also economics, sociology etc., which made earnest dialogues after their discovery of the emergence of an evil, although it took more than 30 years after discovery.

I think many of you have noticed that the issue of scientists' advice to government and society is intensively discussed in international arena recently. It is due to the fact that many of the political or societal decisions cannot be conducted without scientific evidences. Especially, in case of subjects which influence risks of human health, the scientific advice is essential. Some countries have successful history of scientific advice to head of state, and many others started to implement own advice system. Moreover, open forums have been organised to discuss the system internationally among scientific advisors.

In the Russell-Einstein Manifesto, there is a grievous message that scientists should work more. It says that "We have found that the men who know most are the most gloomy". As scientists belong to the people who know most, they must act. All scientists, not only of nuclear science but of other diversified fields are responsible to be involved in the action.

In spite of this message in Russel-Einstein Manifesto, the human endeavour toward the reduction of nuclear weapon has been mainly conducted politically without scientific evidence. We learned that the consensus driven neutral advices by scientists with scientific evidences have been essential to conquer the big evils. We learned it from experiences in other categories.

Then, what are the scientific evidences necessary for the reduction of nuclear weapon, and abolition of war?

This is the most difficult question asked of us, scientists. In the first category, the threats were dealt with by single discipline of science. For the second category, several disciplines were necessary. However, in the third category, we need a new aspect composed of all scientific disciplines. By all scientific disciplines, I mean natural sciences, technological sciences, medical sciences, social sciences, and humanities, and perhaps society itself. The new aspects may be as follows: integration of disciplines, design-oriented theories, evolution of knowledge, equal -footing knowledge between creator and user, and so on. Advice to actors in society is expected to be given by science academies where scientists collaborate to derive consensus advice based on evidence.

Consensus is an important point. If society is flooded with diversified advice proposed by individual scientists, an actor may be puzzled. Moreover, some conflicts between groups in society will be escalated by arbitrary use of advice which is convenient for them.

We, scientists, are not well trained in collaboration overarching different disciplines, but I would say, that it is the time for us scientists to work together to derive the useful evidence for the action to construct the peaceful future.

ラッセル・アインシュタイン宣言

人類が直面している悲劇的な情勢の中、科学者による会議を召集し、大量破壊兵器開発によってどれほどの危機に陥るのかを予測し、この草案の精神において決議を討議すべきであると私たちは感じている。

私たちが今この機会に発言しているのは、特定の国民や大陸や信条の一員としてではなく、存続が危ぶまれている人類、いわば人という種の一員としてである。世界は紛争にみちみちている。そこでは諸々の小規模紛争は、共産主義と反共産主義との巨大な戦いのもとに、隠蔽されているのだ。

政治的な関心の高い人々のほとんどは、こうした問題に感情を強くゆすぶられている。しかしもしできるならば、皆ににそのような感情から離れて、すばらしい歴史を持ち、私たちのだれ一人としてその消滅を望むはずがない 生物学上の種の成員としてのみ反省してもらいたい。

私たちは、一つの陣営に対し、他の陣営に対するよりも強く訴えるような言葉は、一言も使わないようにこころがけよう。すべての人がひとしく危機にさらされており、もし皆がこの危機を理解することができれば、ともにそれを回避する望みがあるのだ。

私たちには新たな思考法が必要である。私たちは自らに問いかけることを学ばなくてはならない。それは、私たちが好むいづれかの陣営を軍事的勝利に導く為にとられる手段ではない。というのも、そうした手段はもはや存在しないのである。そうではなく、私たちが自らに問いかけるべき質問は、どんな手段をとれば双方に悲惨な結末をもたらすにちがいない軍事的な争いを防止できるかという問題である。

一般の人々、そして権威ある地位にある多くの人々でさえも、核戦争によって発生する事態を未だ自覚していない。一般の人々はいまでも都市が抹殺されるくらいにしか考えていない。新爆弾が旧爆弾よりも強力だということ、原子爆弾が 1 発で広島を抹殺できたのに対して水爆なら 1 発でロンドンやニューヨークやモスクワのような巨大都市を抹殺できるだろうことは明らかである。

水爆戦争になれば大都市が跡形もなく破壊されてしまうだろうことは疑問の余地がない。しかしこれは、私たちが直面することを余儀なくされている小さな悲惨事の 1 つである。たとえロンドンやニューヨークやモスクワのすべての市民が絶滅したとしても 2、3 世紀のあいだには世界は打撃から回復するかもしれない。しかしながら今や私たちは、とくにビキニの実験以来、核爆弾はこれまでの推測よりもはるかに広範囲にわたって徐々に破壊力を広げるであろうことを知っている。

信頼できる権威ある筋から、現在では広島を破壊した爆弾の 2500 倍も強力な爆弾を製造できることが述べられている。もしそのような爆弾が地上近くまたは水中で爆発すれば、放射能をもった粒子が上空へ吹き上げられる。そしてこれらの粒子は死の灰または雨の形で徐々に落下してきて、地球の表面に降下する。日本の漁夫たちとその漁獲物を汚染した

のは、この灰であった。そのような死をもたらす放射能をもった粒子がどれほど広く拡散するのかは誰にもわからない。しかし最も権威ある人々は一致して水爆による戦争は実際に人類に終末をもたらす可能性が十分にあることを指摘している。もし多数の水爆が使用されるならば、全面的な死滅がおこる恐れがある。――瞬間的に死ぬのはほんのわずかだが、多数のものはじりじりと病気の苦しみをなめ、肉体は崩壊してゆく。

著名な科学者や権威者たちによって軍事戦略上からの多くの警告が発せられている。にもかかわらず、最悪の結果が必ず起こるとは、だれも言おうとしていない。実際彼らが言っているのは、このような結果が起こる可能性があるということ、そしてだれもそういう結果が実際起こらないとは断言できないということである。この問題についての専門家の見解が彼らの政治上の立場や偏見に少しでも左右されたということは今まで見たことがない。私たちの調査で明らかになったかぎりでは、それらの見解はただ専門家のそれぞれの知識の範囲にもとづいているだけである。一番よく知っている人が一番暗い見通しをもっていることがわかった。

さて、ここに私たちが皆に提出する問題、きびしく、恐ろしく、おそらく、そして避けることのできない問題がある――私たちは人類に絶滅をもたらすか、それとも人類が戦争を放棄するか？人々はこの二者択一という問題を面と向かってとり上げようとしないであろう。というのは、戦争を廃絶することはあまりにもむずかしいからである。

戦争の廃絶は国家主権に不快な制限を要求するであろう。しかし、おそらく他のなにものにもまして事態の理解をさまたげているのは、「人類」という言葉が漠然としており、抽象的だと感じられる点にあろう。危険は単にぼんやり感知される人類に対してではなく、自分自身や子どもや孫たちに対して存在するのだが、人々はそれをはっきりと心に描くことがほとんどできないのだ。人々は個人としての自分たちめいめいと自分の愛する者たちが、苦しみながら死滅しようとする切迫した危険状態にあるということがほとんどつかめていない。そこで人々は、近代兵器さえ禁止されるなら、おそらく戦争はつづけてもかまわないと思っている。

この希望は幻想である。たとえ水爆を使用しないというどんな協定が平時にむすばれていたとしても、戦時にはそんな協定はもはや拘束とは考えられず、戦争が起こるやいなや双方とも水爆の製造にとりかかるであろう。なぜなら、もし一方がそれを製造して他方が製造しないとすれば、それを製造した側はかならず勝利するにちがいないからである。軍備の全面的削減の一環としての核兵器を放棄する協定は、最終的な解決に結びつくわけではないけれども、一定の重要な役割を果たすだろう。第一に、およそ東西間の協定は、緊張の緩和を目指すかぎり、どんなものでも有益である。第二に、熱核兵器の廃棄は、もし相手がこれを誠実に実行していることが双方に信じられるとすれば、現在双方を神経的な不安状態に落とし入れている真珠湾式の奇襲の恐怖を減らすことになるであろう。それゆえ私たちは、ほんの第一歩には違いないが、そのような協定を歓迎すべきなのである。

大部分の人間は感情的には中立ではない。しかし人類として、私たちは次のことを銘記しなければならない。すなわち、もし東西間の問題が何らかの方法で解決され、誰もが――共産主義者であろうと反共産主義者であろうと、アジア人であろうとヨーロッパ人であろうと、または、アメリカ人であろうとも、また白人であろうと黒人であろうと――、出来うる限りの満足を得られなくてはならないとすれば、これらの問題は戦争によって解決されてはならない。私たちは東側においても西側においても、このことが理解されることを望んでいる。

私たちの前には、もし私たちがそれを選ぶならば、幸福と知識の絶えまない進歩がある。私たちの争いを忘れることができぬからといって、そのかわりに、私たちは死を選ぶのであろうか？私たちは、人類として、人類に向かって訴える――あなたがたの人間性を心にとどめ、そしてその他のことを忘れよ、と。もしそれができるならば、道は新しい楽園へむかってひらけている。もしできないならば、あなたがたのまえには全面的な死の危険が横たわっている。

決議

私たちは、この会議を招請し、それを通じて世界の科学者たちおよび一般大衆に、つぎの決議に署名するようすすめる。

「およそ将来の世界戦争においてはかならず核兵器が使用されるであろうし、そしてそのような兵器が人類の存続をおびやかしているという事実からみて、私たちは世界の諸政府に、彼らの目的が世界戦争によっては促進されないことを自覚し、このことを公然とみとめるよう勧告する。したがってまた、私たちは彼らに、彼らのあいだのあらゆる紛争問題の解決のための平和的な手段をみいだすよう勧告する。」

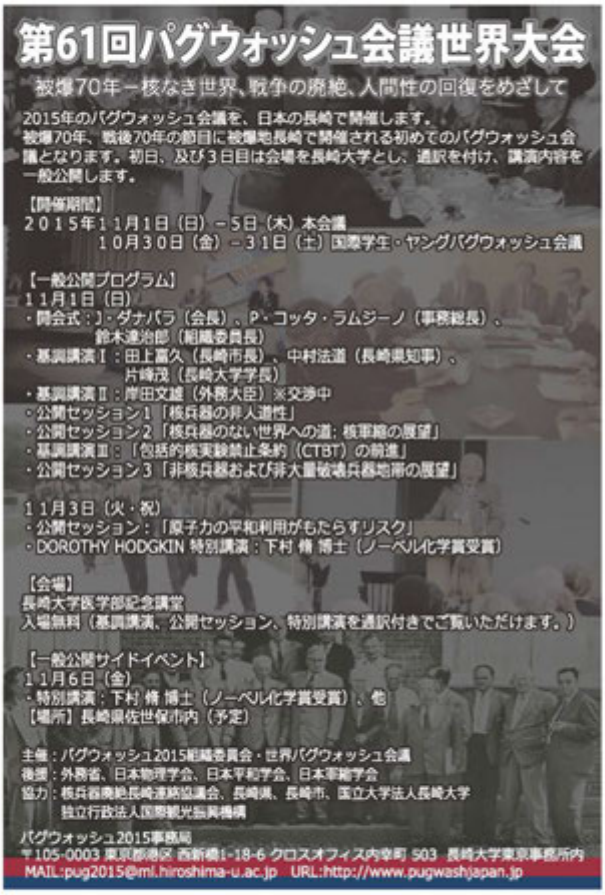
1955 年 7 月 9 日　ロンドンにて

マックス・ボルン教授（ノーベル物理学賞）
Ｐ・Ｗ・ブリッジマン教授（ノーベル物理学賞）
アルバート・アインシュタイン教授（ノーベル物理学賞）
Ｌ・インフェルト教授
Ｆ・ジョリオ・キュリー教授（ノーベル化学賞）
Ｈ・Ｊ・ムラー教授（ノーベル生理学・医学賞）
ライナス・ポーリング教授（ノーベル化学賞）
Ｃ・Ｆ・パウエル教授（ノーベル物理学賞）
Ｊ・ロートブラット教授（ノーベル平和賞）
バートランド・ラッセル卿（ノーベル文学賞）
湯川秀樹教授（ノーベル物理学賞）

広報資料

長崎電気軌道に広告として中吊り掲載(10/26(月)-11/4(水))

長崎市民向けに作成した PR カード



広報用のリーフレットと缶バッジ

会議グッズとスタッフジャンパー

PUGWASH NAGASAKI 2015

The 61st Pugwash Conference on Science and World Affairs

©2016 Pugwash2015 組織委員会

本文中の写真は、長崎市、長崎大学核兵器廃絶研究センター、演能団体鋏仙会、諮問評議会委員の沢田昭二氏、藤垣裕子氏、長崎実行委員会委員長の調漸氏、組織委員会の栗田禎子氏、稲垣知宏氏、実行委員会の榎本浩司氏他に提供いただきました。

【名称】第 61 回パグウォッシュ会議世界大会報告書

【発行者】パグウォッシュ 2015 組織委員会

【e-mail】pugwash2015@ml.hiroshima-u.ac.jp

【URL】http://www.pugwashjapan.jp

【編集】パグウォッシュ 2015 事務局、パグウォッシュ 2015 実行委員会、パグウォッシュ 2015 長崎実行委員会

【紙面デザイン】村上祐子

【発行日】2016 年 3 月 31 日